【目次】

Ⅰ　序論
1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
2. 伝統文化の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
3. 研究の目的及び方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

Ⅱ　本論
1. 津軽三味線からみる学校教育における伝統芸能教育の課題と可能性
1－1　１章における調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
1－2　津軽三味線継承の意義と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
1－3　青森県の学校現場における津軽三味線取り組みの現状・・・・・・・・・37
1－4　朝陽小学校の津軽三味線クラブの取り組み・・・・・・・・・・・・・・・41
1－5　小結　伝統芸能を継承する学校現場とさらなる取り組みに向けての提案
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

2. 弘前ねぷたからみる祭り継承の課題と可能性
2－1　２章における調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
2－2　祭りを継承する意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
2－3　茂森新町ねぷた同好会の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・71
2－4　茂森新町ねぷた同好会の事例からみる、弘前ねぷた祭りの継承における地域コミュニティ継承の可能性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
2－5　小結　祭り継承に向けての提案・・・・・・・・・・・・・・・・・・124

3. 角館祭りやま行事からみる祭り継承への課題と可能性
3－1　３章における調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
3－2　角館祭りやま行事の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
3－3　角館祭りやま行事の継承課題　―卒業研究から―・・・・・・・・・・・140
3－4　無尽講にみる地域コミュニティが角館やま行事の継承に与える影響と継承の可能性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
3－5　小結　祭り継承者が行うまち育て ・・・・・・・・・・・・・・・・・150

Ⅲ　結論
伝統文化継承によるまち育て・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・158

I　序論

1. はじめに

2. 伝統文化の概要

3. 研究の目的及び方法

Ⅰ－序論

1，はじめに

現在、多くの自治体で少子高齢化が進み、人口減少が進む中で働き手の減少や財政難などにより地域活力が低下している。そうした疲弊した地域を再生し、地域活力を向上させるためには、その地域独自に活用可能な資源である“地域資源”を活用していく必要がある。地域資源とは、農林水産物や自然資源、観光資源、伝統文化などである。地域資源の中でも地域独自に親から子へ子から孫へ代々受け継がれてきた伝統文化は他地域では真似できない唯一無二の地域資源になり得る。一方で、伝統文化は観光集客に活用すべきであるという風潮がある。文化庁においても、平成 24 年、文化遺産を生かした観光復興・地域活性化事業において補助金を支給したり[1]、東京都などでも外国人向けの伝統文化・芸能短時間体験プログラム[2] などを行い、観光集客のためのツールとして伝統文化を活用している事例も多く見られる。しかし、伝統文化を継承している人にとっては、観光客のために文化を継承し続けているのであろうか。伝統文化の一部である伝統芸能について、臼井（2005）[3]によると、「伝統芸能については 、文化財や観光資源と見るのではなく、社会の紐帯としていかに有用に機能するか 、という新たな視点が求められている。伝統芸能は地域を活性化させるためのソフトウェアという視点である。」と述べている。

もともと観光客を呼び込むために伝統文化（芸能）が発展してきたわけではない。伝統文化は、地域の中で生活していくための知恵や風習が長い時間をかけて文化となったものである。その文化が現代社会の希薄な人間関係により、消滅の可能性が高いものも存在する。文化を守る“地域”とそこに住む人間によって生み出された“伝統文化”は決して切り離すことのできない存在であり、したがって、臼井が述べるように、伝統文化（芸能）は社会の紐帯として地域を再生するための新たな可能性として注目することができる。

---

[1] 文化庁文化財部伝統文化課（2012）「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業について」

[2] 「アーツカウンシル東京の事業紹介　外国人向け伝統文化・芸能短時間体験プログラム」　（2017）　https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/what-we-do/creation/festivals/traditional-experience/18068/（2018 年 1 月閲覧）

[3] 臼井　喜法（2005）「地域活性化のためのソフトウェアとしての伝統芸能」

2，伝統文化の概要

（1）伝統文化の定義

及川（2013）によると、伝統文化とは広く「世代を超えて受け継がれた精神性」や「人間の行動様式や思考、慣習などの歴史的存在意義」と定義され、人間として生存・生活するなかで、社会全体として共有しながら受け継がれてきた生活様式や、種々の習慣・慣習や生活様式、生活に根付いた技芸や風習も長い歴史にもまれながら伝統という形で受け継がれてきたものである[4]。例えば、人々が生活していく中で身近な建物や風習として各地域で独自に発展した祭りもその一部である。

その伝統文化を体系化していくと、日常生活の中で継承される「ケ」と祭りのように非日常の中で継承される「ハレ」の文化が存在する。さらに、建造物のような「有形」の文化と伝統工芸などを継承するための技術のような「無形」のものに分類でき、それを図に表すと以下のようになる[5]。

図 1伝統文化の体系

山下祐作　「伝統文化が息づく地域社会の維持・継承」より作成

4　及川典子　（2013）「伝統文化とは」JTCO 日本伝統文化振興機構 www.jtco.or.jp/tradition_culture/?id=5（2017 年 11 月閲覧）

5 山下祐作　（2005）「伝統文化が息づく地域社会の維持・継承」　p.76-87

図１をみると、日常生活に使われる建造物や伝統工芸品は有形であり、伝統技術や郷土料理などは無形の者であると言える。さらに、祭りや伝統芸能などは非日常性を含むことがわかる。

（2）伝統文化を取り巻く環境の変化

（1）で述べたように、伝統文化は人間が生活していく上で継承され、各地域で独自に発展してきたものである。しかし、現在は人々の生活様式の変化により、地域に伝わる伝統文化は継承が危ぶまれているものも存在する。伝統文化の継承に影響していると考えられる要因を以下に挙げる。

①人口減少

各地方都市で人口減少が進んでいることが問題になっている。その現状を以下に示す（表 1）。

表 1　東北地方人口減少割合

都道府県	平成17年	22年	人口増減率（平成17～22年）	27年	人口増減率（平成22～27年）
単位	（1,000人）	（1,000人）	（%）	（1,000人）	（%）
全国	**127,768**	**128,057**	**0.2**	**127,095**	**-0.8**
青森	1,437	1,373	-4.4	1,308	-4.7
岩手	1,385	1,330	-4.0	1,280	-3.8
宮城	2,360	2,348	-0.5	2,334	-0.6
秋田	1,146	1,086	-5.2	1,023	-5.8
山形	1,216	1,169	-3.9	1,124	-3.9
福島	2,091	2,029	-3.0	1,914	-5.7
東京	12,577	13,159	4.6	13,515	2.7

出典：「人口推移」（総務省統計局）より作成

表 1 より、人口減少が著しく進む地域は都道府県のなかでも特に人口増減率（平成 22～27 年度）の割合が秋田県で最も低く-5.8%であり、表には記載が無いが 47 都道府県の中でも最も低かった。続く福島県は-5.7%であるが、これは平成 23 年に起きた東日本大震災に伴う福島県第一原子力発電所の事故が大きく影響していることが考えられるため、他地域の人口増減率と単純比較はできないと考えられる。さらに、続いて青森県の人口増減率の割合も-4.7%であり、他の県も宮城県を除いて全国平均-0.8%を大きく下回り、東北地方においてかなり人口減少が深刻な問題であると言える。

さらに、各都道府県の人口における 15～64 歳までの生産年齢人口割合と 0～14 歳までの年少人口割合を以下の表にまとめる（表 2）。

表 2　東北地方の生産年齢人口、年少人口の割合

都道府県	0～14歳	15～64	65歳以上	合計	生産年齢人口割合	年少人口割合
単位	(1,000人)	(1,000人)	(1,001人)	(1,000人)	(%)	(%)
全　国	16,233	77,850	33,000	127,083	61.3	12.8
青森県	155	784	383	1,322	59.3	11.7
岩手県	156	749	380	1,285	58.3	12.1
宮城県	297	1,458	573	2,328	62.6	12.8
秋田県	112	587	339	1,038	56.6	10.8
山形県	139	653	338	1,130	57.8	12.3
福島県	241	1,157	537	1,935	59.8	12.5
東京都	1,517	8,862	3,011	13,390	66.2	11.3

出典：「人口推移」（総務省統計局）より作成

表 2 をみると、秋田県が両者すべての割合が最も低く、青森県は、生産年齢人口の割合は比較的高いが、年少人口の割合が低いことが特徴である。これら、宮城県を除いて東北の 5 県において、すべてが生産年齢人口及び年少人口の割合が全国平均を下回っていることが明らかとなった。

全国平均よりも、人口減少が著しく、生産人口年齢及び年少人口の割合が少ないということは、伝統文化を継承する人の減少も意味している。そのため、地方の継承者が少なく後継者がいない伝統文化は現在継承している人々の高齢化によって、継承が危ぶまれることになる。

②コミュニティの希薄化

さらに、①人口減少のみならず、伝統文化の継承に危機をもたらすものにコミュニティの希薄化という問題が挙げられる。コミュニティの希薄化は、人々の生活形態の変化によってもたらせることが多い。国土交通省が行った調査では、都市部、地方部における地域コミュニティの状況を把握するために行った調査によると、15 大都市(注)においては、地域コミュニティはかなり衰退しているとともに、町村部においても、15 大都市ほどではないものの、地域コミュニティが衰退している状況にある（図 2）という結果が発表されている[6]。

[6] 国土交通省（2005）「平成 17 年度　国土交通白書」

さらに、地方部における地域コミュニティの衰退要因として、国土交通省（2005）によると、地方部では、若年層を中心に都市部への人口流出が目立ち、過疎化や高齢化が進行していることから、地域内での世代を超えた交流が困難になるとともに、地域コミュニティの担い手の減少を引き起こしている。また、学校の行事等を通じてコミュニティ活動のきっかけとなる子どもの減少も顕著になっている（図 3)。さらに、自動車社会の進展に伴い生活圏域が拡大したことも、地域とのかかわりが少なくなっている要因の一つと考えられる。また、子どものいる世帯比率の減少は、三大都市圏、地方圏共通の傾向である。しかしながら近年、特に地方圏においては、子どものいる世帯数の減少傾向が強いと示されている。

ここで、地域における近所付き合いの差を見るために、国土交通省が出した「平成 17 年度国土交通白書」を下に、「地域の人々との付き合い」を 15 大都市、それ以外の市町村、町村に分けて円ケート調査を行ったデータを示す（図 2)。

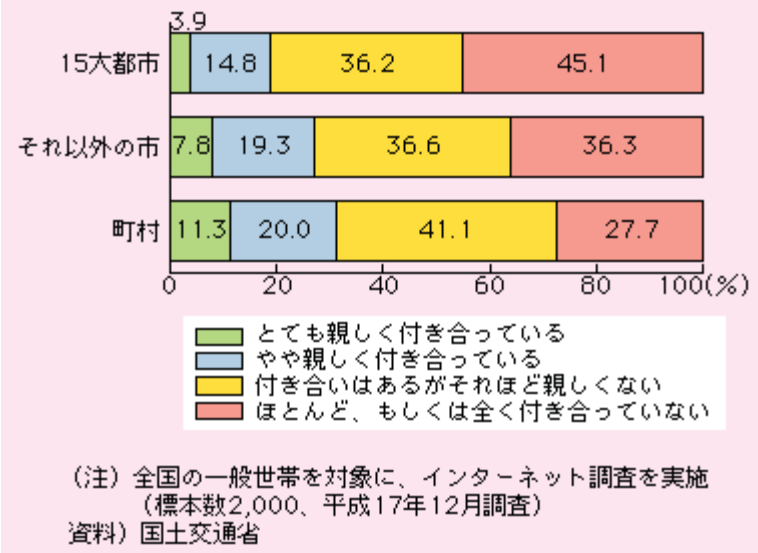


図 2　地域の人々との付き合い

出典：国土交通省　「平成 17 年度　国土交通白書」

www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h17/hakusho/h18/html/H1022100.html（2018 年 1 月閲覧）

図 2 の結果から、地域の人と「とても親しく付き合っている」、「やや親しく付き合っている」を合計して、地域の人と親しく付き合っている割合は 15 大都市では、18.7%、それ以外の市では、21.7%、町村では 31.3%となっており、都市が大きくなればなるほど近所づきあいの割合は、かなり低いことが明らかとなった。

また、子どもがいる世帯は、学校との繋がりがあるため、同じ子どもをもつ保護者や住民とも関係は強まると予想される。ここで、同じく国土交通の平成 17 年度国土交通白書のデータから、地方における子どもの世帯数の推移（図 3)、学齢期の子どもの有無による地域との関わり方（図 4）に示す。

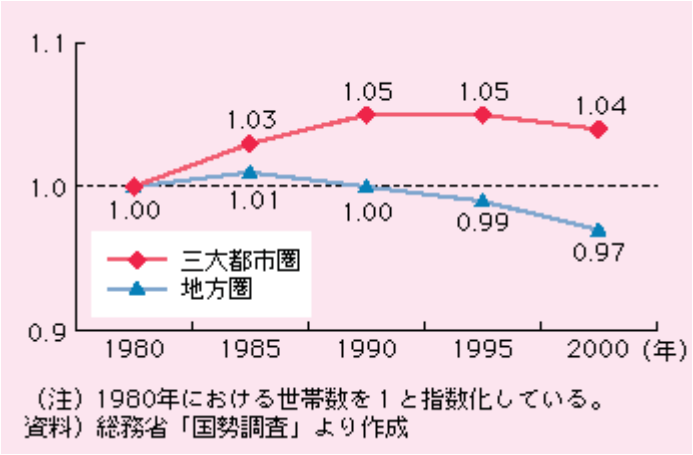


図 3 三大都市圏、地方における子どものいる世帯数の推移

出典：国土交通省　「平成 17 年度　国土交通白書」

www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h17/hakusho/h18/html/H1022100.html（2018 年 1 月閲覧）

図 3 より、1980 年を基準とした時、子どものいる世帯数の推移は三大都市圏では多くなっている一方で、地方では子どもが減少している。

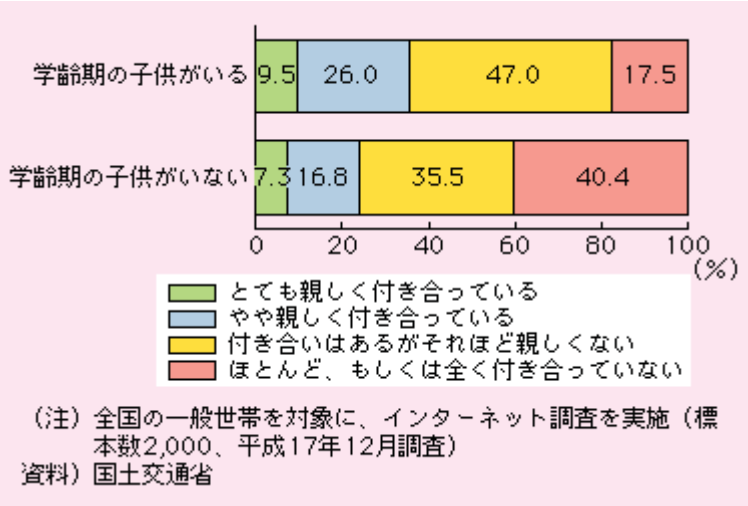


図 4　学齢期の子どもの有無による地域の人々との付き合い

出典：国土交通省　「平成 17 年度　国土交通白書」

www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h17/hakusho/h18/html/H1022100.html（2018 年 1 月閲覧）

図 4 のデータから、学齢期の子どもがいる世帯では、35.5%の世帯が地域の人々と親しく付き合っていると回答している。しかし、学齢期の子どもがいない世帯では、地域の人々と親しく付き合っていると回答した割合は 24.1%と子どもが学齢期の子どもの有無で、親しい近所づきあいのあり方と 10%もの差がでた。

これら、図 1～4 のデータから、地域のコミュニティを形成するために子どもと子どもが通う学校の役割が大きいことが明らかとなった。しかし、子どもが減少している現在、どのように地域のコミュニティを再構築していくことが大きな課題となる。このコミュニティが希薄になっていることが、地域に伝わる伝統文化の継承に大きく影響していることは明らかである。

（3）伝統文化の保存のための法律

全国各地で消滅の危機を迎えている多くの伝統文化を守るために、文部科学省が昭和 25 文化財保護法（昭和 29 年、昭和 50 年改正）を制定し、その法律に基づき、施策を行っている。以下に文化財保護法から得られる文化財の体系図を示す。（図 5）

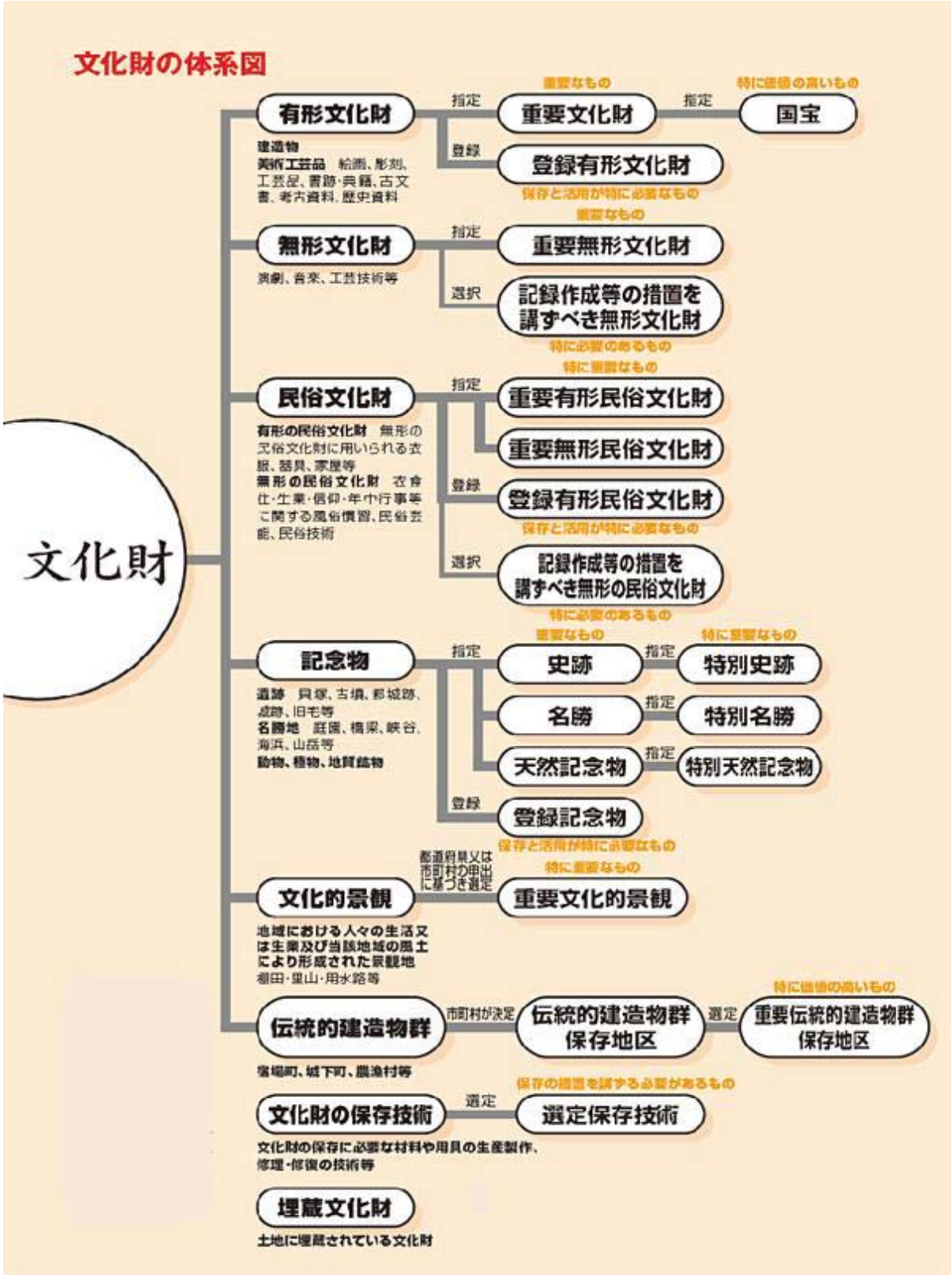


図 5　文化財の体系図（文部科学省文化財ホームページより）

出典：文部科学省文化財

図 5 からこの文化財保護法は建造物や美術工芸品にみられるような「有形文化財」、遺跡や名勝地、動物・植物・地質鉱物を含む「記念物」、「文化的景観」、「伝統的建造物群」に含まれるような有形の文化財と演劇や音楽、無形の民俗文化財に用いられる衣服・器具・家屋等の有形の民俗文化財と衣食住、生業・信仰・年中行事に関する風俗慣習・民俗芸能・民俗技術にみられる「民俗文化財」、工芸技術などにみられる「無形文化財」などの無形のものに分類できる。

この法律により、有形の文化財は、保管や管理、保存活用施設の整備支援が行われ、無形の文化財は伝承者育成、記録の作成などの事業に対しての補助が行われている。

法律に基づき、文化財を保護するために H29 年度算出された文化財予算を表すと、以下のようになる[7]。

表 3 平成 29 年度文化財予算【単位：百万円】

無形文化財	建造物	美術工芸品	有形の民俗文化財	記念物	その他	**合計**
2969	14779	2583	73	21568	4948	**46920**

出典：文化庁文化財部「平成 27 年度文化財行政講座資料　文化財補助金関係資料」より作成

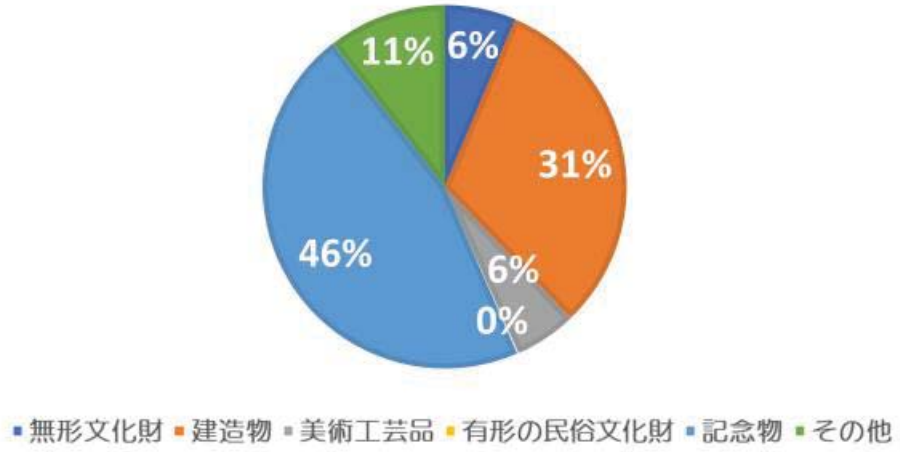


図 6　平成 29 年度文化財予算の割合

出典：文化庁文化財部「平成 27 年度文化財行政講座資料　文化財補助金関係資料」より作成

[7] 文化庁文化財部（2015）「平成 27 年度文化財行政講座資料　文化財補助金関係資料」p.14～p.25

図 6 を見ると、記念物が 46%、続いて建造物約 31%で計 80%近く予算が使われていることがわかる。それは、文化財保護のための土地の買い上げ、建物の修繕に多く予算が使われていることが明らかになった。その中で、無形文化財の予算の割合を考えると、全体の割合の 6%に止まっている。無形文化財の予算のほとんどは後世に伝統文化を残すため、記録データとして文化財を記録するものや子どもたちに文化財を体験させるものである。このことから、伝統文化において継承するために活用される予算は建造物や記念物など有形の目に見える、どのようにすれば保護ができるのかということが明らかである文化財に対して多く支給され、逆に継承に多く年数を要するものや無形文化財のように目に見えず、お金を投じても確実に継承者が育成できる保証のない無形文化財に対して予算は多く使われていない。しかし、時間のかかる文化財こそ、すぐには次世代の後継者を見つけることができないため、早急な支援が必要である。その上、補助金をただ与えるだけで、後継者が育成されるわけではない。後継者を育成するためには、伝統文化を自ら極めていきたいと思う本人の意思が必須であり、さらに、その道を極めるためにはかなりの努力が必要である。以上のことから、その伝統文化を継承するためには継承者を育てる主体となる地域との連携は必要不可欠であるといえる。

ここで、補助金をなどによる支援に頼らず、継承していかなければならない、民俗文化財を以下で分類する。

国指定重要無形民俗文化財を国指定文化財ホームページより、都道府県無形民俗文化財を各都道府県のホームページより網羅的に抽出し、文化財指定主体、継承団体等、計 8 つの項目に基づいて分類した。分類項目は（4）に示し、分類項目にそって抽出した結果は（5）に示す。

（4）無形文化財分類項目

表 4　無形民俗文化財分類項目

	体系分類	記載例
1	伝統文化指定主体	国または各都道府県名
2	伝統文化が継承されている地名	市町村等
3	伝統文化の名称	
4	区分	国指定重要無形文化財または都道府県指定無形民俗文化財
5	伝統文化の種類Ⅰ	風俗慣習、民俗芸能、伝統技術
	伝統文化の種類Ⅱ	伝統技術、祭礼、人生・儀礼、娯楽・競技、年中行事、風流、生産・生業、社会生活（民俗知識）、舞、神楽、獅子舞、踊り、歌舞伎、音楽、人形、田楽、能、延年・おこない、芝居、渡来芸・舞台芸、その他
6	保存団体、継承団体	保存会等
7	継承年数 （記載があったもののみ）	
8	文化財指定日	

【5 伝統文化の種類Ⅰの特徴】
※風俗慣習…衣食住・生業・信仰・年中行事に関する慣習
※民俗芸能…民俗行事に伝承された民俗芸能
※民俗技術…衣食住・生業に関する技術

以上の８つに分類し、抽出を行った。ただし、伝統文化の分類Ⅱにおいては国指定重要無形文化財で分類がすでに行われていたのを参考に、各都道府県無形民俗文化財において分類を行った。必ずしも一つの分類に限定されず、広く様々な分類に跨がって継承されていた伝統文化は、登録されている内容から、国指定重要無形文化財の分類基準に最も近いと思われるテーマに分類した。

（5）文化財の分類結果とその考察

（4）で示した通り抽出を行い、その結果を以下に示す。
まず、国指定重要無形民俗文化財及び都道府県無形民俗文化財の地区での登録数は以下の通りである。（表 5）

表 5　国指定重要無形民俗文化財及び都道府県無形民俗文化財の地方区分別登録件数

	国指定重要無形民俗文化財《件》	都道府県指定無形民俗文化財《件》
北海道・東北地方	55	260
関東地方	36	268
中部地方	75	311
関西地方	46	221
中国地方	23	208
四国地方	9	111
九州・沖縄地方	55	260
合計	299	1639

全国の国指定重要無形民俗文化財の登録件数は 299 件、各都道府県無形民俗文化財は 1639 件あった。

各都道府県の民俗文化財登録は、国指定重要無形文化財に指定されないが地域として重要だと考えられる民俗文化財を都道府県ごとに登録されるものである。

さらに、国指定重要無形民俗文化財と都道府県無形民俗文化財の中で、⑤伝統文化の種類Ⅰ【風俗慣習、民俗芸能、伝統技術】を分類し円グラフで示すと以下のようになる。（グラフ 2）

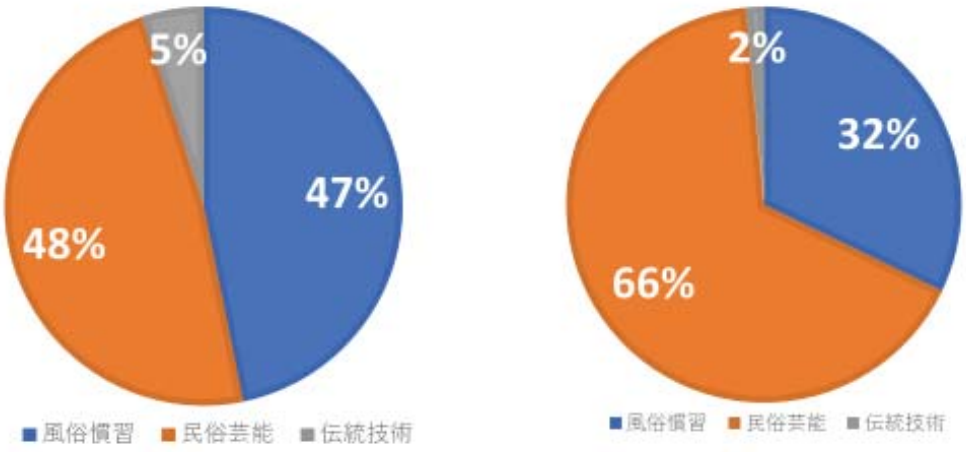


図 7　国指定重要無形民俗文化財及び都道府県無形民俗文化財の割合

上記した図 7 から、国指定重要無形民俗文化財と都道府県無形民俗文化財どちらも民俗文化財の中でも、風俗慣習・民俗芸能の割合が多いことがわかる。

また、国指定重要無形民俗文化財のうち、風俗慣習についてさらに詳しく⑤伝統文化の種類Ⅱ【祭礼、人生・儀礼、娯楽・競技、年中行事、風流、生産・生業、社会生活（民俗知識）、その他】について分類し、表から円グラフに示すと以下のようになる（表 6）（図 8。

※風俗慣習の詳しい割合をみるために、【民俗芸能・伝統技術】は合計を円グラフに反映させている。

表 6　国指定重要無形民俗文化財風習慣習割合

祭礼	67
人生・儀礼	6
娯楽・競技	8
年中行事	38
風流	6
生産・生業	9
神事	0
社会生活（民俗知識）	2
その他	8
民俗芸能	140
伝統技術	15
合計	**299**

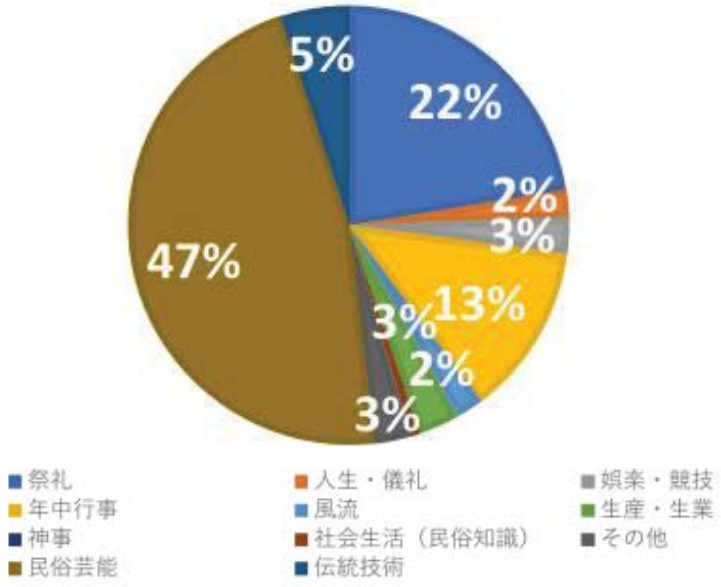


図 8　国指定重要無形民俗文化財風習慣習割合

図 8 より、最も祭礼の割合が高く（22%）、続いて年中行事の割合（13%）が高い。

また、都道府県無形民俗文化財のうち、風俗慣習についてさらに詳しく⑤伝統文化の種類Ⅱ【祭礼、人生・儀礼、娯楽・競技、年中行事、風流、生産・生業、社会生活（民俗知識）、その他】について分類し、表から円グラフに示すと以下のようになる（表 7）（図 9）。

表 7　都道府県無形民俗文化財風習慣習割合

祭礼	298
人生・儀礼	27
娯楽・競技	54
年中行事	25
風流	15
生産・生業	1
神事	96
社会生活（民俗知識）	0
その他	11
民俗芸能	1088
伝統技術	24
合計	**1639**

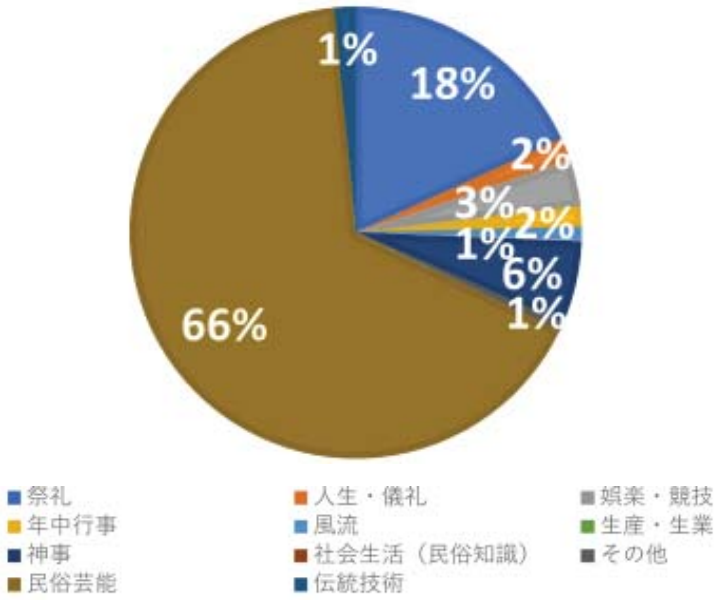


図 9　都道府県無形民俗文化財風習慣習割合

図 9 から、祭礼の割合（18%）の割合が高く、それ以外の分類はそれほど割合にほとんど差がなかった。

この結果から、双方で祭礼【祭り】の割合が最も高く、地域の中で祭礼が重要な役割を示していることがわかる。

また、国指定重要無形民俗文化財の民俗芸能についてさらに詳しく⑤伝統文化の種類Ⅱ【舞、神楽、獅子舞、踊り、歌舞伎、音楽、人形、田楽、能、延年・おこない[8]、芝居、渡来芸・舞台芸、その他】について分類し、表から円グラフに示すと以下のようになる（表8）（図 11）。

8）延年・おこない…寺院において大法会の後に僧侶や稚児によって演じられた日本の芸能。 単独の芸能ではなく、舞楽や散楽、台詞のやりとりのある風流、郷土色の強い歌舞音曲や、猿楽、白拍子、小歌など、貴族的芸能と庶民的芸能が雑多に混じり合ったものの総称である。

※民俗文化財の全体の中での、民俗芸能の割合をみるために、【風俗慣習・伝統技術】は合計を円グラフに反映させている。

表 8　国指定重要無形民俗文化財民俗芸能割合

風俗慣習	144
舞	12
神楽	23
獅子舞	7
踊り	3
歌舞伎	0
音楽	1
人形	3
田楽	23
能	4
延年・おこない	5
芝居	1
渡来芸・舞台芸	22
風流	22
その他	14
伝統技術	15
合計	**299**

8 ブリタニカ国際大百科事典

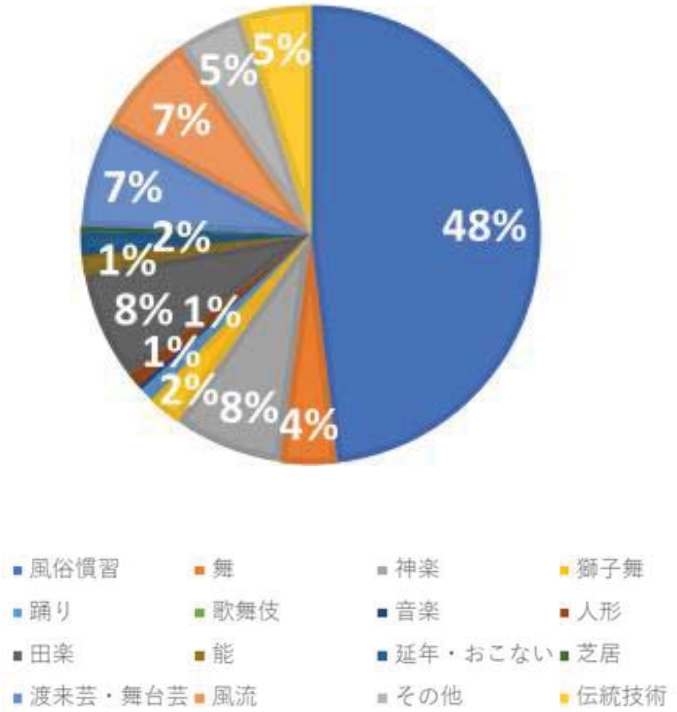


図 10　国指定重要無形民俗文化財風習慣習割合

表 8 及び図 10 より、田楽と神楽の割合が最も高く（8%）、続いて、渡来芸・舞台芸と風流の割合が高い（7%）。

また、国指定重要無形民俗文化財と都道府県無形民俗文化財のうち、民俗芸能についてさらに詳しく⑤伝統文化の種類Ⅱ【舞、神楽、獅子舞、踊り、歌舞伎、音楽、人形、田楽、能、延年・おこない、芝居、渡来芸・舞台芸、その他】について分類し、表から円グラフに示すと以下のようになる。

表 9　都道府県無形民俗文化財民俗芸能割合

風俗慣習	527
舞	85
神楽	226
獅子舞	182
踊り	349
歌舞伎	59
音楽	95
人形	45
田楽	7
能	10
延年・おこない	3
芝居	5
渡来芸・舞台芸	0
風流	2
その他	20
伝統技術	24
合計	**1112**

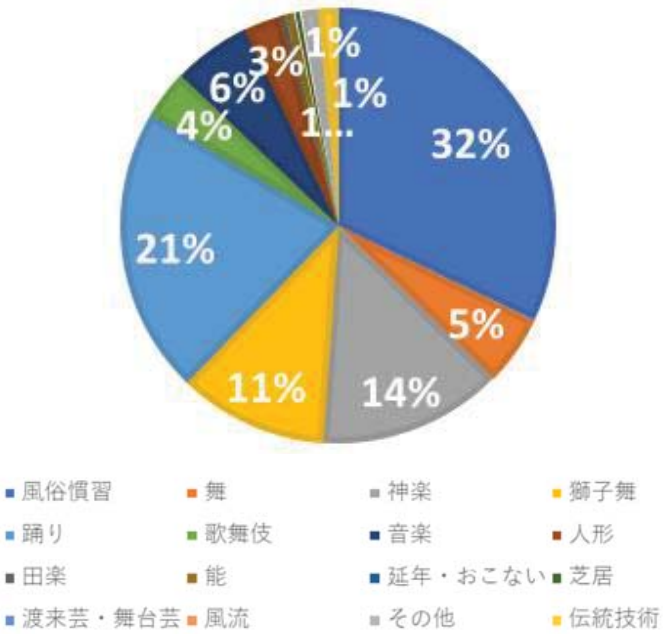


図 11　都道府県無形民俗文化財民俗芸能割合

表 9 及び図 11 から、都道府県無形民俗文化財の民俗芸能のなかで、踊りの割合が高く（21%）、続いて、神楽（14%）、獅子舞（11%）となっている。

都道府県無形民俗文化財の民俗芸能のうち、国指定重要無形民俗文化財の民俗芸能と大きく異なる点は踊りや音楽の割合が高くなっているのは、各都道府県によって民俗文化財の指定基準が異なり、国指定重要無形民俗文化財ではほとんど指定されていない「民謡」や「手踊り」なども指定の対象となっていることが大きな要因であると考えられる。

また、民俗芸能は形態やそれに伴う役割が様々であり、神楽・舞・獅子舞どれをとっても、地域によって音楽やそれに用いられる楽器なども違いが見受けられた。

（6）伝統文化に関する先行研究

これまで伝統文化の研究では、学校教育の中でいかに伝統文化を取り扱うか、伝統文化学習プログラムの提示についての研究[9] 、神楽・獅子舞など、それぞれの芸能の分類及び特徴について明らかにした研究[10] もある。しかし、伝統文化を継承するためには、その地域の文化について理解することはもちろん、「学校」「家庭」「地域」の三者の協力がなければ継承していくことが厳しい。本研究では、伝統文化の中でも「学校」「家庭」「地域」に関わりの深いと考えられる“祭り”と“芸能”に着目し、研究を進めていく。

---

[9] 今井　大介（2015）『「伝統文化」を大切にし、地域で学ぶ強み生かす子どもの育成（1年次）―京都に根ざす「伝統と文化」を体感し、関心を深める学習プログラムの提示―』京都市総合教育センター

[10] 西島　千尋　（2015）「天狗がつくられる村―富山県高岡市 C 村の獅子舞調査―」　日本福祉大学福祉社会開発研究所

（7）用語整理

①　祭礼・祭り

民俗学者の柳田国男（日本の祭り、1998）によると、祭りとは「マツラフ」すなわち「御側に居る」ことを語源としているが有力としている[11]。これはただ単に側に居ることではなく、仕える、奉仕する、思し召しのままに勤仕するという態度を示すことを言う。柳田は祭りを「祭り」と「祭礼」に区分した。祭事を営む人と、それを司る神官等のみによって行われる宗教的行為を「祭り」とよび、それに直接関わりのない見物人が加わったものと「祭礼」と定義している。しかし、この祭りと祭礼が本質的に異なるものであるとは考えておらず、祭りも祭礼も一定の式をもって神に共物を捧げない祭りの例はないと述べている。

また、折口信夫（折口信夫全集 2、1995）によると祭りは他界から来訪する神である「まれびと」を迎えて、その呪言を聞き、土地の精霊が誓いの言葉を持って返答することで服従をする儀式であるというものである[12]。

柳田、折口両者の言及したことにおいてまとめると、祭りとは「神に捧げる」ために行われているということが共通点として挙げられる。のちに入ってきた道教、仏教、儒教においてもその思想は、日本固有の神に置き換えて信仰してきたといえる。祭りは普段は他界にいる神に祭りの間だけ降臨してもらい、丁重にもてなすために普段の日常とは違った“ハレ”の空間を造りだす役割も果たす。“ハレ”の空間としての祭りは“ケ”（普段の時間・空間）とは対とされ、祭りに参加する人々にとっても普段の生活とは異なり、精神的な緊張や興奮を迫る機会としての役割もある。これらのことから、日本の祭りと神への信仰を切り離して語ることはできないといえる。

さらに、松平（1983）[13]によると祭りには神の信仰と並んで，もう一つの行事が存在する。神を喜ばせ、賑わいをつくるためにそれぞれの町がつくりだす祝祭である。これが俗に言う付け祭りである。（中略）江戸時代、主な神社はそれぞれ社領を持ち、祭礼を主宰する力を持っていた。神社と寺院とが一体不離に結びつき、祭りのイニシアティブは、常にこれらの専門集団の手に握られていた。これを町の側からみれば、付け祭りだが、町で負担し、自分らで差配する祭りだったのである。ところが、年の経済力が大きく伸びると、付け祭りは急に盛んになっていく。神事と付け祭りの位置が町の人々の心のなかで逆転し、祭りは神社を中心とするものから、町の人々の手へと移っていくと述べている。

以上のことから、本研究では、「祭礼・祭り」を祭事や神事と、町人たちが一丸となり、賑わいを創出するものとし、それらを区別しないこととする。

【付け祭り…〔本祭に付けて行う祭りの意〕　江戸時代、山王神社や神田明神などの祭礼

11　柳田圀男（2013）「日本の祭り」　角川ソフィア文庫

12　折口信夫（1995）「折口信夫全集 2」　中公文庫　p..416～458

13　松平誠（1983）「祭りの文化　都市が作り生活文化のかたち」p..1～46

の行列で、余興として山車につく、踊り屋台や練り物・地走りなどのこと。[14]】

また、折口の所論の中で、祭りが芸能の発生の場であることも述べられている。芸能の発生の起源としての祭りという考え方がある。祭りの本来の目的である呪言と誓約の儀式は、神と精霊の直接的な交渉であり、それだけでは祭りの主宰者である「あるじ」をはじめとする人々には理解が困難なものである。そのため、これをより解りやすいように、くだいて繰り返し演じることが必要とされる。これが、「もどき」あるいは複演出と呼ばれるものである。この複演出の次第が、祭りにおける直会であり、饗宴であるという。とりわけ、饗宴においてはあるじが捧げた供物を神と人が共同で飲食し、舞人を出して歌舞を演じさせる。この舞人はあるじ側から出すものであり、先の儀式の構図で言えば、服従を表す誓言のもどきに相当する。つまり、神を招いて催される祭りにおいて、人の神への服従を表す式をわかりやすく表現するために行われた歌舞が芸能の発生であると考えられているのである。このように祭りを継承することによって新たな文化を創造することもあるということがわかる。

② 民俗芸能

民俗芸能とは、民俗行事のなかに伝承された民間の芸能。郷土芸能などともいう。農村，漁村，都市の祭りや寺社の行事という形で，人々の生活，習俗，信仰と深く結びついており，その歴史は古い[15]。本研究では、地域のなかで継承されてきた芸能を民俗芸能としている。

---

14 大辞林 第三版

15 ブリタニカ国際百科事典 小項目事典

3，研究目的、方法

（1）研究目的

本研究では、前述した【先行研究】でも述べたように、「学校」「地域」が伝統文化の継承に必要不可欠であるという仮説の下、以下の目的で論述していく。

① 学校教育における伝統芸能の取り組みの現状、取り扱う意義及び課題について明らかとすることで、伝統文化の担い手でもある子どもたちが伝統芸能に継続的に触れていくための課題を明らかにする。

→ 1 章及び 3 章で述べる。

② 学校教育における伝統芸能の取り組みの実態を明らかにした上で、伝統文化を継承していくために重要である“地域”での取り組みから、地域内で伝統文化を継承することによるまち育ての可能性を明らかにする。

→2 章及び 3 章で述べる。

また、本研究のテーマともなっている「まち育て」については、住民自らが主体となって、地域のことを考え、地域を継続的に育てていくものと定義する。

（2）研究方法

上記した目的を明らかにするために、第一に国や都道府県による民俗文化財の支援を整理する。その上で、それぞれの祭り、伝統芸能が発展してきた背景をくみ取りながら、伝統文化を継承する意義及び課題の明確化を行う。さらに、弘前市が含まれる津軽地方の伝統芸能でもある「津軽三味線」を学校教育で取り入れている事例から、学校と地域との連携による伝統文化継承の意義・課題を明らかとし、同じく弘前市の祭りである「ねぷた祭り」について取り上げ、祭りと地域による伝統文化継承の意義・課題を明らかにしていく。なお、この 2 つの対象を選定した理由は「1 章　1-1 調査の概要」に詳しく明記する。

また、「表 1 東北地方人口減少割合」「表 10　東北地方の生産年齢人口、年少人口の割合」から見て取れたように、現在、青森県よりも人口減少が著しく、祭りの後継者問題が深刻化している秋田県に着目し、秋田県の中でも、ねぷた祭りと同じく一つの山車を町内単位で出している仙北市角館町の「角館祭りやま行事」について取り上げる。弘前よりもかなり深刻な祭りの継承問題がある一方で、昔ながらの伝統的な角館独自のコミュニティのあり方と、祭り継承の様々な工夫によって、今なお多くの人で賑わい続けている角館祭りやま行事の事例から、今後さらに後継者問題が顕著になるであろう、ねぷた祭りの継承の可能性を探る。

（3）本研究の構成

本研究は、序論、本論、結論で構成される。本章は 1 章から 3 章から構成される。

1 章では、まず、全国における学校教育における伝統芸能の取り組みを文献から調査し、全国の取り組みを明らかにするともに、津軽地方で伝統芸能を学校教育で取り扱っている弘前市立朝陽小学校における津軽三味線クラブの取り組みについて取り上げ、学校教育の伝統芸能継承の可能性を明らかにする。これは、実際に平成 29 年度三味線クラブ生として活動した小学 4～6 年までの計 7 名（4 年生 4 人、5 年生 1 人、6 年生 2 人）へのアンケート調査及び、三味線クラブを担当してる先生とこのクラブが発足した 15 年前からこの三味線クラブに携わる津軽三味線奏者へのヒアリング調査による。

2 章、3 章では、弘前に 300 年前から伝わる「ねぷた祭り」及び仙北市角館町に 350 年伝わる「角館祭りやま行事」について、継承されてきた歴史的背景・これまでの祭りの変遷等を文献調査から明らかにしながら、祭りを継承する意義、これからの課題等を祭りに関わっている人々のヒアリング調査から明らかにする。なお、詳細な分析方法については各章に記す。

以上の分析を踏まえて結論では、持続可能な伝統文化継承の可能性を考察する。

II　本論

1．津軽三味線からみる学校教育における伝統芸能教育の課題と可能性

1－1　1章における調査概要

1－2　津軽三味線の継承の意義と課題

1－3　青森県の学校現場における津軽三味線の取り組みの現状

1－4　朝陽小学校の津軽三味線クラブの取り組み

1－5　小結　伝統芸能を継承する学校現場とさらなる取り組みに向けての提案

1－1　1章における調査概要

(1) 本章の研究目的と分析方法

本章では伝統芸能を学校教育の中で取り扱う事例を文献調査から明らかとし、さらに、津軽地方の伝統芸能である津軽三味線をクラブ活動として取り上げている弘前市立朝陽小学校における津軽三味線クラブの取り組みについて取り上げ、学校教育の伝統文化継承の可能性を明らかにする。なお筆者も実際に、この活動に平成24年から津軽三味線を教えながら活動に参加している。

研究方法は、実際に平成29年度津軽三味線クラブに所属し、活動した小学4～6年までの計7名へのアンケート調査及び、津軽三味線クラブを担当してる教員である神（じん）　隆子（たかこ）氏と、このクラブが発足した15年前からこの三味線クラブに指導者として携わる津軽三味線奏者多田あつし氏へのヒアリング調査に基づく。

さらに、社会教育のスペシャリストである、青森県教育庁 中南教育事務所の主任指導主事 工藤良信氏及び、主任社会教育主事 神田昌彦氏へのヒアリング調査をあわせて行い、社会教育からみた伝統文化継承への課題と可能性について、上記した津軽三味線クラブの活動として研究した結果を基に論述する。

(2) 研究対象の選定理由

本研究では、弘前市において、幼少期から身近だった祭り及び伝統芸能を対象とする。ここで、なぜ本研究において、「ねぷた」と「津軽三味線」を対象とするのか、青森県民が愛着を持つ地域資源を平成24年に青森県企画政策部がアンケート調査[16]より示す。

①調査内容・方法

調査は「誇りの実態」、「県民気質」、「地域の情報収集」、の3つの視点から行うこととし、調査方法としては、郷土に関する意識調査をベースにし、既存の調査との比較などにより、総合的に分析したものである。

②郷土に関する意識調査概要（県民アンケート）

- 調査内容　　:「地域への誇り」「県民気質」「地域情報収集方法」
- 調査対象　　: 20代～60代の県民
- 標本数　　: 5,000
- 抽出方法　　: 市町村住民基本台帳からの無作為抽出
- 調査方法　　: 郵送法
- 回収数（回収率）　: 2,025（40.5%）
- 調査期間　　: 平成24年7月11日～7月20日（8月10日到着分までを対象）

[16] 青森県企画政策部「郷土に関する意識調査等の結果報告書」

なお、地域の比較に当たっては、県内を次の 6 地域に分けて行っている。

東青地域　：　青森市、平内町、今別町、蓮田村、外ヶ浜町
中南地域　：　弘前市、黒石市、平川市、西目屋村、藤崎町、大鰐町、田舎館村
三八地域　：　八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村
西北地域　：　五所川原市、つがる市、鰺ヶ沢町、深浦町、板柳町、鶴田町、中泊町
上北地域　：　十和田市、三沢市、野辺地町、七戸町、六戸町、横浜町、東北町、
　　六ヶ所村、おいらせ町
下北地域　：　むつ市、大間町、東通村、風間浦村、佐井村

また、報告書中、地域を簡便に表すために「津軽」「南部」「下北」という名称を用いているが、その範囲は次の通りである。

「津軽」　：　東青・中南・西北地域
「南部」　：　三八・上北地域
「下北」　：　下北地域

③調査結果

ｉ）　県民が愛着を持っている地域資源

県民が愛着を持っている地域資源は「豊かな自然」（73.8%）、「美味しい食」（62.8%）「伝統的な祭りや伝統芸能」（58.5%）が上位を占めた。（図 1－1）また、他県との比較では、「伝統的な祭りや伝統芸能」の数値が高いのが特徴的である。（図 1-2）

以下の項目のうち、あなたが気に入っているものをお選びください。（○はいくつでも）

1	豊かな自然	73.8%
2	おいしい食	62.8%
3	伝統的な祭りや伝統芸能	58.5%
4	きれいな水	49.2%
5	温泉	46.0%
6	方言	37.6%
7	人と人とのつながり	25.8%
8	歴史・文化	19.5%
9	その他	2.1%
10	特にない	1.0%
全体		376.3%

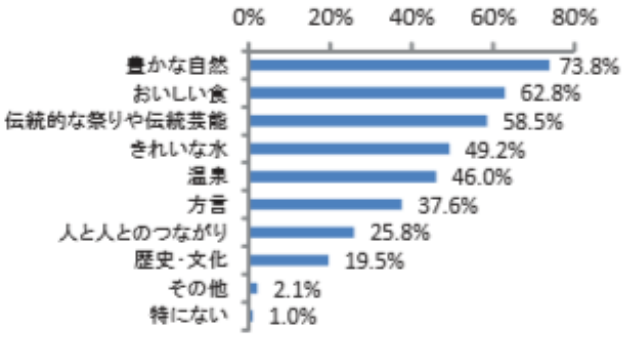


図　１－１　地域振興に活用すべき青森県の強み

出典：青森県企画政策部「郷土に関する意識調査等の結果報告書」p.13

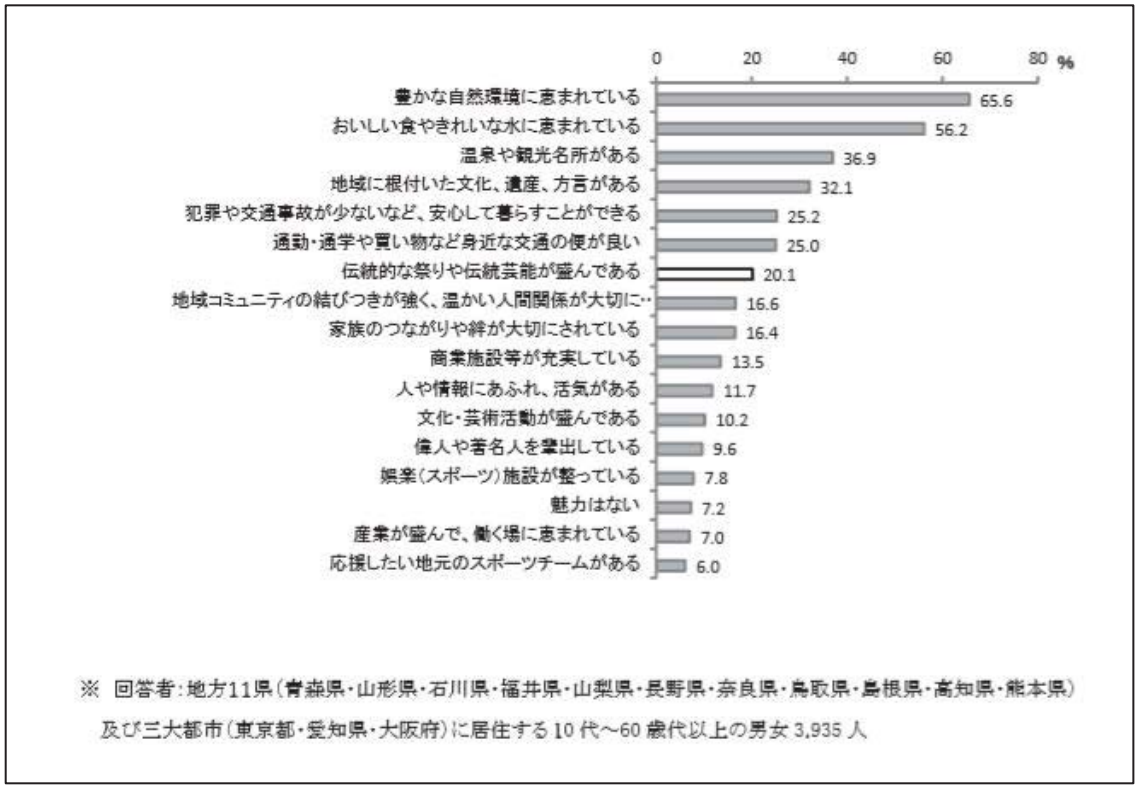


図　1 ー 2「希望」に関する意識調査（平成 23 年度福井県調査）

出典：青森県企画政策部「郷土に関する意識調査等の結果報告書」p.14

ⅱ）県民が愛着を持っている地域資源【自然・名勝など、食材、郷土料理など、工芸・文化・祭りなど、人物・動植物・歴史、の 5 分野】

「気に入っている」または、「大事にしたい（誇りだ）」と思う地域資源（複数回答可）のうち、60%を超える高い愛着が示された地域資源は以下の通りになった。

りんご（89.2%）、ねぶた（79.3%）、奥入瀬渓流（72.1%）、十和田湖（66.4%）、
棟方志功（66.7%）、津軽塗（65.0%）、津軽三味線（64.8%）、太宰治（63.3%）、
弘前城（62.9%）、ホタテ（62.8%）

という結果になった。愛着を持つ地域資源を地域別に見ると、地域によって愛着を持つ割合に大きな差が見られるものもある。ⅰ）県民が愛着持っている地域資源の中でも、他県よりも数値が高かった「工芸・文化・祭りなど」の詳しいデータを次に挙げ、結果を考察する（図 1－3）（図 1－4）。

【D 工芸・文化・祭りなど】

1	ねぶた	79.3%
2	津軽塗	65.0%
3	津軽三味線	64.8%
4	ねぷた	50.7%
5	立佞武多	45.0%
6	方言	39.2%
7	八戸三社大祭	39.2%
8	こぎん刺し	32.0%
9	えんぶり	29.1%
10	宵宮	24.1%
11	民謡・手踊り	22.9%
12	南部裂織	19.2%
13	津軽金山焼	15.4%
14	南部菱刺し	10.9%
15	八幡馬	10.8%
16	温湯こけし	9.5%
17	その他	4.0%
全体		561.1%

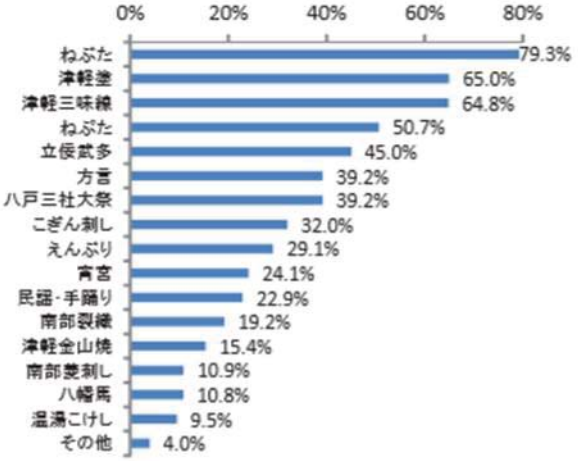


図　1 ー 3　青森県民「工芸・文化・祭り」などにおける愛着度

出典：青森県企画政策部「郷土に関する意識調査等の結果報告書」p.19

図 1－3 の結果から、「工芸・文化・祭り」の県内での愛着度はねぶた（79.3%）、津軽塗（65.0%）、津軽三味線（64.8%）、ねぷた（50.7%）と 4 つの分野において 50%以上の人々にとって高い愛着が示されたといえる。

※地域別・年代別・県人度別・男女別・産業別　上位７項目

D	ねぷた	津軽塗	津軽三味線	ねぷた	立佞武多	方言	八戸三社大祭
全体	79.3%	65.0%	64.8%	50.7%	45.0%	39.2%	39.2%
【地域別】							
東青	89.9%	77.1%	69.1%	40.0%	41.2%	41.4%	24.7%
中南	77.1%	81.8%	76.2%	87.9%	47.4%	49.3%	20.1%
三八	65.3%	48.7%	52.3%	31.6%	30.6%	28.3%	84.7%
西北	77.9%	72.6%	71.7%	52.7%	73.9%	44.2%	15.0%
上北	84.5%	50.5%	61.9%	40.2%	46.0%	36.1%	52.9%
下北	83.4%	51.1%	53.8%	45.7%	43.0%	34.1%	29.6%
【年代別】							
20代	82.8%	52.6%	57.2%	50.7%	43.7%	45.6%	40.5%
30代	81.4%	60.8%	60.2%	52.5%	43.7%	41.6%	32.7%
40代	80.9%	60.3%	62.6%	47.6%	46.1%	38.7%	37.7%
50代	78.8%	70.9%	68.5%	55.0%	45.5%	39.2%	39.2%
60代以上	76.1%	70.5%	68.7%	48.2%	45.3%	35.7%	43.4%
【県人度別】							
生粋＋県人	79.8%	66.5%	65.0%	51.0%	45.9%	40.5%	39.4%
他県出身	75.6%	49.4%	64.1%	45.5%	35.3%	24.4%	34.0%
【男女別】							
男性	78.8%	59.8%	62.5%	51.5%	46.0%	38.6%	38.5%
女性	79.9%	69.2%	66.5%	50.3%	44.4%	39.7%	39.7%
【産業別】							
第1次産業	75.2%	59.4%	57.9%	43.6%	45.9%	38.3%	30.8%
第2次産業	78.0%	57.3%	58.6%	47.1%	40.5%	36.6%	44.1%
第3次産業	82.6%	65.1%	65.2%	52.0%	46.9%	41.8%	38.7%

図　１ー４　年齢及び地域別、青森県民の「芸能・文化・祭りなど」における愛着度

出典：青森県企画政策部「郷土に関する意識調査等の結果報告書」p.19

また、図 1－4 の結果から、「津軽三味線」及び「津軽塗」において東青・中南・西北地域の割合がそれぞれの全体の割合に比べてかなり大きくなっていることが読み取れる。これは、津軽三味線、津軽塗など名前に「津軽」が入っていることからもわかるように、津軽地方が発祥の文化である。故に、津軽地方に属する東青・中南・西北地域の人々はこれらの文化を誇りに思っていることがわかるだろう。

さらに、弘前市が属する中南地域について見ると、弘前市の文化である「ねぷた」は 87.9%（全体平均 50.7%）という高い数値を占めていることからも、中南地域の人々にとって、ねぷたへの愛着はかなり高いということが明らかである。

そこで、本研究では、弘前市民の中でも愛着度が高い、伝統芸能「津軽三味線」および、祭り「ねぷた祭り」に着目することで、地域において伝統文化を継承していく意義及び可能性を明らかにする。

（3）分析方法

本研究では、得た調査結果から分析を行うこととする。

①アンケート調査

アンケート調査は取ったデータを質問ごとに Excel に起こしその得られたデータを表、グラフなどにまとめる。

②ヒアリング調査[17]

ｉ）ヒアリング調査の文字起こし

ヒアリング内容をすべて、文字起こしし、Word にまとめる。

ⅱ）事例―コード・マトリックスの作成

事例－コード・マトリックスとは文字起ししたヒアリング内容の文字テキストに対して、一種のテーマ（小見出し）をつけながら、文章の簡略化を行いながら（この簡略化を行った文章を「文章セグメント」と呼ぶ)、抜き出しを行い Excel にまとめる。なお、本研究では、事例（今回はヒアリングする人物名）を「行」に、テーマを「列」にまとめた。これを、ヒアリング調査を行った人すべてに対して行い、1 つの Excel にまとめる。なお、同じテーマをつけることができる内容に関しては同じ列にまとめる。

ⅲ）文章セグメントの要約

ⅱ）で作成した事例－コード・マトリックスにおいて、1 つ 1 つのセルに対して文章セグメントの要約を行い、表をさらに簡略化する。

ⅳ）コードの作成

ⅲ）で作成した、要約セル 1 つ 1 つに対して、コードをつける。

ⅴ）コードから他の事例のコードとの関係生を明らかとしながら、コードメモを作成する。

ⅵ）コードメモを参考にしながら、「学校」「地域」「その他の機関」に分けながら伝統文化を継承する主体との関わり方をダイヤグラム（図解表示）により体系化する。

ⅶ）　ⅴ）で昨試製したコードメモ及び、ⅵ）で作成したダイヤグラムから読み取れることをまとめる。

なお、この分析方法は、佐藤郁哉（2008)「質的データ分析」を参考にした。

---

[17] 佐藤郁哉（2008)「質的データ分析」

1－2　津軽三味線の継承の意義と課題

（1）津軽三味線の歴史

津軽三味線は、青森県の津軽地方を中心に独自に発展してきた三味線の一種である。三味線の原型は中国の三弦や沖縄の三線であったと冨田（2015）は述べている。三弦はいまから 2000 年以上前の秦の時代に中国で広がったものである。起源は定かではないが、北方の遊牧民族が用いていた弦楽器・クーブーズからヒントを得てできたという説が有力であり、遊牧民族が使っていたクーブーズは共鳴胴にヒツジの皮をはり、ヒツジの腸から作った弦を張っていたものとされている。一方、漢民族の三弦は、ニシキヘビの皮をはり、弦は絹糸を用いている。当時建設中だった万里の長城の建設に携わっていた男たちは三弦を使って、歌い踊り、日々の疲れを紛らわせた。やがて三弦は庶民の娯楽楽器として普及し、混劇などの演劇音楽としても取り入れられるようになるとともに、次第に中国の南部へと広がった。

もともと日本国内で演奏されていた琵琶は 7，8 世紀ころに日本に入ってきた楽器とされ、雅楽において高貴な宮廷楽器とされる一方、その携帯性の良さから「ほかひひと」の流れをくむ旅芸人の楽器としても使われるようになった。そして、平安時代の中期頃からは、弱者救済の浄土思想をもつ仏教の広がりとともに、盲目の僧侶たちが琵琶を弾きながら旅をする、琵琶法師の楽器として広がっていった。[18]

一方、三味線の原型とされる中国の三弦や沖縄の三線が日本に入ってきたのは、16 世紀室町時代であった。15 世紀ころになると、中国の三弦は沖縄に伝えられそれをもとに三線が作られた。沖縄の三線は中国の三弦と同じように、ニシキヘビの皮をはり、爪で弦をはじいて音を出すものであった。

左から、平家琵琶、三弦（中国）、三線（沖縄）。浜松市楽器博物館所蔵

写真 1　三線の変遷

出典：冨田晃（2015）「楽器は語る」一般財団法人千里文化財団　p..117

[18] 参考：冨田晃（2015）「楽器は語る」一般財団法人千里文化財団　p.116～134

ちょうど沖縄で三線が生まれた頃、沖縄から大阪、堺に三弦・三線がはいってきた。ただし、当時の室町幕府と琉球王国の交流は少なく三弦・三線は演奏や楽譜を伴わず楽譜が入ってきた。これに目をつけたのが、社会の下層に位置づけられていた琵琶法師たちである。琵琶よりも音域が広く、フレットという弦の音程を規定する仕掛けはなく、自由な音を出せる三弦・三線は琵琶法師の表現の幅を広げるものだった。三弦・三線を参考に自らの楽器を参考に楽器を作るときは、身近にある猫の皮を用いて、琵琶の演奏の歳に用いていた撥を使って演奏をするようになった。これが三味線の誕生である。この三味線は民謡や流行歌の伴奏楽器として広がり、江戸時代になると、義太夫や浄瑠璃、歌舞伎などの日本の様々な芸能分野で三味線が用いられるようになっていった。

それに伴い、津軽地方にこの三味線が持ち込まれるようになった。これは参勤交代で江戸を行き来する大名が藩公認の芸能として弘前に持ち込んだと言われている。さらに、日本海に沿って交易する北前船によって、各地に民間芸能が広がっていった。また、忘れてはいけないのが、盲目僧の芸能者であるボサマ・ゴゼサマの存在である。ボサマは当道座に属する下級層、ゴゼサマは瞽女座の下級層、座頭の東北地方での呼び方である。当道座とは、琵琶法師の流れをくむ盲目の組織であり、江戸時代に公認組織となった。かつては病気などで失明する人が多く、こうした盲人の福士・管理制度として作られたものである。

そうしたボサマ・ゴゼサマの中には旅先の地に住み着く人もいた。一行からわかれた彼らは当道座や瞽女座から破門となり、身分制度がなくなるばかりか、「はぐれボサマ」や「はぐれゴゼ」とよばれ、家々を回り門付け芸をし、金や米をもらいその日暮らしをするのがやっとだった。

人前で勝手に芸を行う門付けでは、まず、強烈な音を出し、家の中の人に興味を持ってもらう必要がある。家から人が出てくると、その場の雰囲気に合わせて芸を行った。こうして強烈な印象を放つ音色と高い即興性をもった三味線の奏法が生まれていった。三味線にはネコの皮より丈夫で、強烈な撥さばきと冬の寒さに耐えるイヌの皮がはられるようになった。

津軽三味線の歴史を研究する大條和雄によると、現在全国に広がっている津軽三味線奏者の系譜をたどると、必ず秋元仁太郎（通称：仁太坊。1854～1928）という 1 人の男にいきつくという。仁太坊は 8 歳のころに失明し、はぐれゴゼから三味線を習った仁太坊は、自らの芸を究めようとするうちに太棹である義太夫三味線を用いることで、よりダイナミックな表現が可能となり、現在の津軽三味線へと繋がる新たな演奏スタイルを生み出したと考えられる。

楽器がいつできたかということは正確に断定することはできないが、今の津軽三味線の奏法が編み出されたのは仁太坊の影響である可能性が高いことから、今から約 150 年前後の比較的新しい楽器であるとも言える。

「はぐれゴゼ」「はぐれボサマ」と偏見を持たれてきた津軽三味線は、1950 年代以降、その日本ならではの独特の演奏方法によって人々から注目を集めるようになった。現在は、若者や海外から大きな支持を受け、毎年弘前市において世界大会も実施され、学校教育の中でも、津軽三味線を取り扱う事例が見受けられる。

1－3　青森県の学校現場における津軽三味線の取り組みの現状

（1）学校教育での伝統文化に関する法律

平成 18 年、教育基本法が改正され、改正前にはなかった伝統文化の継承について規定された。以下に、教育基本法の改正前後の比較を表にした。（表 1）

表　1　ー 1　伝統文化からみる教育基本法改正前後の比較

改正後の教育基本法 平成18年度法律120号	改正前の教育基本法 昭和22年法律第25号
前文 我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。 我々は、この理想を実現するため、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。ここに、我々は、日本国憲法の精神にのっとり、我が国の未来を切り拓く教育の基本を確立し、その振興を図るため、この法律を制定する。	前文 われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。 　われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。 　ここに、日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。
第２条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標　を達成するよう行われるものとする。 一　幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。 二　個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。 三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。 四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。 五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。	第２条 教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、実際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によつて、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない。

出典：　文部科学省「教育基本法」より作成

http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/06042712/003.htm（2018 年 1 月閲覧）

この表から、改正後、前文において「伝統文化を継承し、新しい文化の創造を目指す教育の推進」、第 2 条 5 号には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷

土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という項目が規定された。

さらに、この教育基本法の教育理念を踏まえて、平成 19 年に公布された学校教育法には「義務教育の目標」として、第 21 条の第 3 号には「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」という文言が加えられた。

この教育基本法及び、学校教育法の改正により、我が国や郷土の伝統や文化についての理解を深めることの重要性を示した。

新学習指導要領では、教科等の指導において、伝統や文化に関する教育の推進のために、様々な分野において内容の充実が図られている。その一部として、音楽では以下の内容が推奨されている。

音楽 … 教材として扱う唱歌（「春が来た」「ふるさと」など）の曲数の増加（小学校)。
民謡・長唄や和楽器（ 琴、三味線、尺八など）に関する学習（中学校)。

しかし、これらの教育を推進していくためには、学習指導要領に示す各教科等の目標や内容を踏まえ、我が国の伝統や文化に関する学習を教育課程上に適切に位置づけるとともに、児童生徒が学校教育の中で我が国の伝統や文化に触れたり、認識を深める機会を充実させることに留意すること及び外部の人材や団体等々の効果的な連携をするなど工夫しなければならない。

（2）学校現場での津軽三味線活動の現状

伝統文化を学校教育の中で取り入れる方法はさまざまで、平成 9 年から青森県弘前市第二中学校で行われた「総合学習の時間」[19]や青森県立金木高等学校三味線部で行われているように「部活動」[20]で行う学校もある。しかし、津軽三味線を授業で取り扱う際に、総合学習などのように授業で取り扱うと人数が多いため、児童 1 人ひとりに目が行き届かない状況や扱える時間数が限られているため、ある程度演奏できるようになることが厳しいという現状がある。また、部活動で取り扱う際には、楽器の管理や自主的な活動が求められるため、高校生程度の活動が望ましいと考えられる。

そこで、本研究では人数が限られ、興味のある児童に対して個別に指導することが可能で、授業よりは時間が確保できると考えられる、津軽三味線のクラブ活動における取り組みについて取りあげることとする。

---

19 『「Let’s Try！総合学習」2004 年版』時事通信社　p.17

20 青森県立金木高等学校　ホームページ
http://www.kanagi-h.asn.ed.jp/index.html（2018 年 1 月閲覧）

（3）小学校におけるクラブ活動からみた伝統文化の継承

昭和 33 年（1958 年）に，教育課程に関する学校教育法施行規則が改正され，小学校の教育課程は，教科，道徳，特別教育活動，学校行事の四領域に編成された。また，学習指導要領では，それまで特別教育活動に関するものは試案という形で出されていたが，告示という形式で公布され，法的拘束力を持つようになった。そして，特別教育活動の指導上の留意点として，「児童・生徒の自発的な活動を通して個性の伸長を図る」ことが掲げられていることから，自主性を重んじ，集団の中で個性を育くむ方向性は，この時期から始まっているといえる。さらに、クラブ活動の全員参加を奨励し，各学校の裁量でクラブ活動をするように指示している。

昭和 43 年（1968 年）から昭和 45 年（1970 年）にわたる小学校学習指導要領の改訂では，学校行事と特別活動の二領域が統合され，「特別活動」となった。この年の改訂では，小学校学習指導要領で，「クラブは，主として 4 年生以上の同好の児童を もって組織し，共通の興味・関心を追求する活動を行うものとする。」「クラブ活動には，毎週 1 単位時間を充てることが望ましい。」[21]とされ，小学 4 年生以上のクラブ必修化がスタートした。

そして，平成 29 年（2017 年）に公布されたの学習指導要領改訂では，異年齢集団との活動を通して社会における人間関係を築く力，話し合いを通して集団の中で個性を磨く表現力，積極的に活動に参加する自主性・実践的な態度を重視することを求めている。小学校のクラブ活動は，依然として，4 年生以上の生徒はクラブ活動に全員参加することになっており，教育課程内の活動として位置づけられている[22]。

平成 29 年度 3 月に発行された小学校の学習指導要領をみると、第 6 章に「特別活動」という分野がある。特別活動の目標、具体的内容は以下の通りである。

第 1 目標

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ 様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み，互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して，次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

（1） 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し，行動の仕方を身に付けるようにする。

（2） 集団や自己の生活 人間関係の課題を見いだし 解決するために話し合い 合意形成を

---

[21] 文部省「小学校学習指導要領」（1968）

[22] 小林誠（2012）「学習指導要領からみる部活動に関する考察」早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊 19 号－2　p..191～201

図ったり，意思決定したりすることができるようにする。

(3)　自主的，実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして，集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに，自己の生き方についての考えを深め，自己実現を図ろうとする態度を養う。

第 2 各活動・学校行事の目標及び内容

「クラブ活動」

1，目標

異年齢の児童同士で協力し、共通の興味関心を追求する集団活動の計画を立てて運営することに自主性、実践的に取り組むことを通して、個性の伸長を図りながら，第一の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

2，内容

1，の資質・能力を育成するために、主として第 4 学年以上の同好の児童をもって組織する活動を行う上で必要になることを必要になることについて理解し、主体的に考えて実践できるように指導する。

(1) クラブ組織づくりとクラブ活動の計画や運営

児童が活動計画を立てて、役割を分担し，協力して運営に当たること。

(2) クラブを楽しむ活動

異なる学年の児童を協力し，創意工夫を活かしながら共通の興味・関心を追求すること。

(3) クラブ活動の成果の発表

活動の成果について，クラブの成員の発意・発想を活かし、協力して全校児童や地域の人々に発表すること。

以上の目標の下、クラブ活動が行われる。

1－4 弘前市立朝陽小学校の津軽三味線クラブ活動の取り組み

（1）　朝陽小学校の概要

朝陽小学校は平成 25 年に創立 140 周年を迎えた歴史と伝統のある小学校であり、弘前市の中で最も古い歴史を持ち、多くの先達を輩出している。平成 28 年 5 月 1 日現在児童数は 165 人である。小学校の所在する地区は弘前城に隣接しており、長勝寺をはじめとした伝統的建造物や文化財、りんご公園などの公共施設が数多く存在する。

藩政期より武士や僧侶、町人の居住区画だったこともあり、数代にわたりこの地域で暮らし続けている家も多い。地域の教育に対する関心は高く、学校への協力も惜しまない。[23]

（2）　朝陽小学校の津軽三味線クラブ活動概要

朝陽小学校には学区内に店を構える「三味線店　多田工房」がある。この三味線店は津軽三味線の販売、出張演奏や指導を行っており、この三味線店を拠点に全国・世界へと活動の幅を広げているのは津軽三味線集団“夢弦会”（現在、コアメンバーは 6 人程度）である。この会の代表である多田あつし氏が平成 16 年度から朝陽小学校と連携して津軽三味線クラブを継続的に行っている。

平成 29 年度の津軽三味線クラブの取り組みは以下の通りである。内容は、1 年目と 2～3 年目の児童で異なるため、内容は分けて表に記した。（表 1－2）

[23] 弘前市ホームページ www.city.hirosaki.aomori.jp/school/2015-0216-1841-286.html（2018 年 1 月閲覧）

表　1　ー 2　平成 29 年度津軽三味線クラブの活動日程、活動内容

月	日	内容		
			1年目の児童	2・3年目の児童
4	13	クラブ①	津軽三味線の演奏の持ち方・演奏方法	
5	11	クラブ②	1段習得	1段復習
	25	クラブ③		2段進む
6	22	クラブ④		3段進む
	29	クラブ⑤		１～３段復習
7	13	クラブ⑥		発展技習得
	20	クラブ⑦	1段完成	発展技習得
9	7	クラブ⑧	1段復習	１～３段復習
	21	クラブ⑨	1段復習	１～３段復習
	28	クラブ⑩	全員で演奏する練習	
10	12	クラブ⑪	全員で演奏する練習	
	10	学習発表会練習		
	16	学習発表会練習		
	19	学習発表会リハーサル練習		
	21	学習発表会		
	26	クラブ⑫	学習発表会復習・津軽三味線鑑賞会	

（3）クラブ活動が始まった経緯とこれまでの取り組み

この津軽三味線クラブは、多田あつし氏の長男が朝陽小学校の児童であったことが一つの大きな要因である。平成 14 年度、小学 2 年生だった多田氏の長男の担任の教員が参観日において児童が津軽三味線の演奏を行うことを提案した。それを快く引き受けた多田氏がボランティアで放課後に子どもたちの指導を行い、無事参観日での演奏を成功させた。

その後、津軽三味線の面白さを知った児童数名が多田氏の下へ個人的に津軽三味線のレッスンに行くようになった（後の、朝陽小学校の児童による津軽三味線団体「あさひ」である）。

平成 16 年度、「あさひ」の練習中に偶然三味線店の前を通った当時の朝陽小学校の校長の提案で、学校の中でも児童に津軽三味線を教えたいという想いの下、クラブ活動として、津軽三味線が取り上げられるようになり、現在に至る。その変遷を以下の表にまとめる。（表 1－3）

表　1　ー 3　弘前市立朝陽小学校における津軽三味線取り組みの変遷

時期	対象	内容	備考
平成14年度	朝陽小学校2年生の希望者	参観日での津軽三味線演奏	練習は放課後の時間を使って練習を行った。
平成16年度	朝陽小学校4～6年生の希望者	津軽三味線クラブ開始	
平成28年度		教育フェスティバルでの演奏	
平成29年度	本研究の調査期間		

表 3 から、平成 14 年、朝陽小学校 2 年生の希望者を対象に参観日での演奏を行ったことをきっかけに、津軽三味線奏者の多田氏との交流が生まれ、平成 16 年には、津軽三味線クラブが発足している。さらに、平成 28 年度には弘前市教育委員会が主催する「教育フェスティバル」にて、朝陽小学校の津軽三味線クラブが演奏を行っている。

（4）平成 29 年度津軽三味線クラブで活動した児童へのアンケート調査結果

実際に津軽三味線に触れ、演奏を行えるようになった児童を対象とし、どうして津軽三味線をやろうと思ったのか、どのようなことが楽しかったのか等調査することで、児童の立場から、今後伝統芸能を学校教育の中で取り扱う際に必要と考えられることを明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。調査対象、調査日時（表 1－4）とアンケート調査内容（表 1－5）は以下の表にまとめた。

表　1　ー 4　平成 29 年度津軽三味線クラブに所属した児童へのアンケート調査概要

調査対象	弘前市立朝陽小学校の4～6年生の津軽三味線クラブ所属の児童計7名
調査日時	平成29年10月26日　15：30～
場所	弘前市立朝陽小学校　音楽室
ヒアリング内容	以下に詳しい内容を示す。

表　1　ー 5　平成 29 年度津軽三味線クラブの児童へのヒアリング調査の質問項目

質問番号	質問項目	回答方法
Q1	対象者の属性【学年】	記述式
	対象者の属性【クラブへの所属年数】	記述式
Q2	対象者の属性【性別】	選択式【男・女】
Q 3	津軽三味線クラブに所属したきっかけ	選択式 【①津軽三味線が楽しそうだと思ったから ②友達に誘われたから、 ③去年も入っていたから ④お父さん、お母さんに勧められたから ⑤その他】
Q 4	（4，5年生対象）来年度も継続して津軽三味線クラブに所属しようと思うか。 またその理由はなんでですか？	選択式【はい・いいえ】 記述式
Q 5	三味線クラブに入って楽しかったことはなんですか？	記述式
	三味線クラブに入って勉強になったことはなんですか？	記述式
Q6	学習発表会で保護者や学校の友達の前で演奏してみてどうでしたか？	選択式 【①また演奏したいと思った ②もう演奏したくないと思った ③もっとみんなに津軽三味線を知って欲しいと思った ④その他　記述　】
Q 7	三味線を演奏できるようになってから変化はありましたか？	選択式 【①保護者や友達に褒められた ②弘前の良さを感じるようになった ③弘前がさらに好きになった ④その他　記述】

〈アンケート調査結果及び考察〉

ｉ）平成 29 津軽三味線クラブ所属児童の属性

表　1　ー 6　津軽三味線クラブの所属年数

継続年数	人数【人】	割合【%】
1年目	4	57.1
2年目	2	28.6
3年目	1	14.3
合計	***7***	***100.0***

津軽三味線クラブに所属している年数は、1 年目 4 人、2 年目 2 人、3 年目 1 人であるが、この人数が学年と一致しないのは、6 年生で児童が 1 人、5 年生から津軽三味線クラブに所属し始めたためである。

Q2　性別

表　1　ー 7　津軽三味線クラブ所属性別

性別	人数【人】	割合【%】
男	6	85.7
女	1	14.3
全体	***7***	***100.0***

7 人中 6 人の児童が男性であり、29 年度、津軽三味線クラブは男性に人気であった。

ⅱ）津軽三味線クラブに所属したきっかけ

Q3 では津軽三味線をやろうと思ったきっかけを明らかにし、伝統文化を行うきっかけを探る。

Q3　津軽三味線クラブに所属した理由　（複数回答可）

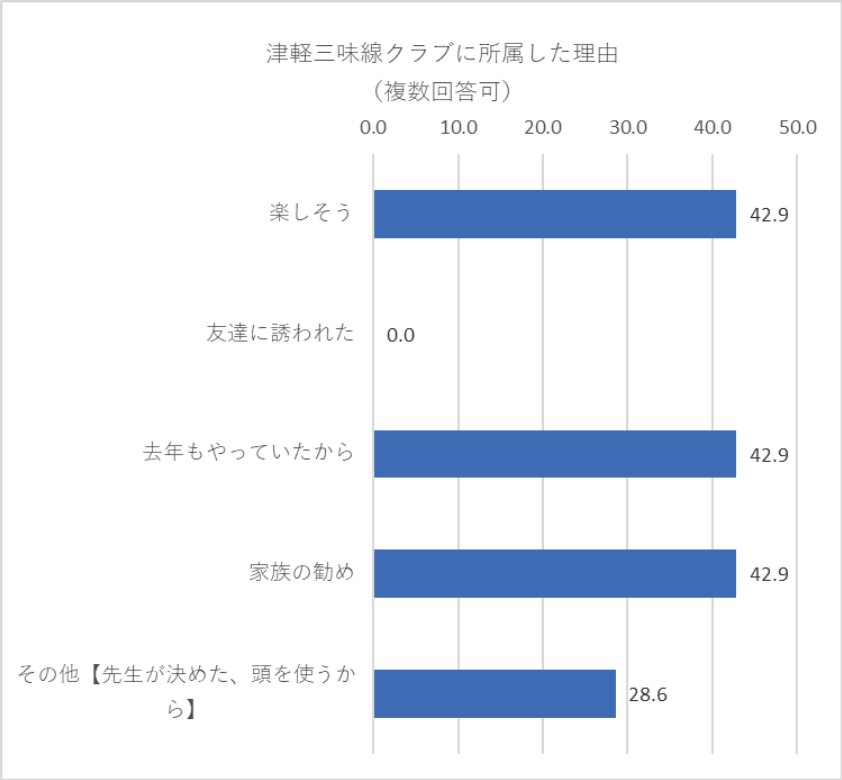


図　1 ー5　津軽三味線クラブに所属した理由

この結果から、「楽しそう」「去年もやっていたから」「家族の勧め」等が同率で 1 位となった。また、「友達から誘われた」という項目が、0%であった。

ⅲ）津軽三味線クラブの継続の意欲

Q4 及び Q5 において児童の津軽三味線に対する意欲を明らかとする。

Q4 来年度の活動（4，5 年生対象）

表　1　－　8　来年度のクラブ活動希望

来年度の三味線クラブに入りたいか	その理由
はい	もっときれいな音を出したいから
はい	3年間ずっと練習したいから
はい	2だん、３だんをひきたいから
はい	楽しいから、おもしろいから
いいえ	ほんばんの前に失敗したりほんばんの時もまちがえたりしていたからです。

4／5 の児童が次年度も継続的に三味線クラブに所属したいと述べている。

Q5　津軽三味線クラブに入って楽しかったこと・勉強になったこと

表　1　－ 9　津軽三味線クラブに入って楽しかったこと・勉強になったこと

楽しかったこと	勉強になったこと
楽しかったことは、みんないっしょに学習発表会でえんそうしたこと	勉強になったことは、みんなで合わせることが大切だと勉強になりました。
みんなとあわせてえんそうするのが楽しかった。	見た目より意外に難しい
きれいにえんそうができた事	三味線の指づかい
学習発表会のえんそう	勉強になったことは番号をちゃんと覚えると勉強にもちょっとしゅうちゅうできるから。
みんなでえんそうしたこと、みんなで練習したこと	
全部をおぼえたことが楽しかった	

この結果から、他の児童と一緒にやる他人との関わりと津軽三味線の演奏技術における記述 2 種類の結果が見られた。

ⅳ）成果発表後の感想

Q6 学習発表会の後の感想　（複数回答可）

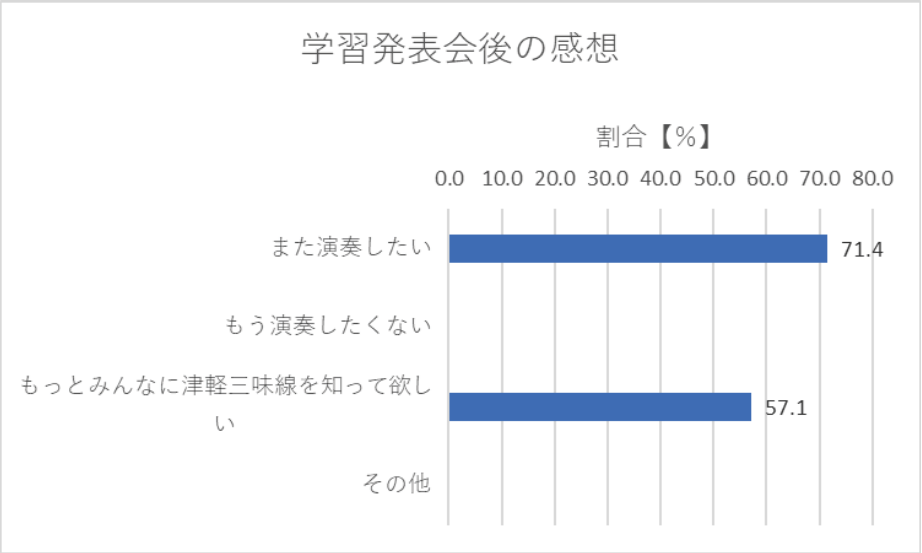


図　1 － 6　学習発表会後の感想

この結果から、「また演奏したい」が 71.4%、「もっとみんなに津軽三味線を知って欲しい」が 57.1%という結果になった。

ⅴ）変化

Q7　津軽三味線を演奏するようになってからの変化　（複数回答可）

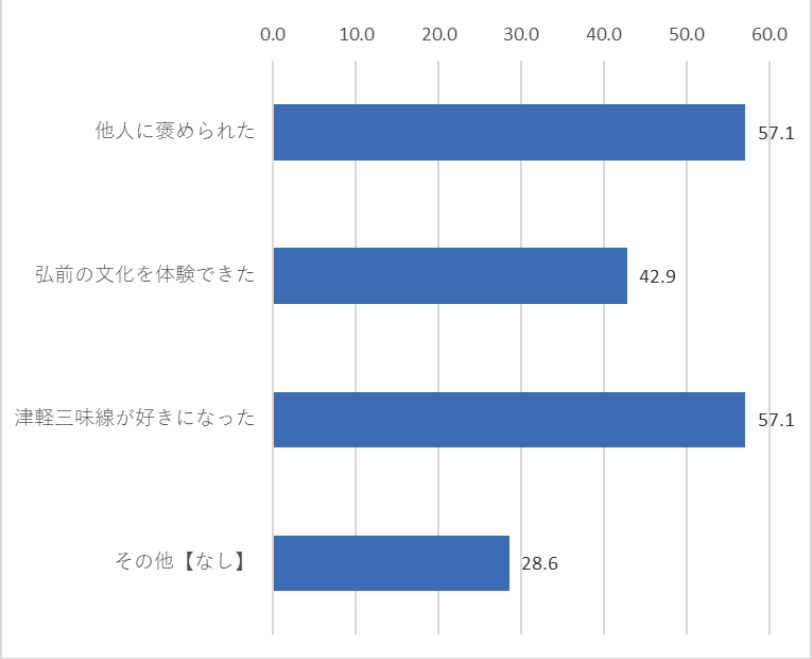


図　1　－　7　津軽三味線できるようになったことによる変化

津軽三味線を演奏するようになってからの変化として、「他人に褒められた」57.1%、「弘前の文化を体験できた」42.9%、「津軽三味線が好きになった」57.1%という結果であった。

【結果考察】

Q3　津軽三味線に所属した理由で、「楽しそう」という自らの興味関心の割合が半数に止まり、「家族の勧め」「その他（先生が決めた）」等、第三者からの勧めや後押しが児童の津軽三味線クラブの選択に影響していることが明らかとなった。

また、「去年もやったから」という理由が「楽しそう」という理由と同数であった点、さらにQ4において来年も津軽三味線クラブに所属しますか？という質問に対して、8割の児童が「はい」と回答していたことからも、前年度三味線クラブに所属していた人のリピート率の高さが見受けられる。

Q5の三味線クラブで楽しかったこと・勉強になったことはなんですか？という質問に対して、「みんなで、一緒に演奏することの楽しさや難しさ」を感じていることから、小学校学習指導要領のクラブ活動の目標である（2）クラブを楽しむ活動　（異なる学年の児童を協力し，創意工夫を活かしながら共通の興味・関心を追求すること。）を達成できる教材であることは明らかである。

Q6は学習発表会で、保護者や他の学年の児童の前で発表したことについてどのように感じたかということを明らかとする質問であるが、「また演奏したい」や「もっと津軽三味線を知って欲しい」など、肯定的な意見の割合が多かった。学習発表会によって、第三者に演奏を披露するのは、小学校学習指導要領のクラブ活動の目標である（3）クラブ活動の成果の発表（活動の成果について，クラブの成員の発意・発想を活かし、協力して全校児童や地域の人々に発表すること。）が達成できた。

Q7は津軽三味線を演奏するようになってからの変化について尋ねる設問だが、「他人に褒められた」「津軽三味線が好きになった」等の意見がある一方、変化なしと回答した人もいた。

（2）津軽三味線を教える津軽三味線奏者と子どもたちを見守る教員へのヒアリング調査

①　多田あつし氏へのヒアリング調査

多田あつし氏は津軽三味線団体「夢弦会」代表であり、自らも演奏活動の他、津軽三味線の音の要とも言える太鼓の皮を張るのみならず、平成 15 年からは自らの出身校でもある朝陽小学校の「津軽三味線クラブ」の指導者として津軽三味線の普及にも力を入れ、後継者育成に尽力している。

表 1－ 11　津軽三味線奏者 多田あつし氏へのヒアリング調査概要

ヒアリング対象	津軽三味線奏者　多田あつし氏
日時	10月9日　9：00～9：45
場所	多田工房
ヒアリング内容	津軽三味線を朝陽小学校に教えに行くようになった経緯
	津軽三味線における朝陽小学校以外の学校との関わり
	津軽三味線を学校で取り扱う意義
	津軽三味線を学校で取り扱う課題

②　神 隆子氏へのヒアリング調査

朝陽小学校教員であり、津軽三味線クラブの担当顧問として生徒の活動を見守っている一方、前任の大和沢小学校にて、8 年間津軽三味線クラブ活動の担当顧問を勤めていた。

その際、児童と一緒に津軽三味線の演奏技術の習得をしていた経験から津軽三味線演奏の実力は高い。そのため、多田氏や他の指導者が教えているサポートを積極的にしている姿が見受けられた。

表 1－ 12　弘前市立朝陽小学校教員　神隆子氏へのヒアリング調査概要

ヒアリング対象	弘前市立朝陽小学校教員　神　隆子氏
日時	10月26日　16：00～17：00
場所	弘前市立朝陽小学校
ヒアリング内容	伝統文化を学校で取り扱う現状
	朝陽小学校の津軽三味線クラブの現状
	他の学校の津軽三味線を取り扱い
	津軽三味線を学校で取り扱う意義
	津軽三味線を学校で取り扱う課題

①多田 あつし氏及び、②神　隆子氏へのヒアリング内容は 1－1（3）分析方法に基づいて、分析を行う。ⅰ）ヒアリング調査の文字起こし　～ⅳ）コードの作成までは省略しⅴ）コードメモの作成及び、ⅵ）伝統文化の継承主体との関わり方をダイヤグラム（図解表示）により体系化したものを以下にまとめる。

ｉ）調査結果「コードメモ」

ヒアリング調査から明らかとなったコードは以下の 1～14 である。

【コード 1：伝統文化の取り扱い方法】

（メモ）地域の伝統文化を学校教育の中で取り扱う方法はいくつかあるが、自分で調べまとめたり、簡単に体験できる物を行うことが多く、芸能をクラブ活動として行っている学校は少ない。さらに、学校でどのように伝統文化を取り扱っているかなど、情報共有が行われていない。

神氏：各校の特色を活かす活動をするということで、三味線に限らず、どの学校でも民俗芸能だったり、工芸だったり、作物的なもの、リンゴとかもそうなのですけれども、そういうものを総合的な学習という時間の中で調べたり、体験したりということで実施されています。なので、クラブとしてやっているところはほとんどないです。

神氏：朝陽小学校だと、リンゴの体験とか、地域の探検（2 年生まち探検、5 年生：自主見学【弘前城とか神社仏閣、教会など弘前市で指定しているの趣のある建物を見学するもの】）などです。

神氏：他校での伝統文化の取り組みについて、情報を交換することがめったにないので、わからないというのが正直なところなのです。基本的にクラブは子どもたちのやりたいことを優先して、そして先生方の指導のできるものを併せて構成されている物なのです。

【コード 2：朝陽小学校のクラブ活動の実態】

（メモ）朝陽小学校のクラブ活動は 7 つで構成され、自分のやりたいものに希望を出して、グループ分けをされるものである。津軽三味線クラブは初めてクラブに入る 4 年生には人気がなく、一度経験した 5，6 年生はリピートしている。

神氏：朝陽小学校で行っているクラブ活動で取り扱っているのは津軽三味線、家庭科、編み物、室内ゲーム・パソコン、オセロ・将棋、スポーツ、ダンスの 7 つ。外部講師が来ているのは津軽三味線クラブだけです。

神氏：津軽三味線クラブは正直人気ないというのが本音です。

神氏：一回経験した子たちで 2 年目、3 年目にやっている子はだいたい第一希望で書いてきます。4 年生の子どもたちは第一希望ではなかったと思います。第一志望で書いてくるのは本当に 5，6 年の子だけです。

【コード 3：津軽三味線の楽しさ】
（メモ）津軽三味線は見ているよりも、実際に演奏できるようになって楽しさがわかるようになる。そのため、楽しいと感じるためには相当な時間を要する。

神氏：津軽三味線が 4 年生の子たちに人気がないのも、最初何をやっているのか見えないじゃないですか？曲ができてきて自分で弾けるなくらいでやっと初めて満足感があるものかなと思います。

【コード 4：大和沢小学校のクラブ活動の実態】
（メモ）大和沢小学校でも 2 年前まで 8 年間津軽三味線クラブがあった。当時、クラブに所属している人は 5，6 人で最大でも 7，8 人しかいなかった。

多田氏：大和沢小学校でクラブとしてやっていた。人数が少なくて無くなってしまったんだけどね。

神氏：実はわたしは大和沢小学校にいたときに 8 年間やっていたのですよね。なので、ある意味子どもたちよりベテラン。

神氏：当時、大和沢小学校の子どもたちの津軽三味線に対する興味・関心が高かったんですよ。人数は少なかったのですが。

神：たぶん、弾けるようになることが嬉しいのだと思います。三味線というよりも、楽器感覚なので、できるようになることが楽しくてしょうがなかったのだと思います。

【コード 5：朝陽小学校と大和沢小学校の意欲の違い】
（メモ）大和沢小学校は朝陽小学校よりも人数が少ないこともあり（朝陽小学校では、最大で 20 人以上クラブに所属していた時もある）、1 人ひとりに目を配るためには、人数が少ない方が、演奏技術が高まると考えられる。

神氏：生徒が「僕が 1 年目の時はこういうのやらなかったんだって曲なのかな？くらいのものの練習をしていた」と言っていたので。たぶんそのとき 20 数人くらいいたらしいです。全員に（教える）って。だからたぶん指ならしの動きとかそういうのでやっていたのではないかなという話をしていたので。今の 7 人でのクラブはちょうどいいかも。

【コード 6：津軽三味線の成果発表】

（メモ）朝陽小学校も大和沢小学校も学習発表会で 1 年の活動の成果発表を行う。それ以外で、朝陽小学校では平成 28 年度は教育委員会が主催しヒロロで開催した「教育フェスティバル」に参加するなど、地域の中での発表の場もある。

多田氏：教育関係繋がりで、クラブの子どもたちがいろんな場面で演奏するって機会は増えた。朝陽の子たちがヒロロで演奏したりした。

神氏：朝陽小学校で、三味線を昨年、教育フェスティバルというイベントで、ヒロロで演奏したことが一回だけあります。

神氏：大和沢小学校でも朝陽小学校と同じように学習発表会で演奏していました。そのときに（小学生の発表の他に）夢弦会のみなさんに 1 曲弾いてもらっていました。4 人くらいきて体育館で演奏してくれました。そういうのもあって、三味線クラブの子どもたちだけは聞けるんですよ。予行は聞けないので。でも、三味線クラブのこどもだけは自分たちのステージが終わった後、下に降りて、他の 4 人の（夢弦会）の先生がひいてくださるのを見て、おおおって（感動していた）。

【コード 7：津軽三味線クラブと保護者との関わり】

（メモ）①子どもたちへのアンケート調査からもわかるように、子どもが津軽三味線に興味を持つことと同じくらい、保護者は津軽三味線を自分の子どもに体験して欲しいという想いを持っている。そのため、大和沢小学校での取り組みのように、子どもが望めば、保護者にとっては少し負担になる三味線の持ち運びも行ったり、そこまでの尽力はしなくても、我が子が頑張って披露した津軽三味線にさらに興味を持ってくれるようになるのだろう。

多田氏：今までクラブで津軽三味線を子どもたちに教えてて、子どもたちの親から演奏依頼くるのは何件かあった。そういうのは嬉しいよね。

多田氏：朝陽と大和沢小学校と比べれば、大和沢の神先生がいたとき、動いてくれて、楽器背負って登下校するのは危ないから、保護者が三味線を一緒に取りに来て学校に持ってきてくれるっていうのをクリアすれば、家に持ち出し可能にしてくれた。みんな持って行ってやるのね。だからクラブ内でも、1～3 段やった後に、りんご節とか津軽甚句とか学習発表会に 2～3 曲やるんだって。朝陽は 1 段が精一杯だもん。4 年生は 1 段終わらないこともある。

【コード 8：学校教員と津軽三味線奏者】

（メモ）多田氏と、神氏は大和沢小学校のクラブの時から約 10 年の付き合いであることもあり、お互いに尊敬し合い、絆が確立されていた。この絆が津軽三味線クラブの連携にも活かされ、今年は例年になく休み時間や放課後などの追加練習が行われていた。

多田氏：ちょうど大和沢中学校にいたときに担当だった先生が神先生。あの先生は熱心で、指導もしてくれるので、あの先生がいるかいないかで全然（やりやすさが）違う。

神氏：自分がここ（茂森新町）出身だったんですけど、ねぷたのこととか津軽三味線のこととか離れてなくって。でも三味線って（いう楽器に触れるようになったのは）大人になってからです、わたし。やっぱり多田さんが来てからの方が強いので、それまでは、三味線のことはまったく。だから、多田さんのやっている活動はすごいものだなって（感じます）。

【コード 9：津軽三味線クラブの以外での多田氏の学校への関わり】

（メモ）多田氏は津軽三味線クラブのみならず、クラブができた平成 14 年から毎年、卒業式で横笛の生演奏を行ったり、町探検、夢を語るドリームタイム等で小学校に関わる事が多い。津軽三味線奏者として、また地域の大人の 1 人として、児童との関わりをすることで、地域に貢献している。

多田氏：クラブ活動以外でも子どもたちと関わるよ。例えば、町探検とかで（毎年）小学生（2 年生）たちが見学に来て質問をたくさんしていく。

神氏：多田さん自体が、ドリームタイムみたいなもので、ゲストで来てることがあるはずなのですよね。子どもたちの前で自分の夢を語るみたいなものです。

【コード 10：津軽三味線クラブの活動から児童になって欲しい姿】

（メモ）津軽三味線奏者として後継者育成のためにクラブ活動に尽力することもあるが、神氏が実際に子どもから聞いたような経験はその児童が大人になったときに「自分が生まれ育った地域の伝統的楽器である津軽三味線を自分は弾けるんだぞ」という想いを持つことは、序論（3）①でも述べた、津軽三味線、さらには青森県の愛着にも繋がると考えられる。

多田氏：これをきっかけに三味線をやる人が増えてもらいたいというのが正直なところ。あと、子どもたちに対しては小さいときに体験できたという思い出は持っていて欲しい。

神氏：伝統芸能に触れるという事の他に単純なことなのですが、外部の方、地域の方から学ぶこと、儀式的な意味合い、礼儀作法、こういうのを学ぶことができるいい機会だとわたしは個人的に思ってます。

神氏：学校教育の中で伝統文化について書いているのを読むと、最終的には郷土を愛し、国を愛しみたいなことになってくるのですが、そこまで小学生に求めることは無理だと思っているので、触れる事って言うのが、最初のステップであると思っています。なので、他国の方に広げるよりもまずは自分の地域を愛すること、自分の国をしらないで、他の国を愛することはできないと思うので、まずは、最初のステップだと思います。

神氏：クラブを卒業した子が、あるときぽろっと言ったのが、修学旅行で電車に乗るときに弘前駅で三味線がかかってたときにあっ、じょんから節だってわかるって。それがすごい嬉しかったっていうのをしゃべってたときに、ただ三味線を習ってるなっていうのではなく、感じ方がやっていた子とやっていなかった子の違いはすごく感じたので、そういう意味でやっぱり“触れる”という意味は大きいなと思いました。

神氏：三味線を全く知らないで大人になるよりもちょっとでも知ってもらえるだけでも嬉しいなって。本当、そのレベルだけれどもやって損はなかったんだと思います。

【コード 11：津軽三味線奏者と学校の津軽三味線の取り上げ方の認識のズレ】

（メモ）津軽三味線を学校教育の中で取り扱う方法として「1－2　青森県の学校現場における津軽三味線の取り組みの現状」にも取り上げたようにいくつかの方法がある。津軽三味線奏者は、できれば、授業として取り上げたいと考えている。一方、授業でとり上げると、曲として完成できるほどの時間が確保できないため、コード 3 にも示したとおり、楽しさをわからないまま授業が終わってしまうことになりかねない。

多田氏：本当は授業でとりあげてもらうのが一番。でも、授業でまでいかなくても、部活あったらいいのになって思う。クラブからもう少し欲張って、2 週間に 1 回ではなく、もっとできる。クラブは時間ない。夏休み挟むし、空く週 3 週間あくし、ちょっと厳しいな。

神氏：授業で取り入れるとなると教科になってしまう。音楽の時間に津軽三味線を取り入れるとなると可能ですが、今小学校ではそこまで求めていない。

神氏：まずは一定期間の練習が必要じゃないですか。。なので、単純ですけれども、学校の中で扱うには各教科のようにやるのは無理ですね。時間がかかりすぎるんで、クラブ程度であれば大丈夫です。

【コード 12：伝統文化の継承者と学校との繋がり】

（メモ）学校間での交流がないため、なにか例えば津軽三味線をやりたくても繋がりがないため、活動できていない学校があることが危惧される。

多田：　津軽三味線を学校教育でやりたい場合、学校の先生とかから、直接電話かかってきて、朝陽で三味線やるって聞いたんだけど、うちでもやりたいって。そっから学校の教育委員会に話が行って非常勤講師手当が出るようになっている。

神氏：もし伝統文化を学校教育の中で取り入れる際に外部講師を呼ぶとなると、個人的に知っているとか、個人的に地域の方と仲がいいとか（そういう人を呼んでくる）。そういうのでなければやることはないと思います。

【コード 13：学校における津軽三味線クラブ活動へのサポート】

（メモ）お金儲けではない地域の津軽三味線奏者の多田氏のサポートがないと、津軽三味線クラブは存続し続けることは不可能である。

多田氏：この津軽三味線クラブはほとんどボランティアだな。自分で足りない分は出している。利益のためにやっているわけではないし。そこまでしてもやってあげるのは、自分が小さい頃はそういうのがなかったし、三味線の皮張ったり三味線のレンタル出入る人がいないから（それを出来る自分が子どもたちのためにやっている）。

多田氏：皮は商品としては出せないけど、品質は確かなやつを子どもたちに回す。たとえば、10 枚、20 枚仕入れたときに 2〜3 枚商品にならないやつが混ざってくるんだって。そういうのを子どもたちに回す。俺も負担分を自分の中では軽くできるわけだし、子どもたちは体験できるしでお互いにそれでいいのかなって。

神氏：結局最終的にはお金の問題が絡んでくるので、たぶんクラブで多田さんのところにお願いしていますけど、すごいびっくりするくらいの値段でも引き受けてくださっているんだと思うんです。こっち側と言うよりは、多田さんの方でお金儲けが目当てではなくて、来てくださっているということは強く感じます。

【コード 14：学校教育における津軽三味線の取り扱いの課題】

（メモ）津軽三味線は楽器が高価なこと、さらに楽器だけがあってもメンテナンスや音合わせ、教えるのに至るまでかなりの熟練した技術が必要になる。そのため、きちんと教えてくれる奏者がいない段階での部活動などの学校教育での取り扱いに対してはかなりハードルは高いと考えられる。

多田：楽器の準備が整えば、もっとやれる人数が増えるんではないかなってところで。10 本くらいが精一杯だもんな。

神氏：三味線をするに当たっては、指導者とか三味線の台数、メンテナンス等が問題になっていくと思います。購入するには学校の予算って決まっているので、無理だと思うし、あと、単純ですが、あの「じゃじゃじゃーん」ってあの音をあわせるの（調律）ですら、できないので、何年やってもできていないので、“ド”“ソ”“ド”というのは教えてもらったのですが。

ⅱ）調査結果から明らかとなったダイアグラム

コード 1～14 までの事例を踏まえ、朝陽小学校における津軽三味線クラブの関係図を以下に示し、それに対する考察を行う。

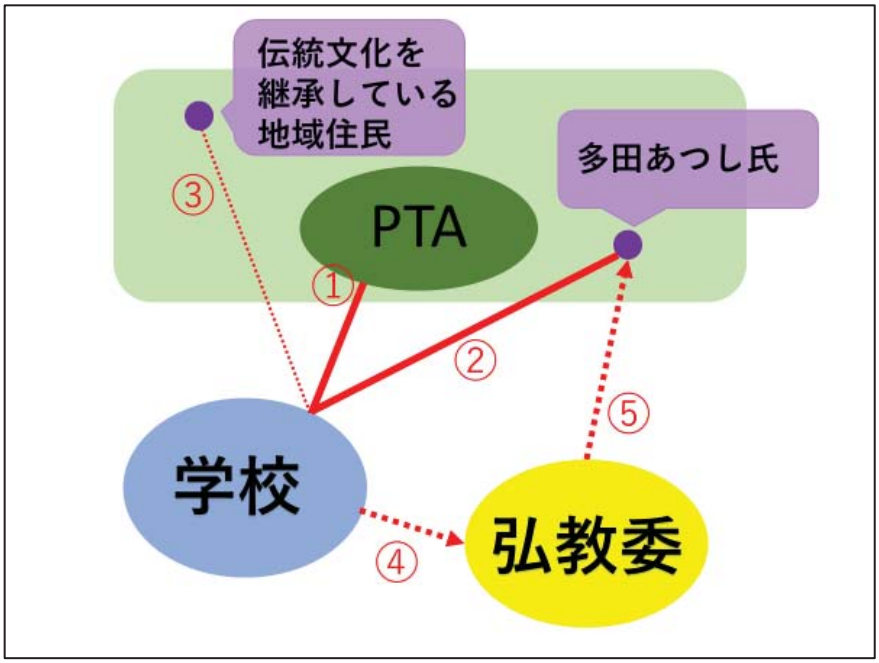


図　1　ー 10　学校と地域のダイアグラム

①PTA と学校

PTA はその学校に子どもが通う保護者で構成され、その繋がりは強い。

②多田あつし氏と学校

地域住民でもあり、津軽三味線奏者の多田あつし氏であるが、コードメモ 8 から、津軽三味線クラブの活動以外での学校との連携、及び、神氏など学校の教員との密な関係も明らかとなった。さらに、コードメモ 12 より、津軽三味線を学校で取り入れる際には、学校と津軽三味線奏者が直接やりとりしなければならないことも明らかとなった。また、コードメモ 2 より、③多田あつし氏以外の地域で伝統文化を継承している地域住民との関わりはないことが明らかとなった。

④学校と弘前市教育委員会（図 1－10 では弘教委と記している）

学校側が弘前市教育委員会に外部講師として、津軽三味線奏者を申請するそれが受理されると、⑤コードメモ 12 から、外部講師として活動している多田あつしは外部講師として認定され、弘前市教育委員会から、講師手当を受け取っていることが明らかとなった。

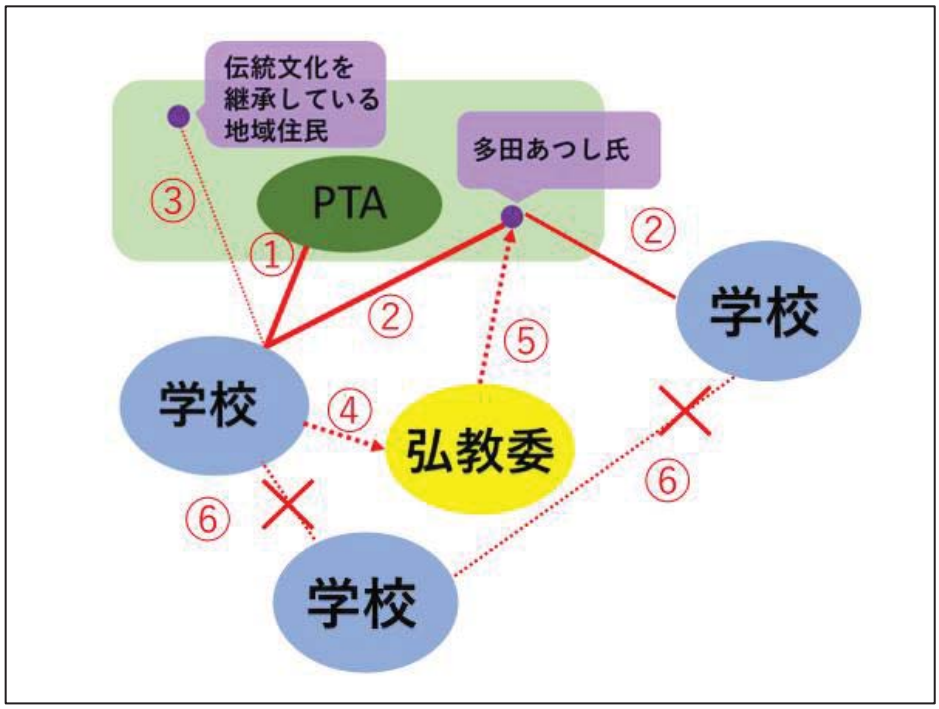


図　1　ー 11　学校間のダイアグラム

⑤、⑥において、コード 1 及び、コード 12 より学校間の情報共有がないため、学校がある地域に津軽三味線奏者がいなかった場合、直接津軽三味線奏者に学校が連絡をとり、外部講師として派遣しなければならないことが明らかとなった。

（3）青森県教育庁 中南教育事務所の主任指導主事 工藤良信氏及び、主任社会教育主事 神田昌彦氏へのヒアリング調査

青森県教育庁中南教育事務所に勤めている主任社会教育主事の工藤良信氏は、総合学習の中でも青森県内でも先進事例としてまち学習に取り組んでいた黒石市立浅瀬石小学校に勤め、担当していた教員であり、総合的な学習の時間地域との連携を行っていた。さらに現在主任社会主事である神田昌彦氏は社会教育のスペシャリストとして、県内で多くの社会教育の事例について知っている人物でもある。以上の2名の方へ、「1章　1－4弘前市立朝陽小学校 津軽三味線クラブの事例」から明らかとなった課題及び可能性を基盤にしながら、実際の学校現場での様子や社会教育立場からの意見をすりあわせることで、さらなる研究の向上を行うこととした。

調査日等は以下の通りである。

表　1　ー 6　中南教育事務所の工藤氏、神田氏への調査概要

対象	青森県教育庁 中南教育事務所 主任指導主事 工藤良信氏 及び 主任社会教育主事 神田昌彦氏
日時	2018年1月25日　13：00～14：30
場所	弘前市合同庁舎　1階会議室

①伝統芸能が学校で取り扱われる事例

（神田）実際、二中などでは津軽三味線を総合学習の時間の中で取り入れている。津軽三味線は全部で20本所有していて、それを用いながら外部講師を呼んで年10回程度で行い成果を文化祭で発表しているようです。ただ、弘前市の教育委員会でも、どの程度津軽三味線を含む伝統芸能を学校教育の中で取り入れているのかは把握していないようです。

②クラブ活動と児童の関係性

（工藤）私が前に赴任していた大鰐小学校でもクラブ活動で外部講師の方々に来ていただいて、交流も含めてやってもっていた。そういうボランティアの活動は学校にとっても良いし、地域の人にとっても、そういうことを伝えたいという想いがあって、少しでも学校にお手伝い出来ればということで、お手伝いしてくださる方もいるし、ある程度、両方にとって良いことがあるというのが、一番長続きするというか、一番良い方法。

③人材の紹介

（工藤）一番は市町村の教育委員会とかで人材バンクで持っていたり、前は学校独自に地域のそういうのがあったり、市教委とかそういうところから繋げていただいて、見つけるきっかけを作ったりすることはあると思うけど、広く言うと県の関係あたりだと、問い合

わせがあったりすれば社会教育の方でなどでもそういう人を知っていたりするので、そういう人を紹介することはあるかと思うけど、やっぱり基本は学校独自に行うことが多い。

④学校間での共有の利点

割と（学校は独自に完結しているところがあるので、）他の学校のことがわからなかったりするんだよね。総合的な学習の時間に三味線やってるとか、クラブ活動としてやってるとか、こっちはやっていないとか、実際には共有できてるかって言うと、そういう（クラブ、総合などの）種目までは共有できていないのが一番だと思う。

もし、自分たちの学校の中で集約していれば、そういうところまでは必要ないのかもしれない。でも、情報があると、三味線やっているところがあると、そして、そこに三味線があると、そうすると、やりたいときにその学校から三味線を借りるとということは同じ弘前市内のところで行けば、校長先生同士が OK だと借りたりすることもできるから。そういうこともチャンスとしてあるので、情報はあったらあった方がいいのかなということ。

1－5　小結　伝統芸能を継承する学校現場とさらなる取り組みに向けての提案

（1）明らかとなった現状【成果】と【課題】

【成果】

①朝陽小学校も大和沢小学校も学習発表会で 1 年の活動の成果発表を行う。その他にも、朝陽小学校では平成 28 年度は教育委員会が主催しヒロロで開催した「教育フェスティバル」に参加するなど、地域の中での発表の場もあった。これら、発表を行うことで、津軽三味線クラブに所属した児童へ行ったアンケート調査からも「学習発表会が終わって、どのように感じましたか？」という項目に対して、「また演奏したい」が 71.4%、「もっとみんなに津軽三味線を知って欲しい」が 57.1%と高い結果であったことからも、ただ練習するのではなく、その成果を発表することで、さらに津軽三味線に対して良い思い出を持つことができると考えられる。

②多田氏は津軽三味線クラブのみならず、クラブができた平成 14 年から毎年、卒業式で横笛の生演奏を行ったり、町探検、夢を語るドリームタイム等で小学校に関わる事が多い。津軽三味線奏者として、また地域の大人の 1 人として、児童との関わりをすることで、貢献している。

③津軽三味線奏者として後継者育成のためにクラブ活動に尽力することもあるが、神氏が実際に児童から聞いた声で「修学旅行で電車に乗るときに弘前駅で三味線がかかってたときにあっ、じょんから節だってわかるって。それがすごい嬉しかったっていうのをしゃべってたときに、ただ三味線を習ってるなっていうのではなく、感じ方がやっていた子とやっていなかった子の違いはすごく感じたので、そういう意味でやっぱり“触れる”という意味は大きいなと思いました。」このような経験はその児童が大人になったときに「自分が生まれ育った地域の伝統的楽器である津軽三味線を自分は弾けるんだぞ」という想いを持つことは、序論（3）①でも述べた、津軽三味線、さらには青森県の愛着にも繋がると考えられる。

【課題】

④地域の伝統文化を学校教育の中で取り扱う方法はいくつかあるが、自分で調べまとめたり、簡単に体験できる物を行うことが多く、芸能をクラブ活動として行っている学校は少ない。さらに、学校でどのように伝統文化を取り扱っているかなど、情報共有が行われていない。

→新たに津軽三味線をやりたくても繋がりがないため、誰に頼めばよいのかわからず、活動できていない学校があることが危惧される。

⑤朝陽小学校のクラブ活動は 7 つで構成され、自分のやりたいものに希望を出して、グループ分けをされるものである。津軽三味線クラブは初めてクラブに入る 4 年生には人気がなく、一度経験した 5，6 年生はリピートしている。

→津軽三味線を経験したことがない 4 年生の児童の希望がなく、一度経験して楽しさ知った 5，6 年生はリピートしていることから、4 年生の児童が津軽三味線クラブを希望しない原因として上げられるのが、津軽三味線を演奏した経験がないため、楽しさを知らず、それ以外のもっと普段の生活に身近な「スポーツ」や「家庭科」クラブなどに希望を出す人が多いと考えられる。

⑥津軽三味線クラブのような他学年合同クラブは進行状況が学年ごとに異なるため、教える側も進行状況に応じたグループ分けと教える側の人数を調整する必要がある。

⑦津軽三味線自体、決して、安い物ではなく、維持するだけでも、それなりの費用がかかる。そのため、津軽三味線奏者の多田氏のお金儲けではないサポートがないと、津軽三味線クラブは存続し続けることは不可能である。

→津軽三味線は楽器が高価なこと、さらに楽器だけがあってもメンテナンスや音合わせ、教えるのに至るまでかなりの熟練した技術が必要になる。そのため、きちんと教えてくれる奏者がいない段階での部活動や授業などの学校教育での取り扱いに対してかなりハードルは高いと考えられる。

（2）提案

①明らかとなった現状⑤の課題に対して、津軽三味線を始めるハードルをできるだけ低くするための方策を考える。

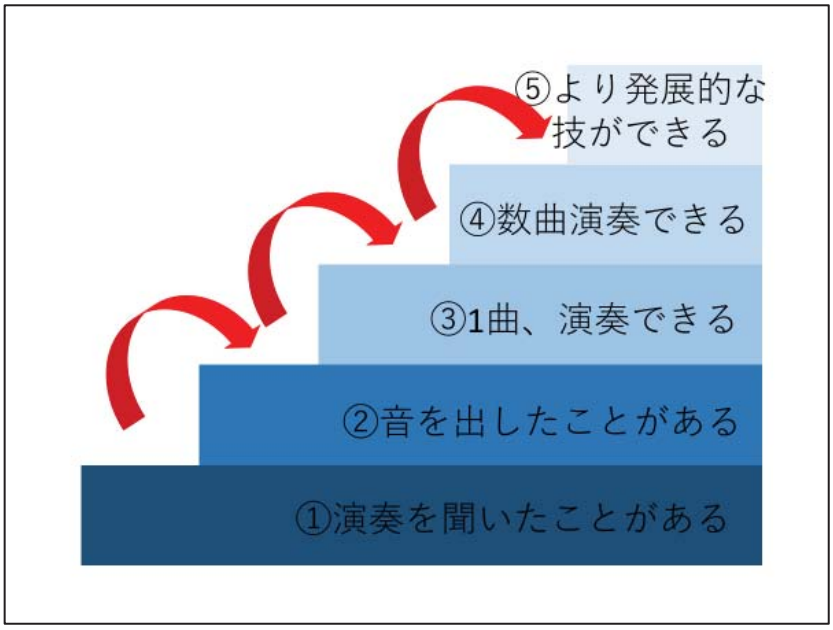


図　1　ー 12　津軽三味線を始めるまでのハードル

図－12 からもわかるとおり、徐々においてステップアップしていくことで、子どもがより津軽三味線を身近に感じることができる。

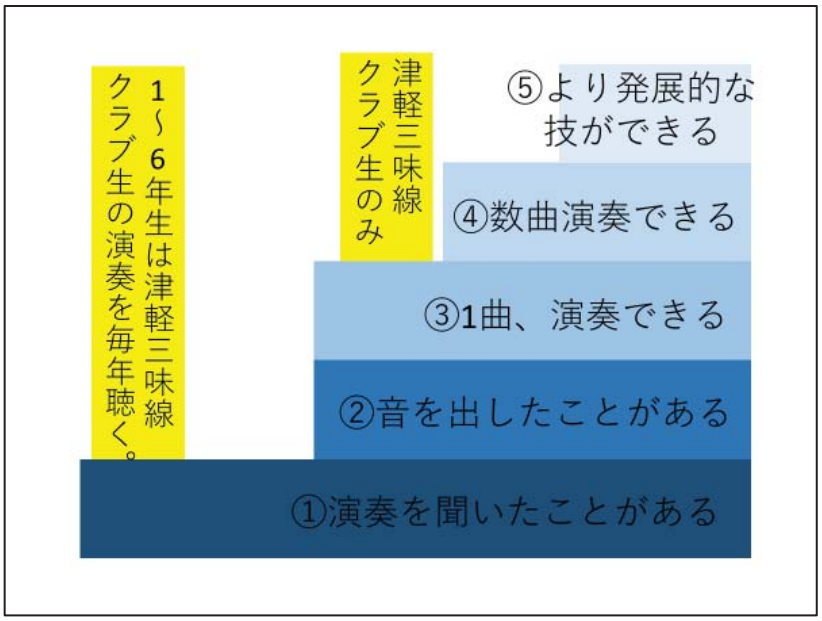
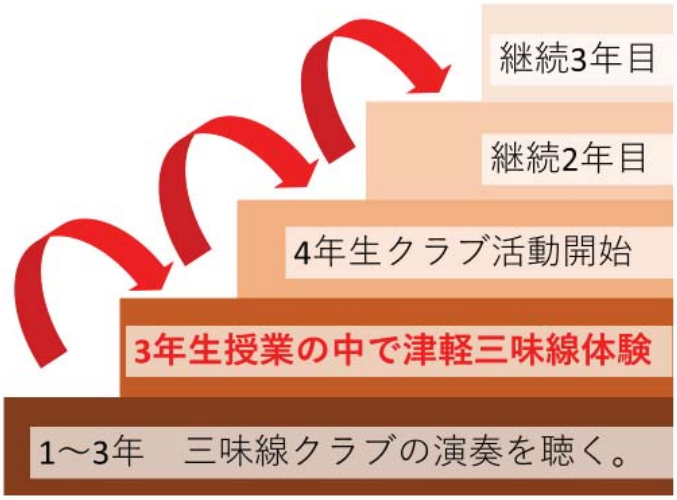


図　1　ー 13　朝陽小学校津軽三味線の取り組みの現状

図 1－13 より、現状として、1～6 年生は毎年学習発表会にて、津軽三味線クラブの演奏を聞いているが、実際に個人的に興味のある人のみ課外学習で津軽三味線を学ぶがそれ以外の児童は、「②音を出したことがある」児童はほとんどいない。そのため、津軽三味線クラブに所属してから初めて津軽三味線に触ることになる。そして、短いクラブ活動の時間の中で曲を覚え、最終的に保護者や他学年の児童の前での演奏をしなければならないのである。



そこで、そのギャップをなくすために「3 年生の授業の中での津軽三味線体験」を提案する。この授業によって、実際に津軽三味線クラブに所属しようか他のクラブに所属しようか迷っている児童に対して、「津軽三味線の音の出る楽しさ」や、また他の楽器では体験できない「左手でツボを押さえながら撥で叩くという難しさ」も理解することができる。理解した上で所属したいクラブを選べるということに大きなメリットがある。

実際に触ったことがない児童が津軽三味線クラブに所属して、想像していた以上に難しく、他の児童の演奏について行けなかったために、次年度は津軽三味線以外のクラブに所属しようという人も実際に出てきていた。そのため、一度授業で触れることで、イメージと実際の演奏の難しさのギャップを埋めること、また興味が無くても、一度体験することで、津軽三味線に興味を持ち、新たに 4 年生で津軽三味線クラブに入る動機付けにもなり得る。

さらに、津軽三味線クラブに所属しなくとも、児童が授業で津軽三味線に触れることで、地域の伝統文化を“体験”する貴重な経験になると考えられる。

②学校間での情報共有の場を作る。

学校でどのように伝統芸能を取り扱っているのか共有できる場を作る。すると、伝統芸能の継承者や伝統芸能を取り扱う上で重要な物品の所在などもあわせて共有することで、さらなる伝統芸能の取り扱い方法やそのようなノウハウが明らかとなり、学校教育における伝統芸能の取り扱い方の幅が広がると考えられる。

2. ねぷたからみる祭り継承の課題と可能性

2－1　2 章における調査概要

2－2　 祭りを継承する意義

2－3　茂森新町ねぷた同好会の取り組み

2－4　茂森新町ねぷた同好会の事例から見る、弘前ねぷたまつりの継承による地域コミュニティ形成の可能性

2－5　小結　祭りを継承に向けての提案

2－1　2章における調査概要

(1) 本章の研究目的と分析方法

本章では祭りを地域で継承する意義を文献調査などから明らかにすると同時に、弘前市の祭りであるねぷた祭りにおいて、44年連続出場を果たす茂森新町ねぷた同好会の取り組みについて取り上げ、地域での伝統文化継承の課題と可能性を明らかにし、祭りを継承するために必要な点を考察する。

実際に筆者も、幼少期からねぷた祭りを身近に感じてきており、自分が生まれ育った地区のねぷた団体である、茂森新町ねぷた同好会の一員として平成28年度から活動している。

研究方法は、文献調査および、ねぷた同好会に所属しているまたは、同好会には参加していないが現在茂森新町ねぷたに出ているまたは、幼少期に茂森新町ねぷたに参加していた計10名へのヒアリング調査に基づく。

(2) 研究対象の選定理由

研究対象「弘前ねぷた」の選定理由は「1章　1－2　(2) 研究対象の選定理由」　に詳しく記載している。

(2) 分析方法

ヒアリング調査の分析方法は「1章　1－2　(3) 分析方法」に詳しく記載している。

2－2　地域で祭りを継承する意義

（1）祭りが継承されることによる地域へ与える影響

地域の中で、祭りが継承されることについてどのような影響があるのかということに対して、芦田（2001）は『日本社会における祭りは、そもそも地域社会の維持を目的としていた。というのも、かつてのムラやマチの生活は、ひとつの小さな地域社会＝共同体の内部でおおむねまかなわれており、そうした時代にあっては、住民に全体的な相互関係性を確認させ、「われわれ」を意識させる祭りは、社会集団の存立にとって不可欠なものであった。』と述べている。[24]

さらに、松平（1983）も『祭りの成立条件には、凝集・構造・媒介の 3 つが必要であり、凝集とは、一体感を作り出す共通の基盤や意志の存在をあらわす。構造とは、それを実現するための過程と組み立てとを指す。また、媒介とは、日常の世界を非日常的なものへと変化させ、心的昂進をひきだすことによって、社会的結合をなしとげるための触媒である。つまり、祭りは「聖」なるものを媒介として成立する「俗」の一時的な逆転のための場であり、そこに社会的な一体感を作り出す舞台なのである。町内が祭りの中にこうした一体感を作り出そうとしたとき、おのずから、神々の祭りとは違うものへと発展せざるを得なかった。なにより特徴的なのは、町内の祭礼行事、つまり、神事を助け、神を賑わす神賑の行事が、村落のそれと比べて著しく華美に彩られていったことである。』と述べている。[25]

芦田、松平の論述から、祭りはただ神々への信仰を示すのではなく、その過程を通して仲間と一体感を感じることができる非日常的な場であると言える。さらに、祭りの非日常性と住民同士の密な関わりが、住民相互の関係性を認識させ、社会集団の存立にとって必要不可欠なものになっていったと言える。

また、町村の共同体の人々とそれを守る土地神との間で進められるあくまで「内」なるものとした祭りは本来、基本的な性格から豪華に飾りたてる必要性に乏しい。しかしその祭りが、豪華に大掛かりになっていった理由を松平（1983）[26] は『町内には神と人との間で作られる社会の基本的秩序は存在しない。だから、神と人との間の「内」なる祭りも、生れ出る契機をもちえない。凝集のための「内」なる基盤は甚だ微弱である。そしてだからこそ、町内は祭りの構造に力を注ぐ。祭りはここでは、村落よりも一層ショッキングな組み立てとプロセスをもたなければならない。町内では、神を集合表現として社会的紐帯を強化するためには、日常の生活秩序とは極度に大きな落差のある非日常的な祭りの構造

---

[24] 芦田徹郎（2001）、「祭りと宗教の現代社会学」世界思想社　p..30

[25] 松平誠（1983）、「祭りの文化」有斐閣選書、p.41

[26] 前掲・松平（1983）、p..42

をつくりださなければならない。そうでなければ、凝集力の微弱な社会にあって、「外」なる神を媒介とする心的昂進を実現することは難しい。いきおい、町内にあたっては、祭りの準備の大掛かりになる、祝い物は大げさになる。さまざまの仕掛けをもつきらびやかな祭りが生まれたのである。』と述べている。

こうして、きらびやかな祭りが誕生した。しかし、「序論　2，伝統文化の概要　(2) 伝統文化を取り巻く環境の変化」での述べたように、近年、人口減少が著しいこと、地域コミュニティの希薄化など地域を取り巻く様々な問題によって、社会集団の存立にとって必要不可欠な祭りの継承も危ぶまれているのである。

このことから、弘前ねぷたまつりを事例として祭りを継承することによる地域ミュニティ継承によるまち育ての可能性を探る。

2－3 茂森新町ねぷた同好会の取り組み

（1）青森県弘前市

弘前市は、慶長 16 年（1611 年）2 代弘前藩主津軽信枚が弘前城を築城して以来、城下町として発展し、現在に至るまで津軽地域の中心として繁栄してきた。明治以降は軍都として栄え、戦後は弘前大学を中心とした学園都市として生まれ変わっている。また、弘前市は、青森県の南西部、広大な津軽平野の南部に位置し、総面積 524.12km2 と県全体の 5.45％を占めており、平成 18 年 2 月 27 日に弘前市、岩木町、相馬村の 3 市町村が合併し、現在の弘前市が誕生した。平成 30 年 1 月 1 日現在青森県弘前市は人口、174,050 人である[27]。

弘前市の地形は、山地、丘陵地、低地の 3 つに区分される。北西部には岩木山とこれに連なる山田野台地があり、南部には白神山地と大鰐山地及びこれに連なる丘陵地が東西に分布している。 市内の中央部には白神山地を水源とする岩木川が、東方向から北方向へと向きを変えながら流れ、市の東側の境界には岩木川に合流する平川が流れている。これらの河川の流域には沖積平野が形成されて、肥沃な水田地帯となっており、この 2 つの河川に囲まれた洪積台地の弘前台地には市街地が形成されている。 また、この弘前台地や山田野台地などには、青森県のりんごの約 4 割を生産するりんご園が広がり、樹林地・山林などとともに緑豊かな自然景観となっている。さらに、弘前市の土地利用は、大きく、都市部、農村部、山間部の 3 つに区分される。 都市部は、旧弘前市と旧岩木町の市街地部分で、旧弘前市の市街地は、さらに中心市街地とその周辺に広がる市街地に分かれる。 旧城下町を中心とした中心市街地は、公共施設や商業施設、住宅などが複合的に立地して、にぎわいがある[28]。

（2）茂森新町

茂森新町は江戸時代から現在までかけて変化しない弘前市の地名である。茂森新町は 1 丁目～4 丁目で構成されており、弘前市立朝陽小学校学区に含まれる。茂森新町はこの小学校学区の町内の中では最も大きな町内であり、人口・世帯数も多いが近年の人口減少問題は茂森新町においても例外ではなく、深刻な問題となっている。ここで、弘前市が公開しているデータから、平成 11 年～平成 29 年の茂森新町の世帯数の推移（図 2－1）と人口推移[29]（図 2－2）をまとめ、以下に示した。ただし、のデータは 3 年ごとの推移とし、それぞれのデータはすべて 1 月 31 日付けのデータである。

---

[27] 弘前市「オープンデータひろさき」 https://www.opendata-hirosaki.jp/ （2018 年 1 月閲覧）

[28] 弘前市（2015）「弘前らしさとまちづくりの課題」p..10～16

[29] 弘前市「オープンデータひろさき」 https://www.opendata-hirosaki.jp/ （2018 年 1 月閲覧）

図　2－ 1 茂森新町世帯数推移

出典：弘前市「オープンデータひろさき」

https://www.opendata-hirosaki.jp/　（2018 年 1 月閲覧）より作成

図 2－1 より、平成 11 年から、平成 29 年まで、世帯数は多少の推移はあるものの、それほど差が見られなかった。

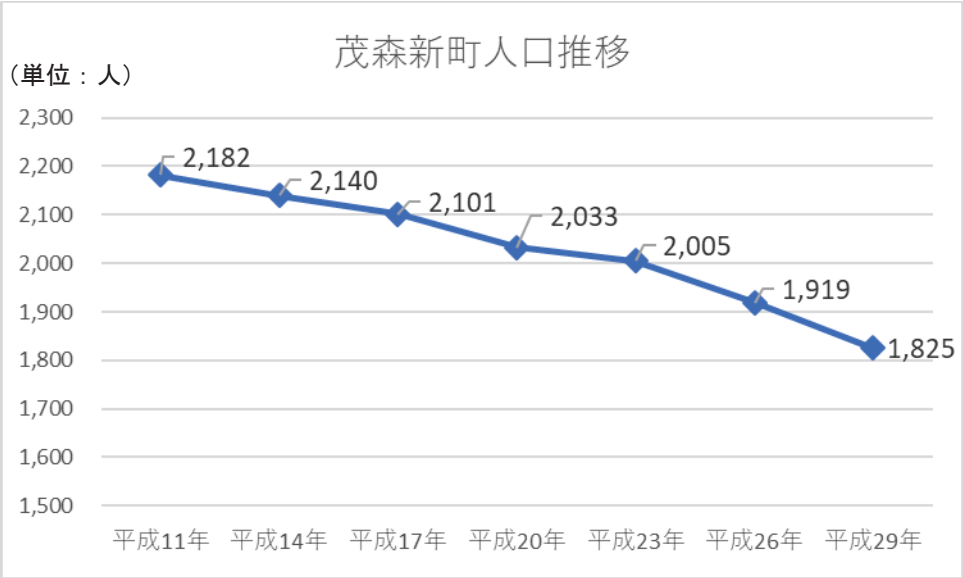


図　2－ 2 茂森新町人口推移

出典：弘前市「オープンデータひろさき」

https://www.opendata-hirosaki.jp/　（2018 年 1 月閲覧）より作成

図 2－2 から、人口はこの 18 年間で 350 人ほど減少していることが読み取れる。しかし、図 2－1 で見たように世帯数が変化せず、人口が減少していることから、核家族化が茂森新町でも例外なく進んでいることが明らかとなった。

（3）弘前ねぷた祭りの概要

ねぷた祭りについて記載されている信頼できる資料の中で最も古い記述は享保 7 年（1722）「御国日記」であり、300 年以上の歴史を誇る。起源は諸説あるが、七夕祭りや精霊流しとともに「眠り流し」（睡魔という、目に見えない悪魔を追い払うための行事）であると言われ、全国各地で行われている風習だった。その際に、燈火なども用いられ、戦の際は、たくさんの敵がいるように相手に見せるため夜なべしながら川に火を流したとも言われている。江戸時代からは、入り灯籠などが用いられ、徐々に手が込んできて大がかりな美麗なものへと進化し、現在の「ねぷた」へと進化してきたと言われている。

現在、弘前ねぷた祭りは毎年 8/1～7 の 7 日間に渡り運行される。1～4 日は夜の土手町運行、5～6 日は夜の駅前運行、7 日は七日日（なぬかび）と呼ばれる日中運行が行われる。七日日は河川敷に多くのねぷたが集まり、ねぷたを燃やす最終日の運行である。2017 年は大型・扇ねぷた 80 台が運行され、多くの観光客を賑わせた。平成 28 年度のねぷた祭りにおける観光客数は 170 万人にも上り、年々増加している。弘前市のイベント観光入れ込み客数においても弘前桜祭りの 236 万人の観光客に次いで 2 位の一大イベントであると言える[30]。

（4）茂森新町ねぷた同好会

①茂森新町ねぷた同好会概要

茂森新町ねぷた同好会は、昭和 42 年に発足した。それ以前は、町内の中でも各個人でねぷたを出していることが多かったが、町会役員とかつての茂森新町有志会のメンバーによって「昔からある町内にあるねぷたを統一し、町民相互の親睦を図るため、茂森新町ねぷた同好会を発足させよう」と正式に茂森新町ねぷた同好会が発足した。現在、茂森新町ねぷた同好会の会員は約 120 人（年会費 1 万円／1 人）おり、制作から、紙貼り、電気調整まですべて自分たちで手がけ、運行を行っている。

また、茂森新町ねぷた同好会は平成 29 年度、ねぷたの最高賞である青森県知事賞を 2 年ぶり 18 回目の受賞をしている。ねぷたまつりコンテストの審査基準は大きく「構造」「絵（芸術）」「運行」「囃子」の 4 分野に分かれ、これらの総合得点で決定される[31]。

---

[30] 青森県観光国際戦略局　（2016）「平成 28 年青森県観光入込客統計」　p.14

[31] 弘前ねぷた参加団体協議会「コンテスト審査基準」http://neputa.jp.age_id=285

②茂森新町ねぷた同好会の作業・運行日程

茂森新町ねぷた同好会は毎年、以下の日程で準備・運行している。（表 2－1）

表　2－ 1　茂森新町ねぷた同好会作業・運行日程

月	日	作業	運行形態
7	7	小物類搬入、柱建ての段取り	
	8	ⅰ）柱建て	
	22	ⅱ）絵張り	
	25	ⅲ）電気調整	
	25～30	ⅳ）ねぷた囃子練習	
	31	運行最終確認	町内運行予行
8	1		町内運行
	2		審査日　土手町運行
	3		運行休み
	4		土手町運行
	5		駅前運行
	6		駅前運行
	7		町内運行

表 2－1 からもわかるとおり、土手町や駅前の運行など他町民の前で運行しなくとも、7 月 31 日、8 月 1 日、7 日など、「町内での運行」を行っている。これは、茂森新町ねぷた同好会がこだわっている地域の人々の協力のおかげでねぷた運行が出来ているという町内の人々への感謝の気持ちを忘れないためであるそうだ。

また、具体的な作業について以下に示す。ⅰ）柱建て～ⅳ）ねぷた囃子練習の番号は表 2－1 と対応している。さらに、ⅴ）茂森新町のこだわり　を示す。

ⅰ）柱建て

柱建ての作業は、最初のねぷたの作業として行われるものであり、大型ねぷたの骨組みを組み立てるものである（写真 1)。この組み立てが終わると、その年のねぷたの安全を祈願するお祓いが行われてる。

（2018 年 1 月閲覧）

写真 2　柱建て作業後の大型ねぷたの骨組み

ⅱ）絵張り

茂森新町ねぷた同好会は同好会が発足時の 1974 年から現在までねぷた絵師としては弘前の中でも随一の三浦呑龍氏に大型ねぷたの絵を依頼している。この出来上がった絵を同好会の人々で慎重に張り付ける。ねぷたの作業の中で最も緊張する場面であるといっても過言ではない。（写真 2）には、ねぷたの内側からと撮った鏡絵の脇にあるツルの絵を張っている様子を示す。（写真 3）には、小型ねぷたの開きを張っている様子を示す。

写真 3　ねぷた絵張り　鏡絵のツル張り付け作業

写真 4　小型ねぷたの開きのボタンを張る作業

ⅲ）電気調整

電気調整は、茂森新町ねぷた同好会のこだわりの一つである。毎年、三浦呑龍氏が描いた大型ねぷたの絵が最も美しく見えるように、電気の位置を一つひとつ調整していく。絵が張られる前の柱に白熱電球を取り付け（写真 4)、ねぷた絵を貼り付けた後で、会長がトランシーバーで指示を出し、中にいる人たちが連携しながら電球の位置を決めていく (写真 5)。他のねぷた団体はこの作業をしていない団体も多い。

ぼやっとした明かりと少し暗いところのメリハリをつける調整が難しい、熟練の技である（写真 6)。

写真 5　電気調整前の大型ねぷた

写真 6　電気調整の様子

写真 7　2017 年度　茂森新町ねぷた同好会 電気調整後のねぷた鏡絵

ⅳ）ねぷたの囃子

茂森新町ねぷた同好会は「太鼓」と「笛」のみで構成される昔ながらの演奏方法にこだわっている。これら囃子は、すぐ習得することは不可能なので、ある程度時間をかけて習得する必要がある。そこで、茂森新町ねぷた同好会では、毎年、ねぷたの運行前に子どもたちを集めて練習を行う。

また、個別練習が終わると、全体で太鼓と笛を合わせて本番と同じように進行の練習も行う（写真 8）。この練習が終わるといよいよ本番であるが、本番は、大型ねぷたの後ろに太鼓、笛と列が続き、常にねぷたの鏡絵を見ながら行進を行う（写真 9）。

写真 8　囃子笛の練習　初心者クラス練習風景

写真 9　囃子方の行進の練習

写真 10　囃子方の運行本番

ｖ）茂森新町ねぷた同好会のこだわり

【ねぷたの素材】

現在、市内の弘前ねぷたの大部分は鉄骨で、額、ひらき、扇がすべて独立した構造でもあり、油圧やチェーン駆動により上下に稼働したり、扇のみの回転も可能な、いわゆる「ハイテクねぷた」である。しかし、茂森新町ねぷた同好会はかつてねぷた同好会の発足時に尽力してくれた東日流道場師範の三上定次氏の助言を受け、伝統を守り通し、現在では市内にある木造一体型の大型ねぷた中でも随一といえるだろう。なぬかび日にはねぷたを材木の一本一本にまで解体し、翌年の柱建てまで、同好会の方が貸している専用の格納庫に収納している[32]。

【ねぷたの高さ】

また、現在、上記したようにねぷた自体が上下に稼働したり、ねぷたを運行する電線の地中化を行うことでねぷたの大型化が進んでいる。現在弘前で最も大きなねぷたは 9 メートルを超える中、茂森新町のねぷたの高さは約 6.1 メートルと決められており、高さは弘前ねぷたで最も大きいものの約 2／3 程度しかない。これは、ねぷたの上下の稼働をせず、タメ（ねぷた絵の上の部分）を手動で下すことにこだわり、町内の電線の最も低いところや最も道幅の狭いところを、町内をねぷたが正面を向いて運行で得きる大きさのギリギリ高さなのである[33]。タメを下ろしている様子を（写真 10）に示す。何事も町内中心で考えているのがこの茂森新町ねぷた同好会の特徴であるといえる。

写真 11　タメを手動で下ろして信号を避ける様子

[32] 茂森新町ねぷた同好会（1998）「茂森新町ねぷたの歩み」p..35

[33] 前掲・茂森新町ねぷた同好会　p..28

2－4　茂森新町ねぷた同好会を事例からみる弘前ねぷたまつりの継承による地域コミュニティ形成の可能性

(1) ヒアリング対象者

ねぷた祭りを継承し続けるためには、様々な要因が考えられる。本研究では、人口減少が進む中で、祭りを継承することの意義、また、継承していくために必要なことを明らかにするために、【幼少期の参加の有無】【家族の参加の有無】【現在本人が参加しているのか】という 3 点に着目しながらヒアリング対象者を選定した。また、何組かの家族親と子にヒアリング調査を行うことで、家庭内でのねぷた継承のために行われていることもあわせてまとめる。

ヒアリング対象者は以下の A～J までの 10 名である。性別、年齢、所属等、個人的なプロフィールは表 2－2 に示す。

表　2－ 2 ヒアリング対象者

	年齢	性別	所属	幼少期の参加の有無	家族の参加の有無	現在本人参加の有無	備考
A氏	40代	男性	会社員	○	○	○	A氏とD氏は家族である。
B氏	20代	男性	公務員	×	△ (親戚が参加)	○	
C氏	20代	女性	会社員	○	△ (親戚が参加)	×	
D氏	10代	男性	学生	○	○	○	茂森新町同好会のねぷた絵師としても活動している。 A氏とD氏は家族である。
E氏	30代	男性	農家	○	○	○	茂森新町同好会のねぷた絵師としても活動している。
F氏	50代	男性	会社員	○	○	○	F氏とG氏は家族である。
G氏	20代	男性	会社員	○	○	△ (節目にお酒を送る)	
H氏	40代	男性	会社員	×	○	○	H氏とI氏は家族である。
I氏	20代	女性	会社員	○	○	○	
J氏	60代	男性	公務員	○	○	○	

ここから、家族構成等わかりやすいように、プロフィールを家系図で表すが、図 1—1 の例に従って図を作成する。

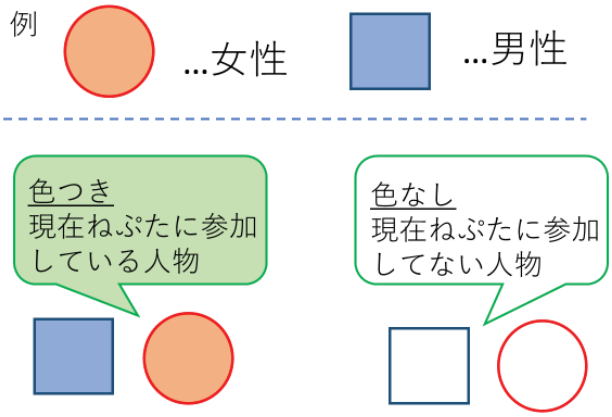


図　2－ 3　プロフィール家系図例

図 2—1 から、○を女性、□を男性とし、さらに●■のように色をつけた物を「現在ねぷたに参加している人物」、○□のように色をつけていない物は、「現在茂森新町ねぷたに参加していない」こととする。

それぞれ A～J の詳しいプロフィール及び、取材日程等は以下に示す。

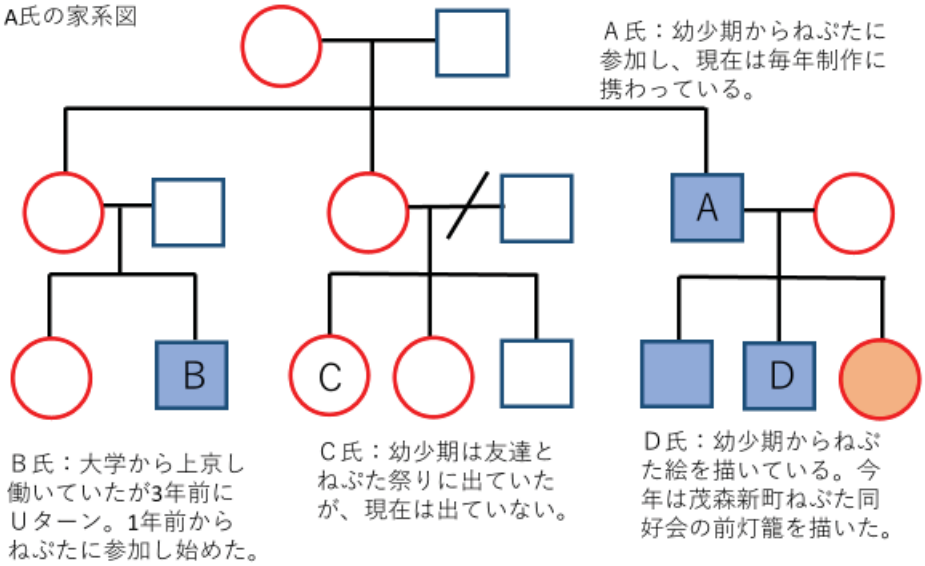


図　2－ 4　A、B、C、D 氏の家系図

ⅰ）　A氏【40代男性　会社員】（幼少期参加あり、家族ねぷた参加あり、本人ねぷた参加あり）

現在、茂森新町ねぷた同好会でねぷたの制作を積極的に行っているA氏である。A氏がねぷたを始めたきっかけは、家族の影響であり、3～4歳の頃から茂森新町ねぷたに参加していた。小学3年生で囃子の笛を始め、中学2年生のころまで笛で参加していた。高校卒業後は、東京で就職し、ねぷたの参加はなかったが、親や高校の学校の先生の勧めもあり21歳の時にUターンしてきた。それ以降、ねぷたには欠かさず毎年参加している。

また、A氏の子どもたち長男（21）次男（19）長女（17）は熱心にねぷたに参加している。その点も踏まえ、子どもたちが積極的にねぷたに参加している理由を明らかにしつつ、子どもたちを積極的にねぷたに参加させるために必要なことを考察する。また、A氏の次男D氏は町内のねぷた絵師としても活動していることから、家庭内におけるねぷた絵師育成の方法を明らかにする。

表　2－ 3　A氏の氏のヒアリング概要

調査対象	A氏（40代男性、会社員）
調査日時	2017年12月5日（火）　17：00～18：00
場所	A氏宅

ⅱ）B氏【20代男性　公務員】（幼少期参加なし、家族ねぷた参加△、本人ねぷた参加あり）

B氏は、実家が大鰐町にあり幼少期から高校まで大鰐町で育ったため、ねぷたに参加していなかった。しかし、親戚が熱心にねぷたに参加していたのを幼少期からみていたため、弘前ねぷた祭りには興味があった。しかし、部活動に熱心に取り組んでいたため、参加することはなく、大学入学と同時に上京し、就職したが、3年前転職を機に県内Uターン。そして、1年前から茂森新町ねぷた同好会でねぷたに参加するようになった。幼少期に参加していなかったものの、大人になってから参加するようになった経緯と、何がねぷたに継続的に参加していこうという意欲につながっているのかヒアリング調査から明らかにする。

表　2－ 4　B氏のヒアリング概要

調査対象	B氏（20代男性、公務員）
調査日時	2017年11月24日（金）　13：00～13：50
場所	ココス弘前茜町店

ⅲ）C 氏【20 代女性　会社員】（幼少期参加あり、家族ねぷた参加△、本人ねぷた参加なし）

C 氏は幼少期から茂森新町住んでおり、友達とねぷたに出ていたが、中学生になって以降参加していない。その理由を明らかにすることで、若者の祭り離れの原因を探る。

表　2－ 5　C 氏のヒアリング概要

調査対象	C氏（20代女性、会社員）
調査日時	2017年11月30日（木）　13：00～13：30
場所	C氏宅

ⅳ）D 氏【10 代男性　学生】（幼少期参加あり、家族参加あり、本人参加あり）

D 氏は幼少期から継続的に参加している。現在はねぷた本番は太鼓を叩く一方で、小学校 4 年生から町内のねぷた絵師としても活動している。今年は前灯籠を描いていた。どうしてねぷた絵を描くようになったのか、また、ねぷたに熱心に現在でも参加している理由から、町内でねぷた絵師を継続的に育てる可能性を探る。

表　2－ 6　D 氏のヒアリング概要

調査対象	D氏（10代男性、学生）
調査日時	2017年11月26日（木）　14：00～14：40
場所	D氏宅

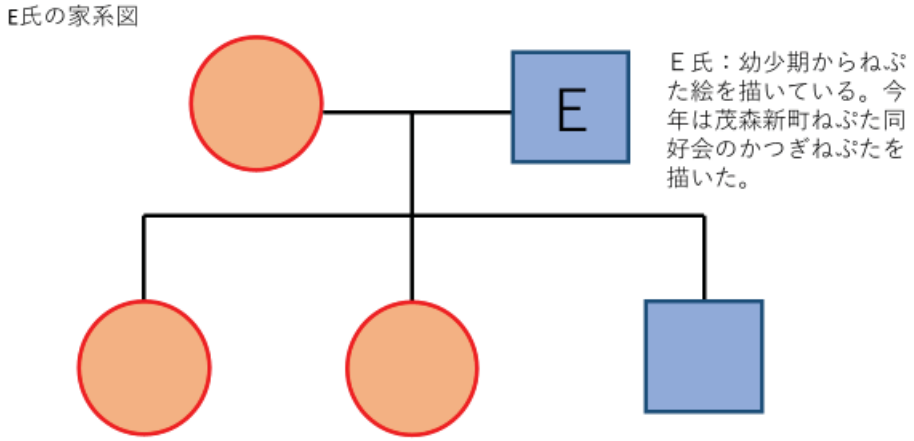


図　2－ 5　E 氏の家系図

ｖ）E 氏【30 代男性　農家】（幼少期参加あり、家族参加あり、本人参加あり）

E 氏は茂森新町出身者であり、物心ついたときから親の影響でねぷたに参加していた。現在は囃子方として活動している。さらに、E 氏は幼少期からねぷたに参加し、奥さんとはねぷたで出会い結婚し、現在は長女（13）次女（8）長男（5）を育てている。奥さん含め、家族全員でねぷたに参加している。また、町内のねぷた絵師として今年は担ぎねぷたの絵を高校生の時から描いている。これら家族のねぷたへの参加が子どもに与える影響及び、ねぷた絵師育成方法を明らかとする。

表　2－ 7　E 氏のヒアリング概要

調査対象	E氏（30代男性、農家）
調査日時	2017年12月13日（水）　18：00～19：00
場所	E氏宅

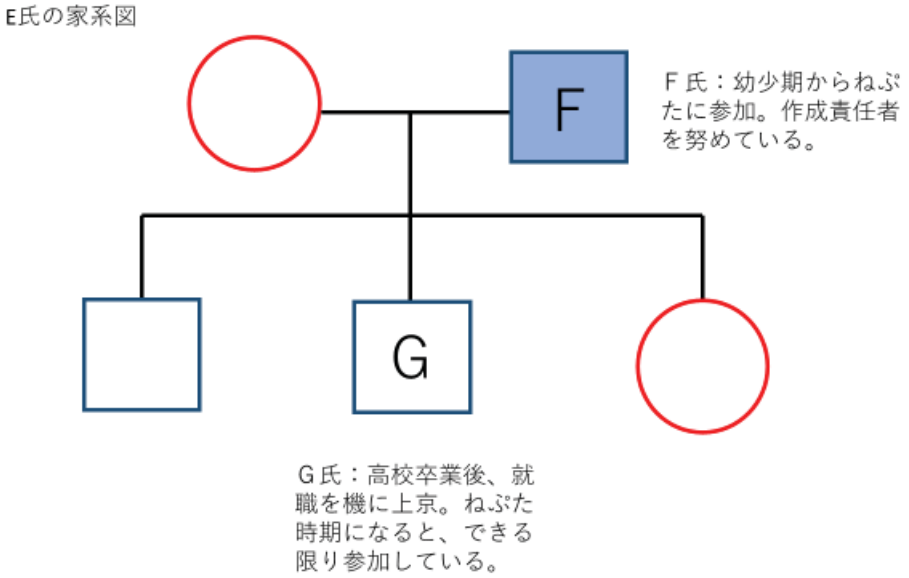


図　2－ 6　F、G 氏の家系図

vi）F 氏【50 代男性　会社員】（幼少期参加あり、家族参加あり、自身参加あり）

F 氏は小学 1 年生の時当時まだ茂森新町ねぷた同好会発足していなかったため、自身で簡易的なねぷたを制作し、町内を運行して回った。その後、茂森新町ねぷた同好会が発足してからは欠かさず，ねぷた祭りに参加している。ただし、1999 年から 2004 年までの 5 年間中国に単身赴任をしていたが、ねぷた本番には必ず帰ってきていたという。

また、現在は茂森新町ねぷた同好会の制作責任者として茂森新町ねぷた同好会にいなくてはねぷたが完成できないほどの重要な役割を担っている。このことから、ねぷたに対する熱意と祭りを継続するために必要な点を考察する。

表　2－ 8　F 氏のヒアリング概要

調査対象	F氏（50代男性、会社員）
調査日時	2017年12月15日（金）　19：15～20：10
場所	D氏宅

vii）G 氏【20 代男性】（幼少期参加あり、家族参加あり、本人参加なし）親の物心ついたときからねぷたへ参加しており、最初は綱を引っ張り、小学 4 年生からは笛を担当した。中 2 で上乗りに挑戦し、そこから高校卒業まで上乗りとして活動していた。高校卒業後、仕事のため上京している。現在、東京で仕事のため、8 月のねぷた祭り当日は実際に運行に参加することはできない。しかし、自身のお金で毎年茂森新町ねぷた同好会に差し入れをしたり、2017 年 1 月に東京ドームシティで行われた「ふるさと祭り東京」公演に茂森新町ねぷた同

好会が弘前市の代表としてねぷたを運行した際には、G 氏は有休を用いて積極的に参加した経歴を持つ。現在は東京での生活があり、なかなか帰省することはできないが、ねぷたを通して現在でも茂森新町の地域の人との関わりを忘れていない。そこから、転出してしまった若者と地域の関わり方を考察する。

表　2－ 9　G 氏のヒアリング概要

調査対象	G氏（20代男性、会社員）
調査日時	2017年12月3日（日）　14：00～14：50
場所	自宅（現在G氏は東京在住のため、直接ではなくSkypeを用いた。）

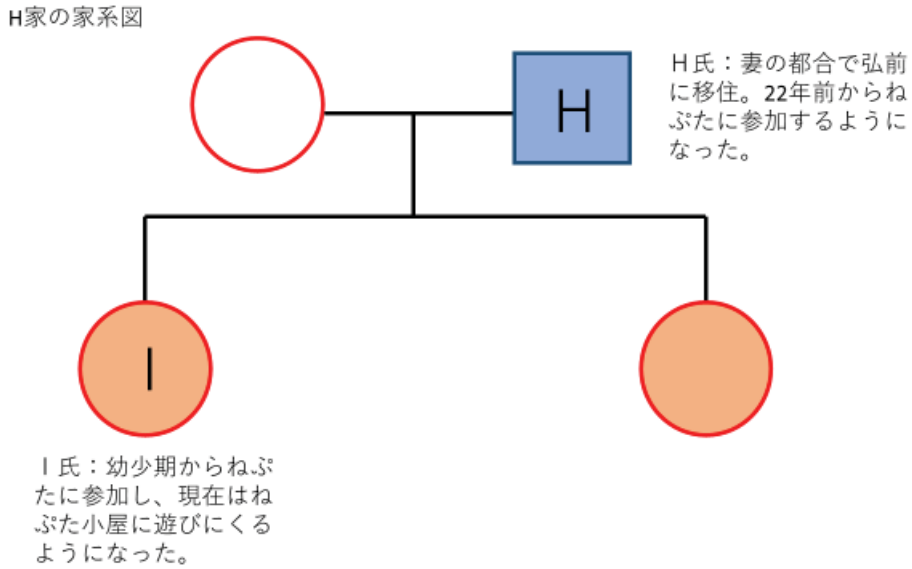


図　2－ 7　H、I 氏の家系図

viii）H氏【40 代男性　会社員】（幼少期参加なし、家族参加あり、本人参加あり）

H氏は 22 年前に弘前に移住してからねぷたに参加するようになった。きっかけは当時働いていた上司の勧めであった。現在は茂森新町ねぷた同好会の中でもねぷたを制作しつつ、ねぷたの安全を守る、「前ねぷたつき」及び、打ち上げ等イベントの際の料理担当としても重要な役割を担っている。外から来て積極的に祭りに参加するようになった事例から、転入した人が町内の祭りに参加できるようになるために必要な点を考察する。

表　2－ 10　H 氏のヒアリング概要

調査対象	H氏（40代男性、会社員）
調査日時	2017年12月16日（土）　10：00～11：30
場所	喫茶室baton

ix）Ｉ氏（幼少期参加あり、家族参加あり、本人参加あり）

Ｉ氏は物心ついたときからねぷた祭りに参加している。現在は弘前市内の会社に勤め、ねぷたにも若い女性としては珍しく制作段階から参加するようになった。女性で最年少ながらねぷたに制作から携わるようになったＩ氏の事例から、若者が祭りへさらに参加するようになる可能性を考察する。

表　2－ 11　I 氏のヒアリング概要

調査対象	I氏（20代女性、会社員）
調査日時	2017年12月16日（土）　13：00～14：00
場所	ココス弘前茜町店

ｘ）Ｊ氏（幼少期参加あり、家族参加なし、本人参加あり）

J 氏は、9 人兄弟の末っ子で、幼少期から兄の影響でねぷた祭りに参加するようになった。昭和 47 年に札幌に就職後、2 年ごとに転職する生活を送っていたが、昭和 55 年に弘前に戻ってくると同時にねぷたにも本格的に参加し始めた。現在は、茂森新町ねぷた同好会の会長として、活動している。

表　2－ 12　J 氏のヒアリング概要

調査対象	J氏（60代男性、公務員）
調査日時	2017年11月30日（木）　17：00～18：30
場所	J氏宅

以上のｉ）～ix）に以下のヒアリング内容で調査を行う。

ヒアリング内容	
1	参加状況
2	参加のきっかけ
3	友人の参加の有無
4	会社の繋がり
5	ねぷたに参加することによって子どもたちへ与える影響
6	ねぷたのコミュニティについて
7	ねぷた以外での繋がり
8	ねぷたの今後について

(2) 調査結果「コードメモ」を用いたヒアリング内容の考察

①（1）で示した対象者に対して行ったヒアリング結果を下に、コードメモを作成する。なお、このコードメモ作成に当たっては、分析方法を参照。

【コード：1 現在まで活動している茂森新町ねぷた同好会の人々がねぷたに参加するきっかけ①】

（メモ）A 氏、D 氏、F 氏、G 氏、I 氏、J 氏は幼少期から今までねぷたに参加している人々である。幼少期からねぷたに参加し続けている人が最初にねぷたに参加し始めるきっかけは「家族」の影響が大きい。

A 氏：参加し始めたのは幼稚園前から。物心つく前。おやじやっていたはんで、ちっちゃい太鼓を持って、３～４歳頃に参加していた。きっかけはおやじがやってらからだべな。その当時は姉 2 人笛をやっちゃあな。
（自身の）子どもの参加のきっかけも親（A 氏）だと思う。連れて行ってるというか、おらねぷたさ行っていなくなるはんで、どったもんだべって思って来てるんだと思う。（俺がねぷたに行っていなくなるので、どんなもんなんだろうって思ってきているんだと思う。）

D 氏：（参加したのは）家族の（影響）だな。親。家族の中でねぷたの参加は当たり前になっている。

F 氏：小学校入ってすぐからねぷたが大好きで。勝手に絵を描いて、ねぷた運行をして歩いたんですよ。（ねぷた同好会発足前）それが、小学校 1 年生くらいだと思うのですけどね。生まれたときからねぷたの DNA が組み込まれているので、そうやって遊んでた。小学校３～５年生まで個人でねぷたをだしているところでをやっていた。それで、今度町内でねぷたをやるよということでオファーもらった。

G 氏：ねぷたに参加するきっかけは親父だな。親父がいなかったらたぶんねぷたは絶対出ていないな。性格的に。若干めんどくさいところもあるじゃん。しがらみとか。たとえ出ててもここまで（熱心に参加するよう）にはなってなかったな。

I 氏：お父さんが熱心に参加していて最初はそれがきっかけかな。今はお母さんが 2 日の審査日だけでてて、妹も家族みんな参加しているね。

J 氏：参加のきっかけは兄さんの影響もあった。みんな出てるはんで。小学校の時から上に上がって。上さ上がるっていうのは花形だったから（うれしかった）。

【コード：1　現在まで活動している茂森新町ねぷた同好会の人々がねぷたに参加するきっかけ②】

（メモ）B 氏、H 氏は幼少期にねぷたに参加していなかったが、熱心に参加するようになり、また、C 氏は、幼少期参加していたが、中学生になってから参加しなくなった。H 氏のヒアリング結果から、近所づきあいをするためにねぷたに参加する人もいることがわかる。さらに、B 氏、C 氏のヒアリング結果を見ると、参加するきっかけは同じく親戚の影響でも、その後継続してねぷたに参加するかどうかは、供に参加し、楽しさを共通できる人物の有無であると考えられる。

B 氏：いとこ・親戚が弘前に住んでいて、その親戚が毎年出ているといいうのは知っていた。最近そのいとこがねぷた絵を描いり、率先して地域のねぷたに参加しているのをみて、自分でも参加したいなと思った。（出身の）大鰐のねぷたではなく、弘前のねぷたに出たいと思ったきっかけは地域だけでやっているだけではなくて、その祭りの全国的なイベントになっているのが弘前のねぷただし、そういう大きな祭りに参加できるチャンスというのはなかなかないことだし。そう考えると、弘前のねぷた祭りに参加したい。

H 氏：最初は来たばかりの時に見てるより参加する方が楽しいよって言われたので、せっかく住み始めたところにねぷたの組織があるから入ったらどう？と会社の上司に言われたのがきっかけ。せっかく弘前に来たんだから、体験した方がいんじゃないのっていう軽い気持ちと、自分の中で知らない世界のことは、知ってる世界の人に従う方がいいだろうと（いう気持ちもあった。）。その前東京にいたから 10 年くらいね。東京にいて近所つきあいとかしてなかったし、会社の人間としか関わってなかったので、それと同じことをこっちにきてやってたんじゃ面白くもないし、せっかくこっちにきたんだから、ご近所づきあいができるような人間関係がもちたいなと思っていたので、ちょうどいい機会だったのかな。

C 氏：（ねぷたに参加した）きっかけは、いとこ家族がみんなでているから。（参加していたのは）小学校とかそれ前とか。記憶あるのは 4 年生～6 年生まで。（大型ねぷた綱を）引っ張っていた。友達とでたのは一回だけ。中学校 1 年生の時。中学生がほとんどいなかった気がする。友達がいないと楽しくないと思う。

【コード：2　若者ねぷた離れの現状】①子どもたちを取り巻く現状

（メモ）B 氏、C 氏へのヒアリング調査から、学生がねぷたに参加しなくなるのは、部活動や勉強による影響が大きいことがわかる。さらに、F 氏の発言から、部活動以外にも、子どもたちが感じる昔と今の娯楽の違いも影響していると考えられる。

B 氏：小さいころ、物心ついたときから、弘前のねぷたの運行は見ていたのだけれども、その頃はねぷたよりも部活動に力を入れていたので、ねぷたから離れていました。大鰐のねぷたには小学校６年生までは出ていたのかな。中学校に上がって、部活動が始まれば、その時期は部活の合宿とかがメインで、中学校からねぷたには参加していません。

C 氏：中１の時に友達と参加していたけど、次の年も、また出ようとはならなかったね。確か部活動が忙しくなって出れなくなった。出なくなる理由は、部活。

D 氏：学校の時は少し参加していて、今でも参加している人は２～３人くらい。逆に参加しなくなった人もいる。その理由は部活動や学校が忙しくなってだと思う。あとは、出るよりも見る方がいいって言う人もいる。

F 氏：ほとんど子どもたちがいないのが辛い。うちらみたいに子どももたくさんいて、ねぷた以外の娯楽がなくて、ねぷたが楽しみだっていう時代じゃないからね。楽しいこともたくさんあって、お家でゲームやっていた方がいいとかさ。そういう時代なのでさ、それが辛い。

【コード：2　若者ねぷた離れの現状】②若者のねぷた離れの原因「仕事」「進学」

（メモ）上京したがUターンしたB氏、上京したままのG氏、弘前ながらも仕事の都合でなかなか参加できないC氏、友人や今まで関わった若者が就職や進学のため弘前を出て行ってしまったE氏及びJ氏へのへのヒアリング結果から、大都市と地方の「仕事」「進学」格差がねぷたに与える影響が明らかとなった。

B氏：青森に帰ってこないで東京で就職しようとしたのは、青森よりも給料がもらえるから。2年間就職して、なんでやめたかと言えば、大学卒業後にやりたい仕事があったけど、挑戦できなかったので、まだ若いうちにやりたい仕事をしたいために青森に帰ってきて1年間アルバイトをしながら勉強をして、現在。

C氏：今になってねぷたに参加するのは楽しそうだとは思うけど、仕事があるから、次の日朝早いと参加できない。休みだったら参加したいと思う。

E氏：わぁの年代は仕事をしに県外に出るのが普通だもん。わぁの年代でそれこそ小・中・高校ってずっときて、もっといっぱい（ねぷたに参加する人が）いたもん。小中もそうだけど、高校のとき一緒に出てた結局それ（友達）も就職でとか大学とかそれ（進学）で出て行ってしまう。戻っても来ないな。（自分は）ずっと弘前（にいる）。変な話、ねぷたもあるし自分のやりたいこともあるから地元から離れなかっただけかな。

G氏：ねぷたの節目にお酒をおくるのは、まあまあ、出れないからせめてもの（繋がり）。なかなか難しいはんでさ。そんなねぷた期間に青森帰るって、会社だったら、帰ってきて席がなくなってもおかしくないはんで。東京にでたのも仕事が弘前にないってのもあるし、やりたいことがあったんだけど、青森ではできなくて。ちょっとはあるんだけど。今の仕事を辞めてまで帰ってきたいかって言われるとそこまでもない。今の仕事はそこそこ恵まれていると思うから。でも、帰りたいって言うのはあるよ。地元いいなって思うよ。弘前はいいところだと思うよ。本当。
自分が子どもの頃は、友達も一緒に参加してた。今は2人とも東京の方に出てきてると思ったけど。もう来なくなっちゃってね。やっぱり上京してからだと思うよ。もうねぷただけの問題ではないから。地方の問題だね。

J氏：子どもたちもね、学校ではないようなこともねぷたさくれば、一緒に作ったり、できる。作ってるところさも来てければ（いいのに）、そうやって今まで一生懸命に来た人間はみんな就職していなくなってしまう。そうやって今まで高校のときにきてら連中はみんないなくなってしまうのは非常にまねな。

【コード：3　仕事】

（メモ）F 氏をはじめとした茂森新町ねぷた同好会の多くの会員は仕事で有休とりねぷたに出る。このねぷたのために、1 年を過ごしているといっても過言ではない。しかし、J 氏の発言からもわかる通り、現状として、ねぷただから有休を取ることは、現状として多くの会社では、理解はされないことが多い。

F 氏：99 年から 2004 年まで 5 年くらい中国に単身赴任していたことがある。そう中国行く条件として、ねぷたのときだけは（弘前に）返してくれよという話で（単身）赴任したんですよ。それでねぷたの時期になれば帰ってくるわけですよ。それで、家来て、すぐ着替えてねぷたへ行くんです。みんなには内緒だったので、（みんなに気づかれないように行くと）「なんかいるし！」みたいな（驚いていましたね）。
それでいま働いて 30 数年になるんだけど、今まで 8 月 7 日は働いたことがないんです。
8 月 7 日休むことについて会社は公認というか、あきらめられちゃっているんだね。そういうのはね。あいつアホだから、この時期が来ましたねって。（その時期になると）こんなところにいてもいいの？って、すごいよねって。結局 1 週間ずっとみんな休んでると思っているけど、違うでしょ、休んでいるの 1 日くらいしかないんだから。届け出上はいっぱいすごい休みなんだよ。でも、ほとんどいるみたいな。じゃないと休めないしね。やることやらないとね。二度と（ねぷたに）出さないって言われると困っちゃうからね。理解というか、理解はしてくれていないでしょうけど、無理矢理だよね。もう会社をねぷただからって休む人はあまりいないでしょうね。でも、茂森新町ねぷた同好会の人たちはだいたいそうだと思うんだけどね。みんなたぶん病気だよな。あきらめられている境地だね。
ねぷたは自分にとって生涯プロジェクトなんですよ。ねぷたをやることは自分の生き方だし、ねぷたの看板を守るためでもあるし、自分の生活を正すみたいな。例えば、飲酒運転して捕まったら、ねぷたに出れないじゃないですか。それってすごく嫌だから、飲酒運転はしないぞとか。仕事も生半可（な気持ちで）にやってれば、ねぷたに出れないじゃないですか。だから、仕事は人一倍一生懸命やろうよと。だけど、一週間だけは目をつぶってねという。そのバランスがとれているから、みなさんあきらめてくれている。やつは仕方ないなって。この時期になったら、会社にいないよなって。たぶん、（ねぷた同好会の）みんなもそういう気持ちでやっていると思うんですよね。

J 氏 : 前にねぷたでさ、いろんな会議の時に商工会とかいろいろで集まってやるじゃん。その時にみんな仕事あって（ねぷたを）やっちゅうわけだべ？へば、各社長さんたちに、仕事少し早めに終わらせて、地元のねぷたさ参加するような待遇をなんとか商工会で考えてけねがって。それがねぷた活性化のためにはそれがだいじでねえのって話は前に出たことあった。会社で勝手に有給とって休むとかは役所とかだったら、わぁ休むって届出せばいいんだけど、民間ってそうはいかないよね。残業つかなくてもやんねばまいしさ。なかなかしがらみはあるやな。仕事は自分の食うために頑張ってるのに、ねぷたはわんつかなところでしゃべられたくないべし、そのわんつかな時だはんで会社でもさ、大目に見てなんとかってしてければ大していいんだけどもね。

【コード：4　ねぷたに参加することによる子どもたちへの影響】

（メモ）A 氏も F 氏も自身の子どもがねぷたに参加している。子どもがねぷたに参加することで学んだことは、目上の人との接し方を覚えたというのが共通意見であった。さらに F 氏の発言から、そこでできた繋がりは一過性の物ではなく、例えねぷたから離れてしまっても続く関係を築くことができていると考えられる。

A 氏：目上の人との繋がりはできると思う。よく言えば上との接し方が、上手い。悪く言えば、なれなれしい。そこがどうだかが、問題。

F 氏：G 氏（息子）も娘もそうだし、たまに里帰りしてくると、みんな年上の人たちも、年寄りの人も下の子たちもみんなわかってくれるわけだよね。（そうすると）結局楽しいじゃないですか。その辺歩いているじじいに「おお、G 帰ってきてらの？」って。そういう人付き合いというのはその辺は覚えて変わったかな。そうでなければたぶん東京の子どもたちと同じく帰ってきてもポツンと 1 人で家にいて少しも楽しくないなって、どっか自分で旅行に行って終わりってなると思う。

会社に行ってても先輩とのつきあい方とか上司とのつきあい方とか全部覚えているところでね。そういうところは、人波に揉まれて今も上手くできていてると思うので。人付き合いって経験しないとできないんですよね。本を読むだけでは得ることができないからね。

息子はねぷたに参加できなくても、なにかの節目にはお酒を送ったりしている。それは自己アピールみたいな。あれは勝手に送っているね。やつも仲間意識を持っているのかなって。たまに帰ってくるとねぷたの連中と飲んだり。遊べるし。その辺は蘇生術上手いというか、上手く立ち回っている。

【コード：5　ねぷたに参加することで得て欲しいこと・茂森新町ねぷた同好会で子どもたちの育成のために行っていること】

（メモ）A 氏、F 氏のヒアリングから、地域の子どもが悪いことをしたら、大人が叱るという、今の時代なかなか見られない光景が今だに根付いている。E 氏の子どもに接するように地域の人が子どもに接することで、コード 4 のような関係が構築される。G 氏のように叱る側－叱られる側の関係性が構築された状態で、自分が悪いことをしたことがわかると、叱られたからといって関係性が崩れることはないということが明らかとなった。

A 氏：子どもたちの育成にすごく力が入っているなって感じます。具体的には、わらはんどだはんで、いぐねことはするのは当たり前じゃん。でもそこしかるところは叱るし。褒めていくとこほめていくし。中には大人も叱られるからね。

E 氏：ちょっと矛盾するかもしれないけど、（ねぷたに参加し続けることは）好きでないとできないことだし。だはんで、今楽しければいいんじゃないって感じ。今楽しくて、人覚えて（もらえればいい）、（今現在、ねぷたに）息子も娘も、（茂森新町ねぷた同好会の人たちが）まるで自分の子どものように接してくれて、叱るときは叱るし、そういうのはありがたいと思うし、助かってるよね。とりあえずねぷたさ行けば好きだに遊んでみんな見てけるはんで安心するじゃんね。

F 氏：どこの子どもたちも同じように接する。悪いことをしたらしかる。今は叩くことはないけど、同じようにしかる。それが一番だね。親でも叱らないのに、叱っているからね。お客様扱いしないで、だめなところは叱り、良くできたら褒める。最初は上げ膳据え膳で持ち上げるけど、慣れてくればこらって。そういう繋がりも覚えてくれれば、社会に出て、突然上司に怒鳴られても、そんなに心にこないでしょ。耐性がつくからね。

G 氏：高校の時、みのるさん道路維持課だはんで、いろんなところで見た気がするし、（茂森新町ねぷた同好会の人で）ヤマト（急便で働いている人がいた）だはんで、一回引かれそうになったことあったしな。普通に出会い頭ですごいスピードで自転車こいでたら横から車出ててきてびっくりしたけど、よく顔見たら知っている人だったな。偶然。それも怒られたし。

【コード：5　子どもがねぷたに参加することで得て欲しいこと】

（メモ）茂森新町ねぷた同好会の人々が子どもたちに学んで欲しいことは仲間意識とねぷたに参加している大人を覚えることで得られる「安心・安全なまち」であり、ねぷたに参加することで、子どもたちは自身の成長も感じることが出来るようになる。さらに以上のことから、地域への愛着を育むことを子どもたちに得て欲しいことである。

F 氏：子どもたちに学んで欲しいことはやっぱり仲間意識ですかね。今希薄な人間関係というか、友達っぽく見えるけど、腹の底では、よくわからない、友達なのかどうなのかという位置づけの人がいるじゃないですか。腹を割って話せるような関係を築ければなって。それは、人生のうちでなかなかそういうチャンスってないと思うんだよね。小学校１年生から中学校、高校まで同級生でも、一回東京に働きに出て行けばもうそういう関係はないっていう。そういえば友達いたなみたいな。そうではなく、お祭りでもなんでも、一緒にやって、たまに帰ってきたどうしてら？おう一緒にやるべって、そういう仲間になって欲しい。絶対人生のプラスになるんですよね。経験できないもんね。自分で苦労して参加しないと、ただチケット買って参加じゃ友達（できないよね）。まぁそういう友達もいるのかもしれないけど。やっぱり違うよね。

H 氏：子どもがねぷたに参加することは子どもたちにとっては安全な町を作ることができると思う。（ねぷたに）来ればねぷたのおじさんを覚える。そうすると、自分たちが町の中を歩いていると、このおじさんは安全な人だってわかるのとわからないのではだいぶ違うと思うんですよ。今の現代ではそれ（誰か安全な大人の判断がつくということ）が重要なことなんだよなということが一つ。地域への親しみをもてる。

会長が太鼓の練習が終わった後に言ったことで、みんな感動したのですが、「地元を離れる人の方が多いのが現実だけど、自分の小さいときに生まれ育ったところにお祭りがあったんだ、自分は笛とか太鼓とかを吹けるんだ。ということを胸に旅立つことは、それを経験したことのない人が旅立つのと違うんだよと。自分の育ったところに愛着をもったまま（他の地域に）行けるというのは宝物なんだ」ということを言っていた。まさに、その通りだなと思った。

綱ついている子たちはみんな寝てる。あれをね、前の年はずっと意識もってたとか、最初は歩けなくておんぶされたりとか、途中で帰っちゃったとか、次は最後まで歩けたけど頭ぼーっとしてたとかちゃんと笛を最後まで吹けたとか、段々と成長していってるのを自分で確認できるみたい。それが楽しいんだって。

【コード：6　若者が子どもたちのお世話をする理由】

（メモ）C 氏、I 氏は自ら、子どもたちに積極的に話しかけたり、子どもたちに囃子を教えたりしている。そうすることによって、20 前後でありながら、次世代の子どもたちにねぷたの楽しさを教えていこうとしているのである。

C 氏：子どもたちの面倒をよくみているのは、子どもたちにねぷたの楽しさを教えたいから。

I 氏：（今まで）太鼓やりたいとか、上に登りたいとかねぷたひっぱりたいとか思ったことはあるけど、やっぱり、自分が年取っていくにつれて、下の子たちが増えてきたときに、そういう子たちに笛を教えていかなきゃいけない立場になったから、今は笛以外やるつもりもないし、これからもずっと笛かなと思う。
小っちゃい子たちに笛を教えて、これからもずっと茂新の囃子がもっと未来に繋がっていけばいいなって思う。自分は笛を教えるくらいしかできないから（笛を教える）。太鼓は男の人がやるイメージがあって、その方が音（量）的にもいいし、だったら笛に回った方がいいかなって。
笛やって、あっ、ねぷたって楽しいなって思ってくれて、その子が大きくなってもねぷたに参加してくれたらいいなっていうのが一番の理想かな。

【コード：7　ねぷたに参加することによる、若者にとって大人の存在】

（メモ）コード6のようにこうして大人から子どもへ、そしてその子どもから次世代の子どもへと伝統が脈々と受け継がれてきたことを意味する。そうした若者は、大人たちに対して、普通のご近所づきあいでは抱かないような親しみを抱いていることが明らかとなった。

D氏：茂新ねぷた同好会の先輩方は、ねぷた好きの集まり。あの時期のパワーはすごい。わあにもっと夢（ねぷた絵師になるっていう）を与えてくれた人たち。

I氏：小さいときから知ってる人たちだから、一緒にいれば安心できるっていうのはあるね。気を張らなくてもいいし、リラックスできるから、本当に赤ちゃんの時から知ってるから，かわいがってくれるし、優しくしてくれる。
わたしにとってのねぷたの先輩たちは、ねぷたっていう新しいジャンルがそこにある、そこに自分が飛び込んでる感じかな。おじさんたちみんな自分の親みたいな感じもあるけど、でも友達みたいな関係性でもあるし、いろんなコトを教えてくれる先生でもあるし、茂新ねぷたっていう新しいカテゴリーがある感じ。自分よりも年上の人たちがたくさんいて，自分よりもたくさんの人生経験を歩んできているから、そこでいろんな話を聞いて学んで、ねぷたのことだったり、それ以外のことだったりを教えてくれる先生でもあって、見守ってくれる家族のような存在でもあって、何でも話せる友達のような存在。そこにいるだけで安心する存在だね。

【コード：8　茂森新町ねぷた同好会のコミュニティ】

①茂森新町ねぷた同好会の絆

（メモ）B 氏の発言からねぷた同好会の人たちは強い絆で結ばれている。さらに、F 氏、H 氏からの発言から、茂森新町ねぷた同好会はそれはねぷたという一つの目標に向かって、上下関係ではなく先輩後輩としてわからないことを教えあいながらも対等な関係を築いているからであると考えられる。

B 氏：結構若い人たち３０前後の人たちが主力メンバーに入ってねぷた運行しているのは（びっくりした）。中高生がねぷたの運行前までの場所にもっていったりとかというのを手伝っているのを見ていたから。最初は年上の人たちが多いかなと思っていたけれど、意外と若い人、若い人たちも率先して参加しているんだなと思った。それこそ、ねぷたの囃子の練習に行っても、子どもたちはもちろん笛の練習をしているけれども大人の人たちも結構集まって練習しているのを見ていて、大人たちってやっぱり仕事終わって家さいたほうがいいかなって思うと思うのだけれども、仕事終わりでも、みんなで練習して終わってからみんなで小屋で飲むっていうのが地域の茂森新町ねぷた同好会の強い絆を感じる。
若い子たちも来て、子どもたちに笛を教えたりとか、小屋さ行ったりとかしているのを見ると、すごく地域で仲がいいんだということを思った。

F 氏：まぁ、人とのつきあい方はわかるよね。こういうことしちゃいけないとか、こういうことをすれば帰ってくるとか。そういうのは身をもって覚えるかな。年寄りから小さい小学生まで対等にやってるもんね。
まぁねぷたの繋がりは強いからね。みんな苦労をともにして、同じ汗をかいているからね。仲間意識は強いですよね。町内みたいにただ参加すればいいだけってわけでないから。それがあるから強いのかな。ねぷたは義理と人情が強い団体。それがあって成り立っているというか。それが目的のねぷたなのでね。町内の親睦と町内の子どもたちの育成のための。

H 氏：ねぷたは同じ価値観（ねぷたをやること）の元に集まっている個人個人だということ。稼いでいる人もそうでない人もいるわけだ。でもその人たちが同じステージに立って、ある目的・運営に携わっているということがすごい話。部長でも平社員でも関係ない。これはねぷたでないとできない。会長だから偉いもないし。だからといってこれ（お金）持っているひとは色々提供してくれるわけだ。道具とかも提供してくれたり。その人に対して礼は尽くすよ。でも、それは上下関係ではない。先に参加した人が先輩で、色々と教えてもらう。

【コード：9　茂森新町ねぷた同好会のコミュニティ】

②　持ちつ持たれつの関係性

（メモ）A 氏、E 氏のヒアリング結果から、茂森新町ねぷた同好会のコミュニティは祭りのコミュニティを超えて、困ったときは祭り関係なく手助けできる関係性の構築ができていると言える。

A 氏：同世代の人たちは、町内の仲間ってあれでもないしな。友達でもないし。ねぷたで考えれば家族。ねぷたの中の家族みたいな。なんかあれば助けてもらえる。車パンクしたってなったら、みんな A さんにやってもらえばいいって、でも A さんも困ったらそういう人たちに助けてもらうって。助けてってくれば、助けるし。その代わり、おらが助けて欲しいときは助けてもらうし。持ちつ持たれつの関係。

E 氏：あるあるいっぱいあるよ。例えば、うちでは助けてもらっているのが、りんごの手伝いだよね。去年は葉取りから収穫まで手伝ってもらったし。今年は何度もりんごの収穫に大勢来てもらって。会長自ら来てもらったりとか。そうなれば、こっちもやる気出すし、イベントみたいな感じで。やっぱりりんごもぎって続けばかなり疲れてくるはんで、こっちも気を張っているし、ああやってわいわい楽しくやれば（いい）。それで晩一緒に飲んだりすればいいリフレッシュになる。それが一番かな。まぁ個別に飲みに行くこともあるし、個別に遊びに行くこともあるし。わぁはりんご収穫くらいだべか。
持ちつ持たれつっていうか。義理人情がある団体だね。りんごもぎに関しては早いよ。やっぱり慣れている早い。仕事も丁寧だし。

H 氏：11 月に E 氏の畑を手伝いに行っているのはりんごもぎというお仕事を通じて遊ばせてもらっているだけで、そういうフィールドで遊んでいる。要は自分が余っている時間を、あるいは日常でストレスがたまっていて、ちょっと目先を変えたいなって思ったときに、趣味に走っている人はいっぱいいるけども、ねぷたをやっていたものだからこういうこと（りんごもぎ体験）とかができる。子どもたちにお昼作るのはそれも趣味っぽくやるんだけど、それだけじゃ飽きちゃうじゃん。だから、たまには外の人に作ってあげたいなって。疑似レストラン体験ができるじゃん？それはストレス解消の一つとして。
よく料理を作って振る舞うのはみんなのためにと思ってやったことはないので。自分の趣味を押しつけていると思ってやっている。旨いって言って食べる。よしよしと思っているくらいで、それは趣味です。みんな美味しい美味しいって言ってくれるから。お母さんみたいな気持ちになる。

【コード：10　茂森新町ねぷた同好会のコミュニティ】

③　茂森新町ねぷた同好会とお酒

（メモ）ねぷたのコミュニティの維持には“お酒”の存在は不可欠。こうして飲みながらコミュニケーションを取ることを、茂森新町ねぷた同好会では、ノミニケーション（コミュニケーションを文字って）と呼び、大切な時間である。

B 氏：はじめは知らない人ばかりで緊張するけれども、2～3 年前から茂森新町のねぷた同好会の人と飲む機会があったし、カブトムシ（茂森新町にあり、現在は営業していないが、茂森新町のおじさま方の憩いの場なっているバー）で。最初は（小屋に行くときは）緊張したけど、行ってお酒を飲めば、友達というか、親しくなれる。そういう場で仲良くなったほうがいい。触れ合うことが多かったのは、笛の練習後の小屋での飲みとかが濃厚な時間だった。話しできるような関係になったのは、そこかな。笛の練習だけしていたら、そういう話す機会はなかったけれども、一緒に飲むと、一人一人が見えてきて、一番交流が持てるいい機会だったかなと思う。若者は年近い人も何人かいるし、そういう人たちとは話しやすくて、飲みの場以外でも笛の練習しているときでも話しできた。

H 氏：毎晩飲んでる団体なんてうちの団体くらいだと思うよ。今若い人たちは、地域でやってなくて、好き同士がねぷたをやってるでしょ。そうすると、小屋を建ててみんなそこに車で集まってくるでしょ。だから，飲めない。茂森新町は歩いて行ける距離にねぷた小屋があって、だからこそ毎晩飲める。

I 氏：ねぷたの時期になると小屋に行きたくなる。気になる。早く小屋に行きたいから、早く仕事終わらないかなって（思いながら仕事をしている）。お酒も飲めるようになって、そこでいろんな話をできるのも（要因で）あるかも。

J 氏：若いころはさ、本当に面白かったね。すきなことをがやがやがやがやがやって。大先輩だちがいて、下の若い奴ががやがやってやる。それが非常に楽しくて、酒がのめるし。毎日スナックねぷたっていったもんでさ。ほとんど夜中まで飲んで、2 時間くらい仕事（ねぷたの制作作業）して、9 時ころまで仕事して、夜中の 1 時 2 時まで飲んだりさ、近所からぐだめかれでうるせって言われたこともあった。それだけ人がすごく来て活気があったのさ。ノミニケーションって大事。やっぱりねぷたって、本来そういうものなのさ。お酒はつきもので、それがなければだれも来なくなる。飲んで面白いのさ。

【コード：11　茂森新町ねぷた同好会のコミュニティ】

②　町内とねぷた

（メモ）A 氏と F 氏のヒアリングから、町内活動を担っているのはねぷた同好会のメンバーであることが明らかとなった。

A 氏：町会、なんかイベントをやりましょうって言っても町会の方だと人が集まらない。結局。これはしかない仕方ないけど。だけれども、ある一言でねぷたさ頼もうってなれば、一気に 30 人 40 人って増えるとかね。そのネットワークがあるはんで、そういうことができるんだけども、考え方で言えば町内があって茂森新町ねぷたが出せるって思っちゅうのさ。思っているんだけど、茂森新町ねぷた同好会があって茂森新町町会があるって思っている人がいるのかなって。そう思っているひとが多いのかなって。ねぷたであれば、茂森新町、町内町会関係なく昔の「ひではるねぷた」とか、やっていた名前でいいんだ。町会の名前さなっちゅうんだはんで、町会があって、茂森新町ねぷたが出せている。そこを勘違いしている人もいるのかなって。でも、町会でも、ねぷたさ一言声かければなんとかなるべってほぼ間違いなく町会でも思っているはず。なにかあれば、絶対ねぷた。

F 氏：ねぷた以外でも町内会の行事、冠婚葬祭。町会が催す行事は、納涼祭しかり、お年寄りの雪かた付け、台風がきたりすれば片付けを手伝ったりとかのボランティアみたいなこともしています。

【コード：12　茂森新町ねぷた同好会のコミュニティ】

③　地域の繋がり（町内）とねぷた

（メモ）H 氏、J 氏の発言から、「茂森新町」ねぷた同好会は町内のおかげでねぷたが出せているという気持ちが強い。

H 氏：子どもの安全を考えると、（ねぷた）小屋を開けれない。（小屋を開けるための）一番の解決方法は小屋の場所を変えること。（しかし、）タダで貸してくれる家はない。（土地を）タダで借りて、小屋もタダで建ててもらって。一応お金は払うんだよ。でも、寄付でかえって来ちゃって。なんだかんだ余計に返って来ちゃうから、そんな団体ないんだよ。なんだかんだ楽させてもらってる。これを忘れてはいけない。だから役員はイガイガってするなって、戒めのように言うんだけど。調子に乗って威張ってはいけないと。みんなの協力があってねぷたが出せる。他の団体に比べて、全然ね（条件をよくねぷたを出させてもらってる）。ねぷたはたかが遊び何だけど、なぜ、地域のひとを大切にしようとしているかっていう理由は「寄り辺」という考え方。寄り処という言葉があるけど、それとは違って、もっと精神的なところの意味合いを含んで寄り辺という言葉を使った。ねぷたというものを通じて地域の問題とか課題についても向き合うことができるじゃないですか。なので、気持ちと気持ちが綱がっていくそういう寄り処としてねぷたがある。以前こういうことをしていたのが神社だった。結局これみんなして集まって、「最近どうしてた？」って話聞くためにやってるようなもんですよと（言っていた）。それと同じことをねぷたがやっていて。今それは町内会ではできなくなってきているのね。新しいコミュニティのあり方が祭りにはあるんじゃないかなと思うのね。前に遺影を持ってねぷたをみてくれていたおばあさんを七日日みたことがある。その人たちのためになっているんだなって。実際に手を動かさなくても、地域にとっての寄り処になっているんだろうなって想いがあったので。それは 3 年目くらいの時に見えたんだよな。すごいなって。
単なる馬鹿騒ぎしているだけでは気づかないことが町内会のねぷたにはあるんだなって。

J 氏：ねぷたが大好きだった会員で亡くなれば、（その方の家の前で）止まってねぷたっこ回したり（していたことも）何回かあるよね。したはんでわぁ死ねば、ねぷた（家の前まで道路の幅が狭くて細くて）来らいねはんで、ちっちゃいねぷた（持ってくる）って、わぃ大きいの持って来いよってしてしてらんだけどさ。結構そうして行ったところはあるよ。歴代の会長亡くなったときにはさ。必ずそこ（家の前）さ入っていく。

【コード：13　茂森新町ねぷた同好会のコミュニティ】

④　強すぎる絆がもたらす影響

（メモ）コード８にも示した茂森新町ねぷた同好会の強い絆、そして仲間意識。これがよい面でもあれば、他者から見ると排他的であるように感じてしまう。このため、新しい会員の加入の足かせにもなっている可能性がある。

F 氏：子どもさんが小さいところは参加してくれるのだけれども、ただ、親御さんはなかなか割り込んでこれない。昔から近所づきあいしている人だったらいいけども、そうでないと（なかなか入ってこれない）。H くらいアクが強くないと入ってこれないのかなって。常に新しい会員を入れようという気持ちはあるんだけども、やはり、茂森新町ねぷた同好会はがっちりかたまり過ぎちゃって、入り込める隙間がないって言われちゃうんだよね。みんな仲良しだし、その中に入って一緒に仲よくやろうってなかなか（難しいよ）ね。

G 氏：茂新ってあれなんだよね。昔から住んでいる人とそうでない人との差があると思うんだよね。その、若干排他的な感じが。だって、わぁの家の前の歯医者だかなんだかの家の人たちもちょっと、なじんでるのかな？って（感じる）。だって、Black Box とかって呼んでる人たちもいるしさ。家が黒くて四角いから。若干触れないようにしているような感じもあるんじゃないかなって。茂新批判になっちゃうけど、排他的だなっては感じる。

I 氏：茂新のねぷたが好きだって言ってくれている人たちもいるから、そういう人たちが入ってきてほしいなっていうのはあるから、誰でも参加できるようになればいいなって思うよね。（だけど、今）そこで（小屋の中にいる人たちで）関係性が築かれちゃってるっていうのはあるよね。

【コード：14　茂森新町ねぷた同好会の敷居と興味】

（メモ）B 氏、H 氏、I 氏の発言からねぷたなどの絆が深い団体に入ろうとした際、みんな仲よさそうで敷居が高いという、参加の「ハードル」以上に「興味・関心」が上回った時、初めて団体に参加できるということが明らかとなった。

B 氏：はじめは知らない人ばかりで緊張するけれども、2～3 年前から茂森新町のねぷた同好会の人とカブトムシ（茂森新町にあり、現在は営業していないが、茂森新町のおじさま方の憩いの場なっているバー）で飲む機会があった。そこで小屋に行って（ねぷた囃子の）練習後とか飲んでいるのは聞いていたから、知っている人ともいるし、おじさんもいるし、最初は（小屋に行くときは）緊張したけど、行ってお酒を飲めば、友達というか、親しくなれる。そういう場で仲良くなったほうがいい。

H 氏：ねぷたに参加する最初にハードルは感じなくて、興味の方が強くて、感じなかった。敷居が高いと感じるのは、ねぷたを知っているからだよ。知ってるし、あそこは仲のいい団体だってある意味プロフェッショナルな集まりだという感じなので、素人が行って何か言われたらどうしようと考えると思う。でも、俺はそういう（事前の知識が）まったくなかったので、知らないって強い。なので、抵抗感が何もなくて、どんなものなんだろうっていう興味が強かった。
I が小屋に来ているのだって、親の影響だよ。小屋に来ているやつらはみんな親の影響で、行きやすいの。普通の人と比べるとハードル全然低い。（受け入れてくれるかなとか）心配する必要ないんだもん。基本的に今来ている子も親が現役でやっている子たちしか来ない。

I 氏：今来てない人も 4 人くらい熱心に参加していた人はいた。でも、友人とか東京に出て行ってしまったりとか、大きくなってねぷたに参加してなくなっちゃたりとか、若い人が減ってる。今参加している人たちを考えると、保育園の時から一緒って子たちが多い。みんなも同じ保育園でずっと一緒にいた幼なじみだから、もう濃い関係が築かれている。後なんだろうな、大人の人もうちらが小さい保育園のときから知ってるから、途中（小学生くらい）の時から参加してきた子たちってそこの輪に入りづらいのかなっていうのはあるよね。
家族が参加していた子どもたちが多くて、他から急に来た子どもたちが小屋に入るってかなり敷居高いじゃん。

【コード：15　茂森新町ねぷた同好会に対する他人からの評価によって得られる効果】

（メモ）他人からの評価されることで、D のねぷた絵師としての誇りがを持ち、さらに他の住民も茂森新町に住んでいるという誇りを持っていることが明らかとなった。

A 氏：今年、どこだかの団体である人さ Twitter で褒められていた。って D がよろこんであった。いとこにも見せていて、喜んでいたらしい。

B 氏：いとこたちがねぷたに出ているのをみてうらやましいと思っていた。自分は部活とかで参加できなかったり、参加できなくても見に行ったりすれば、笛とか吹きながら見物客の前で運行しているのを見るとうらやましい。笛も太鼓も練習しないとできないことだし、そろっているとかっこいい。

C 氏：いとこがねぷた絵を描いてそれが運行されることはすごいと思うし、それが D の長所だと思う。本人に言うと鼻高くなるから言わないけど、誇りに思う。
会社の人にも D の書いた絵を見てすごいねって言われたことがある。会社の人が今年 D が書いた絵を偶然すごいと思って（写真を）撮っていて、何かの機会でねぷたの話をするときに、わあのいとここのねぷた絵書いているんですよ。って言ったら、（会社の人が）「マジで？これ本当にすごいと思ってたんだ」って「本当に絵を描いていて欲しいわ」って言ってて、本当にすごいんだなって思った。
Twitter で、「茂森新町ねぷた同好会の前灯籠が、ため息が出るほど美しい」と D の絵が写真付きで、掲載されていた。そのスクリーンショットが（本人から）送られてきた。
いろんな人から茂森新町のねぷたのことを言われる。「どこに住んでるの？」って聞かれて「茂森新町です」と答えると、「あのねぷた有名なところだべな」ってしゃべられるから、すごいんだなって感じる。よく家の前をねぷた通りますよって言うと、うらやましいって言われる。

I 氏：ねぷた絵を描いている D がねぷた絵をかくようになってねぷた好きなんだなとも思うし。年々上手になってるし、前ねぷた描いたりしてるから、本当にすごいなって思う D も小学生のときからねぷた絵描いていたし、中学校の時は文化祭の時は絵を描いたらしいんだよね。たまたまうちも遊びに行ったときに飾ってあって、上手になったなって。だから、もっと上手くなっていつか呑龍さんが引退したときじゃないけど、茂新のねぷた絵を描くくらい有名になってくれればいいなって思う。

【コード：16　町内で育てるねぷた絵師】

（メモ）ねぷた絵師の育成のために一番必要なことは、発表の機会を与えること。そのためにA氏の発言から、家族として本人には性格を理解した上でその人にあった励まし方、そして、若手育成フォーラム【※（4）へ】のようなねぷたを継承する人々への外部からのサポート、茂森新町ねぷた同好会としてのサポートなど、色々な面から、サポートが必要である。

A氏：家族としてDの絵のサポートはしていない。もっと上手くなってもらうために、あえてへたくそ。と（言う）。いいとは思うけど、でもへたくそと言う。Dの性格だと何くそってなるはんで、そこでいいのかなって。

D氏：今まで若手育成フォーラムのようなのがなかったから披露する場所がなかった。作ったばかりの若手絵師育成というフォーラムだから、今4団体。前ねぷたとかから始めて若い絵師、描けない人も描けるようにしていこうという企画だから、これから増えるかな。
今まで町内の町印とか、ちょっとずつ、団扇描いて、灯籠描いて、何年も経って、やっと本格的に自大の前ねぷたって描かせてもらっちゅうはんで（描かせてもらっているから）。初めて前ねぷた今年描かせてもらって、評価してもらって、嬉しかった。今年はわあが町印描いたはんで、来年は持ち回りでわあかつぎって。一番取りまとめいる人があれ（小型ねぷた）から降りることはないはんで。で描ける人が灯籠、とか協力している。それでぎりぎりかって言われたらどうなんだろうな。みんな描きたくて描いてるから。できることなら、全部描きたいくらい。もし、ねぷた絵を描きたいっていう人がいたら、弟子入りする人もいる。例えば、三浦呑龍の絵が好きで同じ絵が描きたいから技術とか取り入れるために、弟子にしてくださいってお願いして弟子になって、やる人もいる。わあの場合まず、絵見て、いろんな人の特徴いいとこ悪いとこを見ながら、自分なりに描いていくのが面白い。最初から聞いてやっても面白くない。だから、わあは独学。茂新のねぷた絵師は独学。描きたいように描く。それも勉強のひとつだと思うはんで、どうやって塗ってるんですかって聞くのもいいけれども、自分で試しにやってみて、こうなるんだって。
描きたいという人がいれば、小学校からでも描かせてくれるくらいだはんで、町内の人の将来こうなって欲しいとか、将来は町内のねぷたを描いて欲しいとか考えているひとはいると思う。絵の上手い下手関係なく好きで、ねぷた絵師になりたいとか描きたいって言う人には、わあみたいにうちわからとか育成って考えてのことではないと思うけど、機会を与えてはもらえてると思う。

E 氏：初めてねぷたを描かせてもらう前にちゃんと自分で紙買って、見よう見まねで描いていたけどね。それで茂森新町のやつを描くようになってから茂新の絵師の先輩に教えてもらったり。下絵の段階から、人の構図のとりかたとかバランスの取り方とか。顔で言えば目鼻口のバランスっていうんだべか。そういうのとか。あと墨の描き方とか。ロウとか色づけとか全部だな。わぁは誰かに教わったっていえば、茂森新町ねぷた同好会の先輩にしか教わったことないはんで。

最後まで教えてもらってもいいんだけども、自分なりに描きたいじゃん。よく人に言われるんだけど、わぁ描く絵って個性的だって。独特だって言われるんだよね。自信持っているわけではなくて。ただ、描きたいだけで。教科書通りのことがただ嫌いなんだよね。あまのじゃくなんだびょん。人と一緒なのが嫌いなだけで。でも（好き嫌い）分かれるけどね。描く側じゃなくて周りの制作スタッフの人たちを驚かせる、みんなが想像しているものとは違うものを描きたいなとは思うけど。

去年 1 人中学生の子が描きたいってきたけども、結局は話で終わったから。本当にやるのか描きたいのかどうかもわからなくて。だから今はそういう子はいない。もしでてくれば、描かせて、小さいのからやって、のちのちわぁが退いてもいいし。もう 1 人の先輩はもう完璧やめたくてやめた。それこそわぁと一緒でもないけど、描きたくなくなったんでしょ。嫌になったんでしょ。あれは嫌になるよ。先輩にちくちくやられたりしてればね。プライドが高いからね。そんな別に絵師にプライドとかいらないと思うけどね。

絵師を育てるためには、描かせればいいんでね？機会を与えるそれが一番でしょ。出てくれば描かせる。別に茂森新町の専属絵師って呑龍だけなんだはんで、変な話、もっともっと呑龍にお金かけれるんだば、全部描かせればいいし。結局そこ渋るし。で会のためだって言うんであれば、わんどのおかげでいい想いとか、描いてどんどん機会を与えればいいと思うよ。ただうちわで話とめるんではなく。そこでできてきたものに対して指導していけばいいと思う。指導するのは先輩なり、D 氏でもいいし、わぁでもいいけどわぁは「好きだに描かなが、いいんだね」ってそれが一番いんだねって。描きたいってきて好きだば自分で学ぼうとするじゃん。誰でも教えられるのと自分から学ぼうとするのは全然違うはんで、わぁはいつでもそういうスタイル。常に。失敗しても人から言われてやるのと自らが進んでやるのでは意味が違う。だはんで、わんだい責任者がいるんだし、最後までけつをもたないと。絶対守らないといけないの納期だよね。それだけ。だけどもあんまりにも、見るに堪えないへたくそなものを描いてくればやり直しとかさせるけども、まずはプレッシャーもって納期守ればいいんでない？

J 氏：（茂森新町ねぷた同好会として、ねぷた絵師にする支援は）お金的な材料費とかそういうのは会としていくらかはね。絵具とか紙代とかねわずかだけど、そういう補助はしてるよね。あとは発表の場をあたえること。

（絵については自分の含め）一切かもわない。したはんで、一番最初は先輩２人がやってあったのさ、手分けして。それさ今度 E 入ってきて、D も入って４人になった。それは非常にいいことだ。したはんで、描いてほしいってよりも、あの人たちが描きたいっていう意思があるので、で、普通はさ、なんぼこう練習してもああやって外さ出して（披露して）いくってことはまずない。よほどのいい条件。どこさいってもさ、そういうことないじゃん。発表の場がないのさ、したはんで、本当にここのねぷたで４人はさ、自分の好きなものを描いて、それを外に発表できるということが非常にラッキーだと思って一生懸命頑張ってければいいのさね。

昔は、大きいねぷたと町印わんつかとかしかねかったのさ。それで、わたし S５５年に帰ってきて、それだば面白くねべさって、そういうことで、へばなにか人形みたいなものを作るかって金魚とかでっただこういうのさ弦やったり、そういうので、なにかをやらねばまいって作っていったのさ。昔からあるもので、担ぎとか中型ねぷたとかやっぱりあればあったなりにいいっきゃ。だはんで、ああいうの小さなねぷたも全部図面描いて、大工さんさこれ作ってけって持っていて、みんなお願いして。で、何かをやって増えていけば、それは描く人いねばまいねはんで、せば、最初の茂森新町ねぷた同好会の絵師が描くって、２、３台かいらだんでねがな。上手下手はあるんだはんであれだけれども、せっかく描いたんだはんで、ボツってことはまずない。素人がさこれまねこれまねでないのさね。好きなように描かせる。

【コード：18　ねぷた継承に必要な要素】

（メモ）ねぷたの継承に必要な要素として、H 氏から、人との関わり方が上手な人、コミュニケーションがしっかりとれる人、E 氏、F 氏、G 氏、H 氏のヒアリング内容から責任感・義務感が持てる人が集まってきたからこそ、茂森新町ねぷた同好会のねぷたは継承され続けていると考えられる。

H 氏：実際に入ってみたら、ねぷたって人と関わりできる人や（人との関わりを）面倒だと思わない人が集まってきているんだなあと。あとものを作ることが好きな人。絵を描くのが好きだったり、ねぷたを組み立てるのが好きな人。地域の活動に関心のある人が参加しているなと（感じた）。
誰もが参加してもいいよと言われているけども、そこにはなんらかのスキルが必要だったり。やっている側のスキルってなにかっていうと、誰とでも話ができる人、ある程度のコミュニケーション能力を持ってないとできないし。人の意見を聞ける人。人の意見を聞くばかりじゃなく、自分の意見も持っている人。それから、最後まで責任を持ってやり遂げることができる人。いわゆる大人じゃないとだめよって話。

E 氏：ねぷたって小さい社会だけど、わぁが小さいときからそうだと思うよ。学校の課外授業じゃなくて、なんていうんだろうな。わぁだちが小さい頃は、小学生ながらも責任感を持って、わぁ行かないとねぷたは動かないくらいの気持ちで行っていたはんで。だと思うよ。
あと、わぁは気持ち的に、ねぷたやるのは、自分の子どもたちもそうだし、自分が楽しむためでもあるけど、子どもたちが楽しむために、やらなければいけない義務的なところあるよね。もうこうなってくれば。正直。でもどっか楽しみなんだよな。夜になれば、やっぱ絵描いてても気になるし。小屋で飲んじゃんだべな。何話してらんだべなって。聞かされてない話聞かされれば、「え、それわぁ知らね」って。「おめ小屋さ来ねはんでだね」って。しゃあないし。そういうのがやっぱ気になるよな。

F 氏：ねぷた大好きっていうかもう、義務感になっちゃってるかもしれないね。いなくちゃいけないっていうか、勝手な思い込みだけど、俺がいないとねぷたはでないんだみたいな。実際いなくてもなんとかなるんだけどね。そういう自負心があるから、続けていけるって話で。

G 氏：ねぷたに参加しているお父さんはかっこいいとかではなくて、それが、当たり前のような。「おとんがいるから一応出るか」みたいな義務感は出てきたかな。

H 氏：（昔だれかがいっていたけど、）「誰かがやらなければ進まないし、誰かがいなくても進めなければいけない」ということは真理を突いてて、いい言葉だなと思ってた。責任感と自立心が必要なんだよってこと。最初に言った大人が必要なんだってこと。次に、「なんだかんだ、ねぷたやらねばまねよ」とみんな言っているけども、そう言っていないと継続させることが大変なんだ。形あるものはお金をかければもとに戻せる。でも文化は消えるのが早いし、次に再建させるのがどれだけ大変かということがあるので。

【コード：19　ねぷた祭りは目的ではなく、手段】

（メモ）F 氏、G 氏、H 氏のヒアリン内容からねぷた祭りに情熱を注いでいるように見えるが、実は、ねぷた祭りのために集まっているのではなく、地域の人たちと集まるきっかけなのである。

F 氏：ねぷた祭りということは重要視してなくて、ねぷたをやることが好き。だから、賞なんかもどうでもいい。もちろんもらえれば嬉しいんだけれども、だからといって賞のためにやっているわけではなくて。ねぷたの形が好きなわけではなくて、絵が好きなわけでもなくて、集まってきてみんなで一緒にやっている人がわぁは好きなだけなんだ、実は。人が好きなんだ。別にねぷたじゃなくても、三社（大祭）のあれでももしかしたらよかったのかもしれない。青森のねぶたでもよかったのかもしれない。ただ、みなさんいい人ばっかりでよかったなって。人が大好きなだけ。だから、絵のこと何もわからないもん。何年の絵がなんとかっていわれても、だから何？みたいな。良さがわからない。見て違和感ある絵はわかるけど、そんなのどうでもいいべって（思ってしまう）。

G 氏：実際ねぷたが好きなわけではない。好きだったら、シーズン中に帰ってくるけど（今は帰っていない）。ねぷたはそんなに好きじゃないけど、（ねぷたのみんなと）飲んだり、飲み会にいくのは好きだよ。ねぷたは口実でそこにいる人に会いに行くみたいな。自分にとってねぷた祭りって、町内の集まりというか。集まりやすいものだと思っているよ。わいわいする。まぁ親戚の集まりみたいなものだな。すごい近しい人たちと集まれるいい機会だって。そういうのが楽しい。ねぷた自体はぶっちゃけそんなに好きじゃない。本当にどっちかと言えばめんどくさいという。ねぷた祭りはそうなんだけど、集まるのはそんなに悪いもんじゃないって言う。

年に２回とか（弘前に）帰ってきて茂森新町ねぷた同好会の人たちと飲むみたいな。今地方とかでもさ、近所に住んでいる人知らないとか、挨拶しないとかさ、近所との繋がりって薄くなってるっていうのが問題になっているじゃないですか。そういうのを聞くと、（茂森新町ねぷた同好会に人たちはねぷたがあるからこそ）ねぷたっていう繋がりを超えて仲がいいんだなって思う。わぁも（今東京に住んでいて隣の人）知らないもん。隣の家の人とか。とりあえずベトナムかどっかから来た人なんだろうなってそれはわかる。なんか傘置いてあるんだけどさ、軒先に明らかに多いんだよね。６本とか７本あるからさ、これワンルームに何人住んでるんだろうって。そういうのを体験するとみんな知ってるからさ、安心するよ。

H 氏：さっき言った地域との繋がりを持っていたいということがあったのと、みんなでものを作ってみるという生活とは関係ない遊びとしてそういうことができるという場であれば、別にねぷたでなくてもいい。よくなんでねぷたやってるの？と聞かれる。ねぷた馬鹿だからって短絡的に答え出す人もいるけど、ねぷたが好きなんじゃなくて、人と関わっているのが好き。で、もの作るのが好き。つまり、ねぷたは手段であって目的ではないんです。基本わいわいやっているのが好きじゃないと（続かない）。

【コード：20　ねぷた小屋での体験】

（メモ）G 氏の発言から、ねぷた小屋に行き熱心に参加し作る側に回ると、そこでしか体験できない、面白さがあることがわかる。さらに、I 氏の発言からそれを知って欲しいという思いはあっても、J 氏の発言からなかなか新たに加わる会員がいないことが明らかとなった。

G 氏：小屋に来て手伝いするようになったきっかけはお父さんもあるけど。結局上乗りになるためには制作から参加しないとだめだから、それにあわせて（小屋に手伝いに行くようになった）。中１か２あたりからお手伝いにいっていた。そういうしきたりというか暗黙の了解があって。
小屋に行くようになって、今までやってなかったこと、見るだけだった部分を自分でやってみるとかになると、やっぱり違うなって。面白いなって（感じた）。骨組みに登ってみたりとか上に登ってみたりするのはまあ手伝いをしていないとできないことだから。

I 氏：若い人にも参加して欲しい。特に、女の子も自分には何もできないって思っている人もいるだろうけど、行けば絶対やれることはあるから、紙はぎとかできることはあるから、小屋に行くことが大事だと思う。じゃないと、茂新のねぷたが途中で途切れてしまうのが嫌だなって思うから、力仕事は男の人の方がいいけど、細かいところは女の人でもできるから、ちょっとでも興味があるなって思うんだったら来て欲しいなって思うな。中学生でも高校生でもいいから来て作る方に回ってみるとかそれでも面白さがわかればいいけどね。

J 氏：子どもたちもね、学校ではないようなこともねぷたさくれば、一緒に作ったり、できる。作ってるところさも来てければ（いいのに）、一生懸命に来た人間はみんな就職していなくなってしまって、高校のときにきてら連中はみんないなくなってしまうのは非常にまねな。就職先がこっちでなければ仕方ないことだけれども。本当に 50 周年迎えるにいいんだがって。逆に今の若い人が茂森新町に家を建ててもねぷたは町会でやってるんでないからあまり、はまんねじゃん。昔からやるひとはね、頑張ってやっちゅうんだけれども、本当に新しい人ははまってこない。やっぱり関係なくおもっちゅうだべね。誰かけやぐがいてね、ちょっと来いさってひっぱってくるにいいば大していいんだけれどもさ。なかなか大変だよな。覚えてればいいんだけどね。若い人いないわけじゃない。最近家も新しく建ってきていて、いるじゃん。いるんだけども、だれもけやぐでおべじゃやついねんだけさあれだけれどもはまってこないな。

【コード：21　新たな会員獲得への取り組み】

（メモ）昔からのねぷたの継承者であるJ氏のような「ねぷたに参加するのは好きだとくる」という受け身派の意見とE氏、I氏のような「ねぷたを好きにさせて、今後も継続的にねぷたに来てもらうために行動する」という能動的な若者の意見の食い違いと若者を応援するH氏の意見の相違。

J氏：綱引っ張るだけではなく、それこそ笛やったり太鼓やったり、作ってるときになにか手伝いして面白さを分かってもらって、面白みがついてくれば、仕事になるべく（弘前に）残ってやってみようってそういう気持ちを持ってもらえればいいのかなって。したはんで、出てこなければどうにもならない。今の笛の4年生とか段々習ってやってるそういう子たちを小屋さ来て紙張りでも手伝ってみればって声かけしてせば、中学校でも高校でもさ、小屋さ来て1時間でも金魚の紙はったり、何かをやって面白みがついてくれば、いいなって。したはんで、みんな集まるってせば笛の練習の時とか林間学校とか、そういうところだはんで、こういうのがあるんだよって、教えていけば（いいのかな）。

〈なんとか子どもたちが遊びに来る感覚でねぷた小屋にくるようになってほしいですよね。〉

そうだのさ。しかもうちほうもほら小屋の幕しめて（作業）しているはんで、あまり広げてがらがらってやってれば、迷惑にもなるはんで、しめてやってるはんで、あれはあまりよくねんだかもしれねな。だはんで、極力暑い日だば、半分開けてやるようにはしているんだけども、中見えるようにしている。今子どもたちも部活とかあるはんでなかなかあれ（来れないかもしれない）。だけども、ねぷたが好きだば来るんですよ。親がすきだばもっと来る。だはんで、親と一緒に来たりさ、小さいときからむったど親父と一緒に来たりしているはんで、いいのさね。だはんで、なにやっちゅんだべなって、私行ってなにかできるかなって思ってけるだけでもありがたい。来ればなにかと使われるかもわかんないけど。これやってけねなって。そういう話になるはんでさ。やっぱり来なければだめ。今年は同好会のメンバーの知っている子で中学生の男の子が2人来ていた。ぜひなんでもやりたいって。きっと高校になっても来るびょん。

E 氏：最近わぁが考えているのは、ほら、慰労会のときに思いっきりもめてたじゃん。あのときでも、結局は今一番わぁも考えていたのが、新しい会員。新しく出る人から、参加してくれる人から会員、会員から役員にどうしたら人が増やせるのかなって。プラス、そう増やすときに、少しでもねぷたにお金を残せればなって。新しい家も建ってきたり、人がまったくいない訳ではない。ちょうど、わぁの子どもたちの世代。一番上が小学校高学年で、結構みんな出てくれて、寄付もあげてくれるはんで。でも寄付よりも会員だよね。会員になってもらいたいってのが一番。そこから 10 年後も 20 年後もずっと参加してもらいたいよね。だって今は昔とちがって高校終わればみんな県外に出てしまう時代だじゃん。だから、参加しているこどもの親をどうやって取り込もうかなって新しいTシャツも考えたし。（でも、それもボツになってしまった。）今、全員そうだと思うんだけど、たぶんわぁの考えに賛同してくれるのは数人しかいないと思うんだけど。ねぷた好きだば来るっきゃってするわけ。でも、好きにさせるのはこっちの役目だじゃん。みんな最初から好きで来る人なんていないんだし。5，6 年やって（会員になるのが）1 人？くらいだじゃん。んなんだばまいじゃん。待つんではなくて、行動をとらないと。そういう考え方であったんだけれども。T シャツはこけてしまったけど、まだわぁはこけてない。

I 氏：うちが小さいことも笛を教えてくれる大人はうちのこと昔から知ってるから名前知っているからIちゃんって呼んでくれるから大きくなってもこうやって仲よくしてしゃべれているけど、今の子たちって、小さい子だけの世界でやってるから、視野を広げて周りの大人たちと遊んだりとかしゃべったりとか、まだ小さいからあれだけど、3 年生、4 年生くらいになったときにそういうことができれば、いいのかなって。中学生、高校生くらいになってくると大人たちと話すことが大切になってくるし。

うちらはまだ 30 代、40 代じゃないから年近いと思うし、うちらに話しかけてくれるでもいいから、そういうことがあればいいかな。そのために、名札作ろう。来年新しく来る子もいると思うし。お兄ちゃん、お姉ちゃんがやってるから来る子もいると思うから、そういう子たちの名前を覚えていかないと、知らない子ばっかり増えてきていて、だから、ねぷた本番になっても〇〇ちゃんこっちって言えば指示も通りやすいんだけど、君こっちみたいな。そういう状態になっているから、わかる子の名前が全然（いない）。

H 氏：（どうすれば会員を増やせるかというのは）答えがないのでどうすればいいかわからないところではある。実は E はやってるんだよね。新しい T シャツを作ったりとか。で。俺らくらいになると自分も年取ってきて周りの人も年を取っている人しかいなくて、その人たちに入ってくださいとは言えないのは課題。E は自分の周りの若い人たちを誘ったり参加してもらったりしている。

E も頑張っていて、それをどう俺らがフォローしてあげるかなんだよな。何かやっている人に対して、文句言うのは簡単だけど、新しいことをするには勇気がいることだし、やり方が間違っているんだったらこっちのほうがいいよってアドバイスすればよくて、アドバイスと文句は全然違うからね。

② 弘前ねぷた参加競技団体協議会におけるねぷた絵師育成の事例

『弘前ねぷたフォーラム開催』

弘前ねぷたまつりに出陣する有志団体で組織する弘前ねぷた参加団体協議会は平成 29 年 10 月 26 日、市民観光会館にて「弘前ねぷたフォーラム」を開催した。このフォーラムでは、「若手絵師が腕を磨く場を提供できるか?!」のテーマを下に絵師の育成について考える場となった[34]【東奥日報 2017 年 10 月 27 日（金）朝刊】（写真）。

（第三種郵便物認可）

絵師育成の可能性探る

弘前ねぷたフォーラム コンテスト要望へ

弘前ねぷたまつりに出陣する有志団体で組織する弘前ねぷた参加団体協議会（大中実会長）は26日、市立観光館で「弘前ねぷたフォーラム」を行った。参加した約70人は若手ねぷた絵師の活動状況や各団体ごとの起用の経緯などに耳を傾けながら、絵師育成の可能性を探った。同協議会では今後、若手絵師の登竜門として「前ねぷた絵コンテスト（仮称）」の開催を祭り主催者に要望する予定だ。

「若手ねぷた絵師がその腕を磨く場を提供できるか?!」のテーマで行われたフォーラムには10～30代の若手絵師10人が参加した。本体や前ねぷたに若手絵師を起用している各団体の実例が報告され、若手絵師側は自己紹介とともに、ねぷた絵を描き始めたきっかけや活動実績、祭りへの思いを1人ずつ述べた。

参加者は若手絵師の思いを受け止めつつ、祭りを支える伝統技能の継承に向け、若手活躍の機会を増やすための情報共有を図った。

ねぷた絵師の聖龍院龍仙さんは「（ねぷた絵は）初期は模写でいいが、自分のオリジナルの絵を描けるようになることが大事。私も足を止めるような絵を描いてもらいたい」と若手絵師にエールを送った。（山本恵子）

祭り関係者を前に、若手ねぷた絵師が祭りへの思いや活動状況などを語ったフォーラム

県高総文

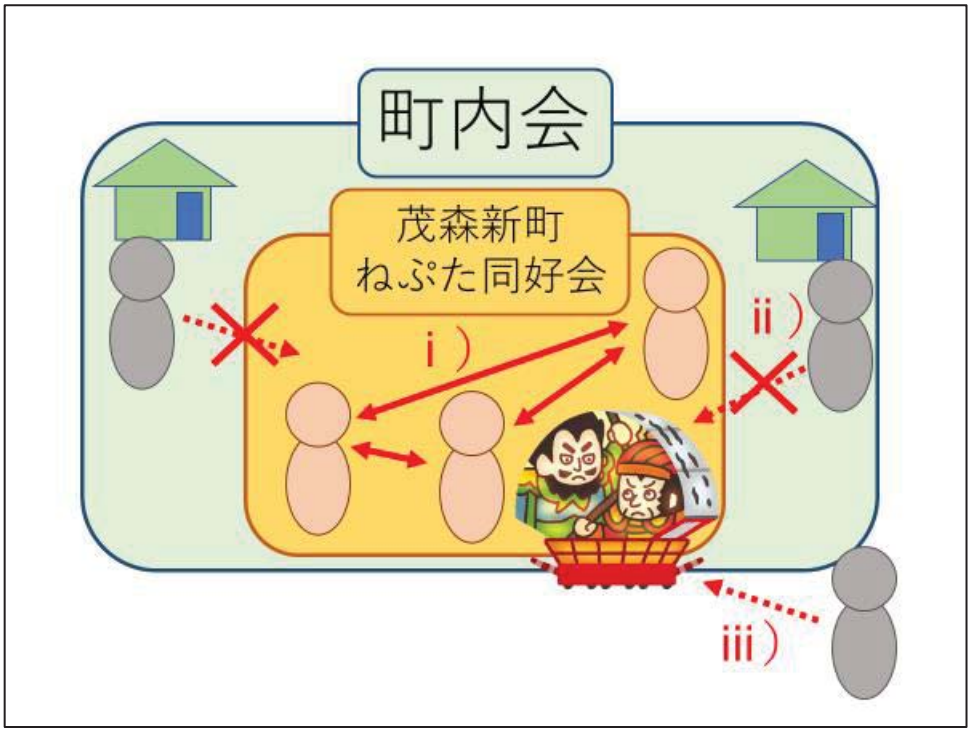
「第38回県高校総合文化祭」（県高校文化連盟、県教育委員会主催）が27日、八戸市公会堂で総合開会式を行い、開幕する。文芸部門は27日付で予選を通過した優秀作品を公表した。最終日の29日まで八戸ポータルミュー

写真 12　弘前ねぷたフォーラム「絵師育成の支援」

[34] 東奥日報「絵師育成の支援」2017 年 10 月 27 日付朝刊,

コード 17 からもわかるように、昔はねぷた絵を描きたいと願っても、披露する場がなかった。このフォーラムが出来てまだ間もないため、参加団体は 4 団体と少ないが、これから、どんどん若手絵師の育成にも町内だけではなく、ねぷた祭りに参加している団体からこのような取り組みが発信されることは今後のねぷた祭り継承の大きな役割を担うことになると考えられる。

③　調査から明らかとなったダイアグラム



ｉ）茂森新町ねぷた同好会の会員たちの繋がり

コード 8～11 からもわかるように、茂森新町ねぷた同好会の会員の繋がりはかなり強いといえる。さらに、コード 12 より、茂森新町ねぷた同好会と町内会の関わりもかなり強く、町内会の存続には、ねぷた同好会の存在は必要不可欠であることが明らかとなった。

ⅱ）茂森新町ねぷた同好会とそれ以外の町民との繋がり

現状として新たなねぷた同好会の会員が加入しないのは、コード 13 及びコード 14 より、ｉ）で示したねぷた同好会の会員たちの強い繋がりからねぷた同好会以外の町民にとって新たにねぷた同好会に加入することはハードルが高いことが考えられる。

ⅲ）他町民からの評価

コード 15 より、他町民からの茂森新町ねぷた同好会のねぷたへの評価によって、ねぷた絵師のみならず、茂森新町に住む住民にとっても自分の住んでいる町内に誇りが持てるということが明らかとなった。

2－5　小結　祭りの継承に向けての提案

（1）明らかとなった現状【成果】と【課題】と【新たな取り組み】

【成果】

①茂森新町ねぷた同好会の人々と子どもたちとの関わりによって学ぶことができる「人間関係」

コード５及び、コード６より、ねぷた同好会の人々は他人の子どもであっても、悪いことをしたら叱る。その叱る－叱られる関係があるからこそ、子どもたちは目上の人々との関わり方を覚えることができる。また、実際に同年代の子どもたちと同じねぷたを運行するという１つの目的に向かって活動することによって生まれる仲間意識や自分が生まれ育った地域の祭りを体験することで生まれる地域への愛着を育むなど、子どもたちにとって、ねぷた祭りに参加することは、利点があると言えるであろう。

さらに、コード７より若者にとっての茂森新町ねぷた同好会の大人は人生の先輩、先生でもあり、見守ってくれる家族のようでもあり、なんでも話せる友達のような存在であるという。このことから、子どもが祭りに関わる事で地域の大人と深く関わることができる。

②茂森新町ねぷた同好会のメンバーの絆とねぷた以外の活動。

ダイアグラムからも明らかとなったように、かなり強い絆で結ばれる。ねぷた以外でも、困ったことがあったら助け合い、地域の活動にも積極的に参加することが多い。

【課題】

③若者のねぷた離れ、「部活動」「仕事」「進学」

コード２からも明らかとなったように、小学生の子どもが中学生高校生になり、ねぷたに来なくなるのは「部活動」、高校在学中までは熱心に参加していても卒業後にねぷた祭りに参加しなくなるのは「仕事」や「進学」のために県外に出て行く人が増加しているためである。

④仕事への理解

コード３から、弘前市で仕事を行っていても、一般企業などで働いている人々はねぷたの時期に有休を取り仕事を休むことが多い。利益が目的の企業では、ねぷたへの参加の理解が進んでいないのが現状である。

⑤ねぷた同好会に所属していない茂森新町の町民との繋がり

ダイアグラムⅱ）現状②でも明らかとなったように、地域の繋がりが強い茂森新町ねぷた同好会のメンバーのコミュニティに他のねぷた同好会以外のメンバーが新たに同好会に

加わろうとするのは、敷居が高いことが明らかとなった。

⑥継続的にねぷたに参加する要因「家族」

コード 1 より、ねぷたに現在継続的に参加しているメンバーは、ほとんど家族の影響であることが明らかとなった。これは、家族がいることでのねぷたの参加のしやすさと、小学校から参加する人に比べて、幼少期からねぷた同好会の会員と接しているため、ねぷた同好会の人に接することへの抵抗感がないことが要因であると考えられる。

【新たな取り組み】

⑦若者がねぷた存続を願って起こす行動と、それを取り巻く課題、応援する大人

コード 20 より、子どもたちとの繋がりをさらに持ちたいと思い行動を起こそうとする若者いることが明らかとなっている。それを取り巻く課題と若者の取り組みを応援する大人との関わりが明らかとなった。

（2）提案

①新たなねぷた同好会の会員を増やす試み

ねぷた同好会以外の現状⑤からも明らかとなったように、茂森新町ねぷた同好会の強い繋がりのため、新たにねぷた同好会に所属しようとしている人はここ5年で1人しかいない。また、ねぷたに家族で参加することが参加の継続に影響していることが明らかとなったため、新たな会員の獲得のための提案を以下に示し、これらの対象は主に家族とする。

ⅰ）開いたねぷた同好会の活動のための情報公開

現状として、ねぷたの制作時、騒音、安全の目的で小屋の入り口を閉めて作業をしている。そこで、作業中だけでも小屋の入り口を開け、町民であれば誰でも自由に出入りできる環境を整えること、さらに、ねぷたの作業について町内の回覧板等で作業の進捗状況を知らせる。そうすることで、茂森新町の住民が茂森新町ねぷたへの興味・関心を引き出す。

ⅱ）茂森新町ねぷた同好会会員との交流

ⅰ）で行った情報共有等で引き出した興味関心から、ねぷたに参加するに当たっての人間関係のなどの不安を解消するための茂森新町ねぷた同好会の会員との交流の場を設けることで、ねぷたへの参加のハードルを下げる。

ⅲ）小屋に実際に見学に来てもらう

ⅱ）で仲良くなったねぷた同好会の会員と作業を供にすることで、ねぷたの制作作業の楽しさを知る。

ⅰ）～ⅲ）を段階的に行うことで、茂森新町の住民がねぷたに興味・関心が向上し、ねぷた参加へのハードルを下げることでねぷた同好会への会員を増やす。

3. 角館祭りやま行事からみる祭り継承の課題と可能性

3－1　3 章における調査概要

3－2　角館祭りやま行事の取り組み

3－3　角館祭りやま行事の継承意義と課題　―卒業研究から－

3－4　無尽講にみる地域コミュニティが角館祭りやま行事の継承に与える影響と継承の可能性

3－5　小結　祭り継承者が行うまち育て

3－1　3章における調査概要

(1) 本章の研究目的と分析方法

本章では2章で取り上げた「弘前ねぷた祭り」において、上げられた継承課題から、弘前よりも、人口減少が著しい地域である秋田県仙北市角館町に伝わる祭りの「角館祭りやま行事」の事例を取り上げる。この角館祭りやま行事は、人口減少の問題に直面しながらも、地域に伝統的に伝わっている無尽講という地域コミュニティシステムや学校との連携によって、祭りを守っている。ここの事例から、これからさらに祭りの継承が厳しくなっていくねぷた祭りの継承の可能性を探る。またこれら調査方法は、平成29年9月8日に行われた角館祭りやま行事への実地調査及び、角館祭りやま行事に幼少期から熱心に参加している計3名へのヒアリング調査に基づく。

(2) 分析方法

ヒアリング調査の分析方法は「1章　1－2　(3) 分析方法」に詳しく記載している。

3－2　角館祭りやま行事の取り組み

（1）秋田県仙北市角館町

仙北市は平成 17 年 9 月 20 日に旧田沢湖町、旧角館町、旧西木町と合併し誕生。秋田県の東部中央に位置し、岩手県と隣接している地域である。ほぼ中央に水深が日本一である田沢湖があり、東に秋田駒ヶ岳、北に八幡平、南は仙北平野へと開けている。地域の約８割（892.05 平方キロメートル）が森林地帯で、奥羽山脈から流れる河川は、仙北地域の水資源である。気候は、冬季には全地域で平均気温が氷点下を下回る厳しい寒さだが、地域の南北間では気候、降水量ともに差がある。人口は 27,337 人。（平成 29 年 4 月 1 日現在）総面積は、1093.56 平方キロメートルで、秋田県全体の 9.4%を占めている[35]。

角館町は城下町として発展してきた。仙北、北浦地方では応永年間（1394～1428 年）頃より戸沢氏が勢いを増し、戸沢盛安の代には豊臣秀吉から角館の地に 4 万 4 千石の大名として認められた。関ヶ原の戦い後の大名配置換えにより戸沢氏は常陸へ（後に新庄へ）、秋田には佐竹義宣が入り、角館にはかつて会津の雄であった名族芦名義勝（佐竹義宣の弟）が佐竹氏より 1 万 5 千石を与えられ治めることになった。1618 年、芦名氏は新しい城下町建設に取組み、武家町と町人町に分けられた町並みは 380 年余りを経た現在もほとんど変わっていない。その後、芦名氏は 3 代で断絶し、佐竹義隣（佐竹北家）が所預として入部し、幕藩体制の終る明治まで佐竹氏の時代が 11 代 2 百年余り続いた。芦名の時代が終わり、佐竹北家がはじまった際に「卸徒町」が「川原町」と「歩行町」に「卸厩町」が「谷地町」に「卸仲間町」が「小人町」に変化した。それ以外は現在でも多くの町内名が残っている（資料１）。

角館の町名には「表町下丁・上丁」や「東勝楽丁」等「丁」がついている所と、「岩瀬町」「下新町」等「町」がついている所があるが、これは、武士の住んでいた町内名には「丁」が付き、商人町には「町」が付けられたと言い伝えられている。つまり、地名に数百年前の名残が残っていると言える。城下町のうち、武家町は「内町（うちまち）」と呼ばれ、北に古城山、東に外ノ山、花場山の丘陵があり、西には桧木内川（ひのきないがわ）が流れ、南は火除けをはさんで「外町（とまち）」と総称される町人町が続いている※2（資料１）（文化庁文化財保護部（1991）、集落町並みガイド～重要伝統的建造物群保存地区～ 文化庁編、）。現在も日本随一の武家屋敷と 101 の蔵と桜並木の美しい「みちのく小京都」と呼ばれ、毎年多くの観光客が訪れる地域である。

---

[35] 仙北市公式ウェブサイト http://www.city.semboku.akita.jp/outline/index.html（2018 年 1 月閲覧）

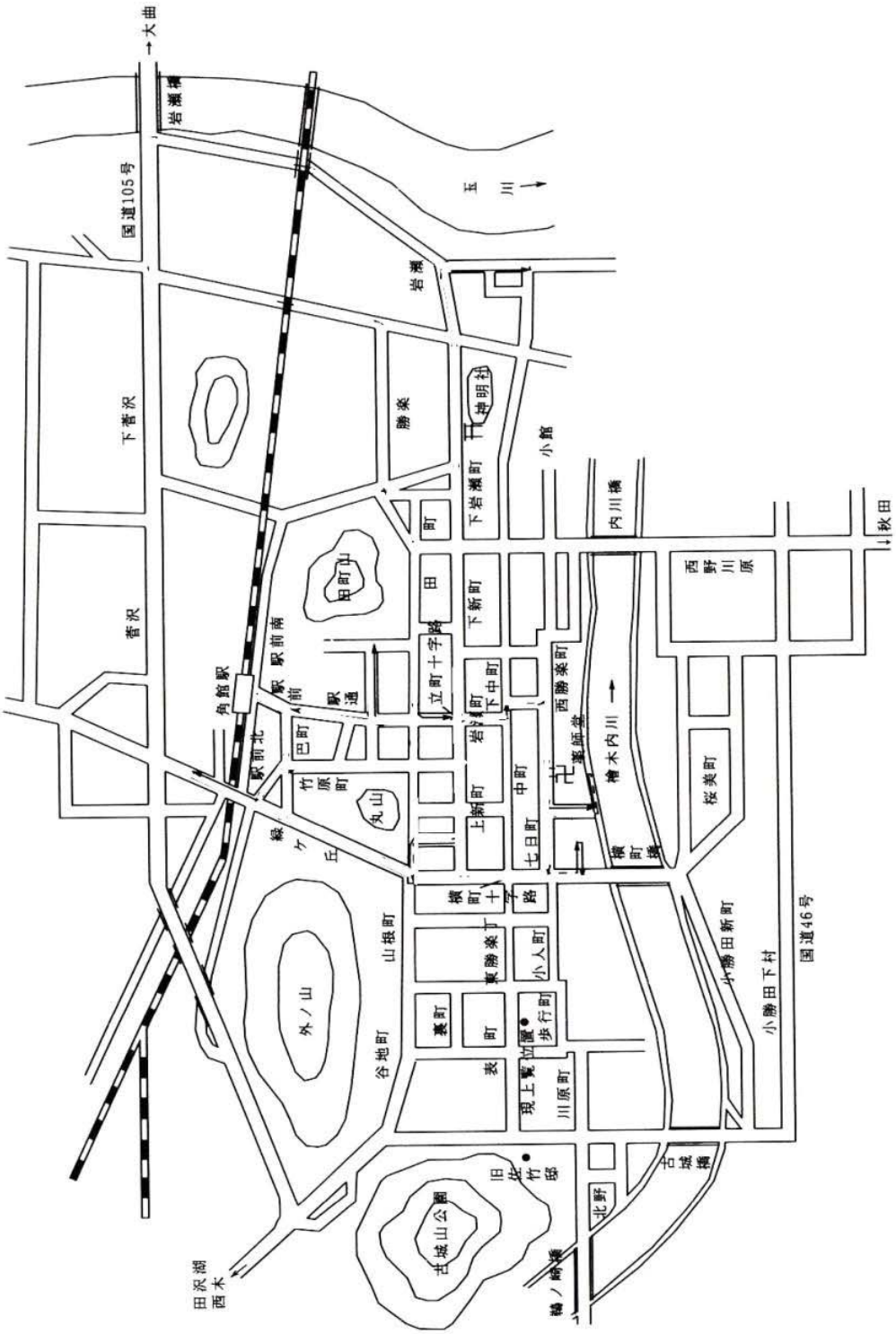


図　3　－　1　角館町内

出典：松崎 憲三（1997）、「角館の祭りやま行事の報告書」p..45

(2) 角館祭りやま行事

毎年 9 月 7 日～9 日 の 3 日間昼夜通して行われる角館神明社と薬師堂の祭典であり、現在まで約 350 年間続いている。もともと、「神」を祭る神明社と「仏」を祭る真言宗の薬師寺は別々の信仰であった。しかい明治維新の時に、仏教が迫害された。薬師堂もまた例外ではなく、この時に迫害され、それから免れるために神教であると一緒になった。その時、薬師堂の祭りであったやま行事も神明社の祭りと一緒に行われるようになった大変珍しい祭りである。曳やま同士で道を「譲る」・「譲らない」を争う「やまぶつけ（ヤマブッツケと記載されることもあるが本研究ではやまぶつけと統一する)」が行われる。このように激しくヤマ同士をぶつけたり、押したりする激しさから日本三大けんか祭りの一つとも言われている。

表 3 － 1 角館祭りやま行事日程

日時			行うこと
月	日	時間	
9	7	夕刻	神明社参詣
	8	午後	佐竹邸上覧
	9	夕刻	薬師寺さま参詣

祭り当日 3 日間の日程は以上の通りである。

祭りのルールは松崎（1997）[36]によると、以上の日程が普通の形であるが、これら 3 カ所についてはいかなる事情があろうとも参詣できければ、翌年にヤマを出せないルールとなっている。しかし、参詣の日程はやまぶつけの関係で 8 日のうちに薬師参詣を済ませてしまうヤマも多い。この参詣を終えるとヤマの行動は制約されず、宿敵のヤマを有利な位置でとらえてやまぶつけをする。そこに至る作戦と相手の動きを見極めるセンスとタイミングが左右すると述べられている。

[36] 松崎 憲三（1997)、「角館の祭りやま行事の報告書」p.55

（3）角館祭りやま行事の具体的特徴

①　やまぶつけ

ヤマは祭りにとって最重要な建造物である。角館に祭りの期間数か所設置される「置山（写真 1)」と各祭りの単位の丁内それぞれが出す「曳山（写真 2)」の 2 種類がある。ヤマを設置する目的は神をむかえる迎える依り代を高く掲げ、神社に参拝、氏子や町内の人にそのご利益を分け与えるというものである。曳やまには人形が表に 2 体、置やまには人形が 4，5 体ほぼ人間の実寸大のものが乗っている。もともと人間の中から神に一番近いと言われていた人間の 7 歳以前の稚児（子ども）をやまに乗せていたが、その代わりとして人形が用いられるようになったと伝えられている。

写真 13　置山

出典：松崎憲三（1997)、「角館の祭りやま行事報告書」p..11

写真 14　曳山

出典：松崎憲三（1997）、「角館の祭りやま行事報告書」p..11

写真 15　やまぶつけ

出典：松崎憲三（1997）、「角館の祭りやま行事報告書」p..11

現在のやまぶつけは、ヤマ同士を突き合わせてやまを押して相手のヤマに乗っかって押した方が勝ちとする傾向にあり、双方が乗っかりあって、相手方のそれを外そうとして揺する。この押す力と揺する力の関係で勝負が決まる。負けた町内のやまは道を譲らないといけない。こうしたやまぶつけは祭りが始まったときからすでにあったわけではなく、1925 年以降時々みられるようになり、現在のようなやまぶつけの方法が確立したのは 1964 年の東京オリンピックの前後であり、それ以前はただ大人数でぶつけて押し合う形のものであった[37]。

やま行事のやまの曳きまわしの特徴を中村は以下の a～d に示した[38]。

a　丁内がやまを出す単位である。但し、祭礼の時のみ、その運営主体としての機能を果たす。

b　準備の過程で気分が昂揚し、丁内意識に表われる。しかし、これは日常生活と別次元での激しい対抗であり、一種のゲームになっている。

c　丁内同士の対抗・交渉におけるかけひき、粘り強さの中に商人の主人として必要な気質（まちの気風）が反映されている。

d　古い町の組織やしきたりを巧みにアレンジすることにより祭礼が成り立っている。

この祭りは「けんか祭り」と呼ばれるほど、激しくやまをぶつけ時にはけが人も出るほど危険な祭りであるが、その祭りを行うために地域住民が 1 年うちのでも長い時間をかけて話し合いから準備、本番まで行っている。その原動力はもともと「神」への信仰を示すために行われていた祭りではあるが、現在は「神」への信仰のために行っていることよりも祭りを通して祭りでしか得られない達成感や中村氏が述べたように日常生活では味わえない別次元のような激しい対抗心を味わうために行われているのかもしれない。さらに、祭りという一つの目的をもって活動をしていく「コミュニティ」の中でのつながりもまた祭りの重要な役割と言えるだろう。

---

37 前掲・松崎 p.57

38 中村孚美（1961）「町と祭り～秋田県角館町の飾山はやしの場合～」

② 張番

張番は祭礼の期間中丁内の祭典行事を司るところで、その進行について最高の権限と責任を持ち、年番町が責任者となる（写真 4)。張り番が設定される場所は、個人の店、又は座敷及び小店（雨降り、雪降りの時の通路となる従来の土間）あるいはガレージ等を借用して作る。張り番外部の飾付けは、ガレージや小店の外の両側柱からハの字にススキ及びコマイで大縄型に組んで縄で結ぶ。足下にはエグレ（野芝）を敷いたり、祭壇の正面に「春日神明・天照皇太神・八幡神」などの掛け軸を飾っている。張り番はこの祭りにおいて絶対的な権限を持つ一方で、祭りのメインとなるヤマの曳き回しをスムーズに進行させる役割を追うという意味で、祭りの調整役、裏方でもある。数多いヤマの動きに目配りしながら祭りの雰囲気を盛り上げるのも張番の役目であり、いわば祭りの演出家とも言うべき存在なのである。加えて張番は祭りにおける所謂新酒所と同じ機能を持ち合わせている。即ち、寄付金のやりとりやお神酒の交歓等があって地域の人々があわただしく出入りしコミュニケーションの場ともなっている[39]。

写真 16　張番の様子

出典：松崎憲三（1997)、「角館の祭りやま行事報告書」p..11

[39] 前掲・松崎 p. 49

③　踊り・囃子

丁内にもよるが、ヤマの上に載っている囃子方や手踊りは角館町出身の人ではなく、周辺地域の農村部の方々にお願いしている丁内が多い。曳山を出している丁内とお囃子組のグループは以下の通りである（表３－２）（表３－３）。

出典：松崎憲三（1997）、「角館の祭りやま行事報告書」p..49

表　３　－　２　張番・曳山一覧表（平成８年）①

	丁内張番名	曳山名	囃子踊り	人形場面
1	北部	北部	西木村上桧木内 鈴木組	源平魁躑躅 扇屋熊谷 無官太夫平敦盛、熊谷次郎直実
2	谷地町	山根 谷地町 旭会	田沢湖町神代 穂月会	南総里見八犬伝 芳流閣の場 犬飼現八、犬塚信乃
3	山根			
4	旭会			
5	横町西部	横町	西木村小山田 佐々木組	「太平記」 多々良浜の合戦 足利尊氏、菊池武敏
6	横町東部			
7	上新町	上新町	田沢湖町神代 津嶋組	黒塚 安達ヶ原鬼女、阿闍利祐慶
8	中町	中央通り	西木村宮田 嶋村組	義経千本桜 すしやの段 梶原景時、いがみの権太
9	下中町			
10	七日町	七日町	民族歌舞団 わらび座	歌舞伎十八番 矢の根 曽我五郎時致
11	西勝楽町	西勝楽町	角館町雲然田中 秋月会	歌舞伎十八番 矢の根 曽我五郎時致
12	桜美町	桜美町	角館町 角館おやまばやし 秋桜会	源平盛衰記 屋島の合戦 佐藤継信、能登守教経
13	西野川原	西部	角館町雲然田中 秋月会	五条の大橋 弁慶と牛若丸
14	西勝楽町二区			
15	岩瀬町	本町通り	田沢湖町神代 神代芸能保存 嬉遊会	一谷嫩軍記 須磨の浦の場 熊谷次郎直実、無官の太夫敦盛
16	下新町			
17	南校通り	下岩瀬町	田沢湖町神代 松竹会	歌舞伎十八番の内 毛抜 粂寺弾正、忍の軍平
18	下岩瀬町			
19	岩瀬上丁	岩瀬	田沢湖町神代 穂月会	関ヶ原の合戦 小早川金吾秀秋、大谷刑部吉継
20	岩瀬本丁			
21	岩瀬中丁			
22	岩瀬浜丁			
23	岩瀬玉川丁			
24	大塚	大塚	角館町雲然 角館飾山囃子 保存会	幕末風雲録 池田屋騒動 近藤勇、吉田稔麿
25	駅通り	駅通り	田沢湖町神代 穂月会	ひらがな盛衰記 逆艪 樋口次郎兼光、畠山重忠

出典：松崎憲三（1997）、「角館の祭りやま行事報告書」p..11

表　3　－　3　張番・曳山一覧表（平成８年）②

	丁内張番名	曳　山　名	囃子踊り	人形場面
26	駅　　前	駅　　前	角館町岩瀬 角館町飾山囃子 手踊り会	菅原伝授手習鑑 車引 藤原時平、松王丸
27	菅　　沢	菅　　沢	菅沢若者	田楽狭間の合戦 今川義元、服部小平太
28	東　　部	東　　部	角館町 角館おやまばやし 秋桜会	義経千本桜 鳥居前 狐忠信、武蔵坊弁慶
29	東部上新町	—	—	—
30	栄　　丁			
31	大横丁			
32	小勝田新町			
33	岩瀬下夕野丁			

置山・舞台一覧表

	丁内名	出し物（人形場面）	場所
大置山	岩瀬町	稲葉山城の合戦 木下藤吉郎、斉藤竜興、 小牧源太、織田信長、小一郎	立町 十字路
	岩瀬	大坂夏の陣 千姫救出の場 豊臣秀頼、大野修理、千姫、 坂崎出羽守、徳川家康	神明社前
	七日町西勝楽町	義経千本桜「大物浦」 源義経、武蔵坊弁慶、 平和盛（新中納言知盛）	薬師堂前
舞台	横町	歌と踊りのグランドショー	
	岩瀬	踊るサンライズショー	
	岩瀬町	郷土民謡と手踊り	
	駅通り	歌と踊りのバラエティーショー	

（表 3－2）（表 3－3）より、平成 8 年において、角館町の住民でお囃子や踊りを担っている丁内は 7 丁内、それ以外の農村部から招いているのは 10 丁内である。

この理由を自身の卒業論文から探る。
安藤大輔氏へのヒアリング調査（2015）より、
『基本的に山の祭りはおはやしや踊りをやるのは「農村部」の人々。昔は小作の人たちが多かったが、踊りの組や囃子の組をつくらせてその人たちを丁内で呼んでやまの上で踊らせて手間を払って、祭りの中で飲み食いさせてということが角館の祭りの基本である。丁内の人々は運行に関することを主にやる。ひとつには“再配分の仕組み”というのがあり、祭りは自分たちも楽しむがみんなで楽しむために！手間払ってそういう人（農村部の人）に楽しんで参加してもらうということもある。』

これは、角館祭りやま行事に幼少期から参加し、張番の役職にも就いたこともある安藤大輔氏のヒアリング調査である。このように、踊り、囃子は角館町の人が担うこともあれば、田沢湖やその周辺の地域の人々に頼み、祭り自体についても町の人だけが楽しめばいいのではなく、他の村の人やたくさんの人に祭りを楽しんでもらいたいという考えが昔から強かったことが読み取れる。

また、現在行われているおやま囃子の特徴として、楽器の編成は以下の通りになっている。

ⅰ）大太鼓　　1
ⅱ）小太鼓　　2（1 人は大太鼓と兼ねる場合もある）
ⅲ）鼓　　1
ⅳ）笛　　1
ⅴ）摺鉦　　1（唄を兼ねることもある）
ⅵ）三味線　　1

以上のⅰ）～ⅵ）までの 7 人構成であるが、ヤマに乗った場合には演奏する場所が狭いために、小太鼓を 1 名として 6 人構成が多いとされる。

④曳山を出す際の役割

角館で育った子どもたちは自分の丁内のやまに付き、様々な役割を通して成長してく。[40]

・少年係【小・中学生のリーダーであり、年下の子どもたちに祭りのルールや子どもたちの教育係としての役割がある】
・交渉員【やまをぶつけるときにどちらが通るのか、交渉をする係】
・若頭　【交渉もしつつ、やまの責任者になるための経験を積む】
・責任者【やまを取りまとめる責任者】

これらの役割を子どもたちの成長と共に徐々に経験を積んでいくことによって、責任者の役割を果たせるようになる。

[40] 富木耐一（1982）「角館のお祭り」p..57～70

3－3　角館祭りやま行事における継承意義と課題　―卒業研究から―

（1）角館祭りやま行事による継承意義

地域コミュニティが希薄化してきている中で、角館にとっては角館祭りを継承していくことが祭りという一つの目的に向かって活動するコミュニティを形成し、そのコミュニティは結果として地域コミュニティのとしての役割を持つようになる。

また、角館祭りやま行事に毎年参加し、少年係から責任者と自分の役割を持てるようになると、祭りの中に自分の居場所ができるようになり、責任感が生まれる。さらに祭り独自のルールを覚えて、参加し様々な人々との交流や様々な場面で自分の判断で動いていかなければいけなくなったため、協調性や自主性など生涯学習としての役割もある。それらが積み重なって角館に対して愛情を持てるようになり、帰属意識がでてくる。その帰属意識があってこそ、自分の大好きなまちをもっと住みよいまちにしていこうと考えが生まれるはずである。

（2）角館祭りやま行事における継承課題

①　子どもの減少に伴う、後継者不足

近年、子どもたちが減少に伴い、2008 年 4 月には角館にあった「西長野小学校」「角館東小学校」「角館西小学校」3 校が統合し「角館小学校」が誕生した。このように子どもたちの人口減少や若者たちの流失が顕著であることも意味している。また、角館祭りやま行事のヤマの上に乗せる人形師の石橋正則氏へのヒアリング調査（2015）より、

『私は広目屋で人形作りを学んだが、本来、人形作りを継ぐのはその家系の人のはずだった。しかし、広目屋には残念ながら娘さんしかいなかったため、師匠に人形作りを継がないかと言われた。自分は小さいころから人形作りが好きで、学校帰りによく人形作りを見学に来ていた。その光景が今はなくなってきている。学校の見学でもたまに人形作りの見学に来るが、見学に来るのは多くが角館以外のところから来ることが多く、逆に地元の子どもたちがどこで人形を作っているかなど知らないことが多い。』と述べている。

石橋氏へのヒアリングから、祭り当日に参加する人のみならず、角館祭りやま行事でも欠かすことの出来ない人形作りの後継者不足による祭りの存続問題にも影響することが明らかとなった。

3－4　無尽講にみる地域コミュニティが角館祭りやま行事の継承に与える影響と継承の可能性

3－4 では、角館に昔から伝わる無尽講というシステムがどのようなものであるのか。また、そのシステムの現在の用いられ方を文献調査からまとめると同時に、角館祭りやま行事の人形師の無尽講である「伝七会」のメンバーである 3 名へのヒアリング調査から、無尽講というコミュニティが祭りの継承にどのような影響をもたらすのか明らかにし、2 章で課題となっているねぷた祭りにおいてこの角館祭りやま行事の事例から、祭り継承の可能性を探る。

(1) 角館に昔から伝わる無尽講の概要

近年あまり聞かれなくなった地域の金融システムに、無尽講（むじんこう）というシステムがある。発祥は鎌倉時代で、西日本では「頼母子講」（たのもしこう）、東日本では「無尽講」、沖縄では「模合」（もあい）などと呼ばれている。10～20 人単位の小さなグループを作り、毎月お金を積み立ててお互いに融通しあう関係のことを指す。

例）無尽講はまず主宰者の信用のおける仲間を集めてスタートする。例えば 10 名が集まり 1 人毎月 10 万円ずつ、1 年間（12 ヶ月）に渡って持ち寄ると毎月合計 100 万円が集まるので、参加者の 1 人がそれを受け取る。これが毎月行われ、12 ヶ月後に 10 人目が 100 万円を受け取って終了する。この一連の流れを無尽講と呼ぶ。

また、A さんが急に 100 万円を要する急用ができてしまったとすると、普通は、金融機関などからお金を借りなければならないでしょうが、頼母子講に参加していれば利息を支払うことなく 100 万円を集めることが出来る。つまり頼母子講は、金銭的に困った時、お互いに助け合う互助会のようなものであると言える。講（グループ）は基本的に同じ地域に住む者同士で作られるので、その地域内でお金を流通させることができるという、経済的な効果もある。このシステムは山梨甲府市や合津などでも盛んに行われている。

角館でも今なお、無尽講が毎月行われている。これは、上記したようなお金をやりとりする金融システムとしての無尽講ではなく、お酒を酌み交わしながら、お金を積み立てて、年に 1 度旅行したり、貯めたお金で社交ダンスパーティを行うなど、様々なコミュニティとしての役割もある。

（2）角館祭りやま行事の事例

①石橋正則氏へのヒアリング調査概要

幼少期から人形を制作する「広目屋」に見学に行っていたことをきっかけに弟子入りし、現在は広目屋のリーダーとして、平成29年度は30体の人形を制作し、角館祭りやま行事に花を添えている。

さらに、高校生～20歳くらいまでは囃子組の一員としても活動してきた。現在も民芸店を営みながら、祭りの時期になると人形作りに尽力している。また、角館歴史的景観審議会会長としても活動している。

表　3　－ 4　石橋正則氏へのヒアリング概要

対象者	石橋正則氏
日時	2017年12月26日　13：00～14：10
場所	いしばし民芸

②佐藤励氏へのヒアリング概要

佐藤氏は奈良県の大学で現代美術を学ぶ。お父さんが婿で角館に来てから、角館祭りやま行事でやまの上に乗る人形作りを始めた。お父さんが角館以外から来て人形作りを始めたことに対して、角館の人々は快く受け入れてはくれなかった。大学時代も夏休みになると稼業の人形作りを手伝いに帰省していた。現在は、看板広告業をしながら、人形作り、彫刻家として活動する一面を持つ。

表　3　－ 5　佐藤励氏へのヒアリング概要

対象者	佐藤励氏
日時	2017年12月26日　14：45～15：45
場所	外町交流館

③加賀屋潤一氏へのヒアリング概要

幼少期から祭りに欠かさず参加し、約10年前から町内の財政難のため、人形を自身の町内で作ることとなった。その際、小さいころから広目屋さんの人形があこがれていたため、寸法なども同じにして完全なコピーみたいな人形を作っている。その作り方を学ぶために、現在も広目屋に手伝いに行きながら勉強している人物である。現在は祭りの現役（ヤマに付くこと）からは引退し、曳山を客観的に見守り安全を守る役割を担っている。

表　3　－ 6　加賀谷潤一氏へのヒアリング概要

対象者	加賀屋潤一氏
日時	2017年12月26日　16：00～17：00
場所	小絆纏

以上の 3 名へのヒアリング調査より、人形師としての活動を通して得たこと、人形師同士が交流する伝七会を中心にヒアリング調査することによって、祭り継承における無尽講の可能性を明らかとする。

（3）調査結果「コードメモ」

ヒアリング調査から明らかとなったことは以下のコード 1～5 である。

【コード 1：様々な無尽講の概要】

（メモ）佐藤氏のヒアリング調査から、家族の中でも、ほとんどみんなが個人で毎月仲のよいメンバーで無尽講を行っている。このコミュニティがあることが、生きる活力になっている。加賀屋氏のヒアリングから昔から角館に根付いている賭け無尽の役割は衰退し、コミュニティの場としての役割が中心になった交流の場となっていることが明らかとなった。

佐藤氏：無礼講ではないんだけど、母親も父親もおじいちゃんもおばあちゃんも無尽講だっていえば、みんな出ていく。その日はお父さんが一人のときがあっても無尽講だもんなっていう理由が立つっていうのは不思議だよね。お母さん方にその無尽講があるっていうのが不思議だよね。会社の付き合いではない、お祭りのやつは会費は安く、会館とったりして安く飲んでいるんでね、やっぱりほかの無尽講だったらいいものを食べたりしているけど、それが楽しみだったりする。道楽半面。それがなんか人のつながりが強いと思う。毎月、同級会とかやる意味あるのかって思うけど、なんかそこが不思議。だけど集まればお祭りの話したりとか、たわいもない気心の知れた人たちだから笑いあってやってるから、生きる活力だもんね、楽しいもんねやっぱり。

加賀屋さん：あまりよくないけど、賭け無尽というものもある。ためておいて今月だれとかもらうというのがあるが、ただ飲んで、会費だけでというのもあるし。賭け無尽はうちの店ではあまりない。どこかの社長さんとかいまだにやっているんではないか。

【コード 2：無尽講と祭り】

（メモ）無尽講があることによって、そのときにヤマを出すためのお金の積み立てを行っている町内もあれば、そうでない町内もあるが、祭りのための無尽講を行っているのはどの町内も共通であった。祭りについて話し合う場が無尽講であり、総会で最終決定する前の下打ち合わせの段階は祭りの無尽講の中で行われていることが明らかとなった。

佐藤氏：（町内の祭りのための）無尽講の中で、今年のお祭りどうしようという話し合いもあるし、今年のお祭りはどうだったとか反省だったり、これがよかったとかそういう話をしているのかな。くだらない話もしているんだけどね。去年は最悪だったから。ちっちゃいヤマもってきて、こうぶつけたらこう動くんだという話を真剣にしていたからね。1 年間。変なのって、そんな話して馬鹿じゃないの？って思うだろうけど、でもそれをやった成果がでたというか。そうそう、知らない人がいればやっぱりけんかになったりもするし。決してきれいごとではないからね。

無尽講と祭りの関係は深かったというか、そういうシステムをちゃんと使ってというか。無尽講をつかって、勉強会みたいな 1 か月に一回集まって祭りについて話し合おうという会を作ろうというのは一番無尽講が手段としていい。他の人にしたら、お食事会とかお茶会とか女子会、定例会とかだけど、角館はそれが根付いているのかな。

自分たちの町内は不思議で 4 町内で一緒にやっている町内なので、各 4 つでも何日か無尽講をやっているんですよ。その他に昨日 25 日の全体の無尽講がある。今は 50 歳過ぎの人はなしになっている。その日は例えば 12 月だとしたらお祭りの話をすることじゃないんだけど、開けばお祭りのことを話すんだよという日。20 人くらいの人は参加するね。これは月一回毎月 25 日って決まっている。どんなことがあっても。積み立てもしている。それは個人的な積み立てなので、例えば 3000 円＋飲み代 1000 円で会館ってところでやっているんだけど。1 年 3000 円を積み立てれば 36000 円が自分の手元にくるのを 1 月から始まったとしたら 1 月にもらえる人も 12 月にもらえる人もいるって感じ。でも、毎月何人かって決まってて、なんか今月出費あるとか旅行に行きたいという人が「今月もらいたい」と言って（もらう）無尽講のシステムは残っている。もう一つは会費にしています。12 ヶ月で 12000 円が会費に回すようにしているひともいます。

石橋氏：俺たちがやっているときは、ただ飲んでいる。お祭りの時にかかるお金は年会費をとっていた。年１万 5000 円を総会時に払ってくださいって感じだった。それ以外で無尽をやっている。町内の無尽がお祭りのことを話す。あそこを今年はこうしようとか無尽の中で話し合って、そこを決定するってすれば、総会に出したりしないといけないけど、そこに行くまでの下打ち合わせは無尽でする。
昔から祭りを継承していくために、無尽講で集まってコミュニケーションというか絆は毎月集まることで結束していくことはあると思う。ヤマ出して組み立て始めれば毎日飲んでいる。神事だから飲まないと。

加賀屋氏：月１回、各町内で月末とか月初めとか日程は違うんだけれども、うちの町内は第２土曜日、会館で集まっている。我々はお店を使ってもらいたいんだけども、お店を使うとなるとお金がかかるので、積み立てっていうのがあって、毎月 2000 円、年間で 24000 円それをためて町内に寄付するっていうか、お祭りのために使う。そのほかにお店でやるってなると 3000 円 4000 円かかってしまうし、遠い人になると代行で帰らないといけないとなると若い人が集まりにくくなる。それを回避するために、会館で１人 4000 円 5000 円で、自分たちで買い物しに行っている町内がどこも多い気がする。
うちの町内は月 4000 円（飲み代 2000 円、積み立て 2000 円）。新年会忘年会とかそういう特別なことがあると、うち（お店）を使ってくれることもあるけど、俺も自分の町内の若者だから、いい会館の予算でいいからって言って頑張っておまけしてあげているところもある。

【コード３：人形師の集まりである伝七会の概要】

（メモ）伝七会は角館元町長の高橋雄七氏が人形師の技術向上のために、2014 年頃から行うようになった無尽講である。この無尽講は、現在 11 名で構成され、現在は様々な町内から 2 ヶ月に 1 度集まって人形のことに限らずお祭り全般について語り合う場となっている。

佐藤氏：伝七会の入ったきっかけは角館祭りやま行事が国の無形文化財もユネスコの文化財に登録されたことも一番の立役者でもある雄七さん【角館元町長　高橋雄七さん】が、病気をして、あの人も若い人と（祭りを）ただ伝えたかったというよりは話したかったというけども、その人に集められたんだよね。で、石橋さんもだし自分もだし、人形師が世代交代をして若返ったので、もう少し技術を向上させていくためにどうしたらいいかという感じでこれはどうなんろうか、あれはどうなんだろうかという感じで、都合いいときに３か月に一回とか雄七さんの家で語り合った。2 ヶ月に 1 回ただの飲み会のようになっているんだけど、内容は本気でそういうことを考えている。町内の垣根を越えて、なかなかそういう機会（お祭りについて話し合う）はないな。

おもしろかったね。角館の祭りだけでなくて、角館の樺細工とかを「これ見れ」っていいものを見せてくれたり、角館の良さを教えてくれた。聞きたいことはもっとあったけど聞けなくて、もう少し（聞きたかった）なってところはある。

すっとしゃべっている人ではなくて、すごく偉大な人だったから、呼んでもらえるだけでうれしかったし、いろんな事を聞けたし、言われたことで、その年以来、人形のこととか逆にこだわりを持ったり、こうしないといけないんだということとか、人形師としての向上にはなったかな。この人（雄七さん）だったらどう考えるべと考えるようにはなった。尊敬はしている。

石橋氏：伝七会は始まって来年の春（2018 年）で 4 年目くらい。今は、人形のことも話しているんだけど、保存会の状況とかお祭り全般の話をしている。今は奇数月でやっている。2 ヶ月に一回。お祭り過ぎたら、写真持ち寄ったり、いつだったか古い写真持ち寄ったりしたな。お酒飲みながら語り合うので話も弾む。加賀谷さんのお店で飲み無尽だから、積み立てなし。年齢層は 35 歳くらい。一番年配の方は、俺だ 53 歳。比較的若い会だね。

【コード４：伝七会に所属してからの影響】

（メモ）角館で人形を作っていたのは、もともと広目屋と蔦谷という団体だけだった。そこに、佐藤氏のお父さんが人形作りを独自に始め、「きがた」を始めたが、佐藤氏にとってこの伝七会によって、他の団体の人に人形の相談ができるようになったのは、角館の人形作りの今後にも大きな影響をもたらすと考えられる。さらに、角館祭りはヤマをぶつける町内同士の対抗心を競う祭りであるため、他町内との関わりはほとんどないが、この伝七会で得たことを自分の町内にも持って帰ってそこで共有して新たな取り組みが生まれていることからも、伝七会の役割は大変大きい者であると考えられる。

佐藤氏：今（他の人に人形について）伝えるというより、町内の垣根を超えて「廃れてきたんだけど実は大事だよね」っていうこととか。「昔この人こういっていたな」っていうことをしゃべってここは取り入れたほうがいいなってこととか（話し合う）。この前面白かったのが、他の町内もやっているんだけど、お祭りの時に「お祭り饅頭」というものを配っているんだけど、昔それ配られたよなって。懐かしいとかっていうことも言っていたんだけど、今子どもたちに饅頭配っても喜ばない。けど、石橋さんが言っていたのが、ハレの日なんだから、饅頭を配ることが古いかもしれないけど大事なことなんだよと言われたので、来年やってみようかなと思っている。やっぱり、ハレの日という意識になるんだよなって。先月のいった言葉がなるほどなって思って。それから一か月経った時に歴代の責任者とか若い者にしゃべったら「それいいな」ってうちの町内にもお饅頭屋さんがあるので、そこさ頼めばいいんでね？それ予算にすればやったほうがいいんでねが？ってなってたぶん（来年のお祭りは）やると思う。そういう（祭りに関する）細かなことを話をすることが非常に大事なのかなと。

伝七会に参加するようになって自分の意識が変わった。石橋さんと自分が人形のことがなんか御法度みたいなところがあったんだよ。要は商売気質なわけよ。でもそれは、別にお客さんを取り合ったりしているわけではないんだけど、そういうことを話すのが御法度な雰囲気があったんだけど、そこに雄七さんがぽっと入ってきてそれをぐっとまとめて、だから別に人形批判をするわけではなく、話したいなってこと（を話す）。よく石橋さんに相談するようになったね。「今年こういう人形上げようと思っているんだけど、石橋さんどう思いますか？」って聞くと、「いいんじゃない？」って言ってくれるし、本当に尊敬しているかな。

佐藤氏：やっぱり、広目屋の良さを本当に分かっているのは石橋さんだけなので、自分として。あの感性はやっぱり尊敬しますね。やっぱりそういうことを話せたのが一番。それと角館町にとって財産といえる人がいなくなったことによって。自分たちから、こうした方がいいとか、昔の写真見てこうだったんだなって共有できるようになってきたかなというのが変化かな。人形も変わったし。変化というより自分が行動しているので、自分の町内って「送り」がなかったんです。なかったというか予算の関係もあったんだけど、でも今自分が奉仕していますもんね。それが大事だというものは奉仕してでも、角館の人形はこうなんだというのを見せつける、特に自町内なのでそれが融通きくっていうのもあるし、その辺はいいのかなって。すごく影響あるし説得力がでてきたというか。実はみんなとこういう話をしていたんだよと言えば、みんなへーって。自分たちも知らないことを俺が聞いたりするので、少なからず町内には町内ごとに影響が出てきたのではないかと思います。すごくいいこと。いろいろな町内の人が集まるからこそ町内批判ではなく、それを超えた良くしようと考えている人の会なので、とってもいいと思います。

【コード 5：人形師継承の今後】

（メモ）人形を継承するために、町内外の人が手伝いに来たり、新たな後継者が現れていることが明らかとなった。

石橋氏：（広目屋は 2017 年は 30 体の人形を作ったが）人形は顔とか髪の毛とかは、俺のほかに 2 人、あと本体を組み立て始めると他に 2 人。そのほか、時間空いていれば来てくれるのが、他に 2 人。全部ではメインになる人が 4 人とサポート的な人が 3 人。町内はいろいろなところからくる。伝七会のメンバーの中でも 2 人くらい手伝ってくれたりしている。

【2 年前に人形師の後継者がいないという話も伺ったんですが、その後、増えたりとかしましたか？】

石橋氏：そういう意味では、伝七会のおかげもあるし、もう一人は同級生の仙台にいる息子が夏休みの期間人形を作りたいと来てくれたり。28 歳くらいだけど、今その人はヤマの上に上がったりメインで頑張っている。将来戻ってくる予定。

3-5 小結　祭り継承者が行うまち育て

(1) 生まれる愛着

昭和 51 年に角館地区が「重要伝統的建造物群保存地区」（文化財保護法）に選定されたことから始まり、今でも保存地区内の歴史的文化財の保存、継承が住民の努力により取り組まれている。この歴史的景観の保全から、仙北市らしい歴史的景観を守り、育て及びつくることをもって、愛着を持てる美しい市とすることを目的として、「角館町歴史的景観審議会」が発足している。その景観審議会の会長を務めているのが、人形制作を行う「広目屋」の代表である石橋正則氏である。石橋氏のように、祭りによって育てられた人材が、生まれ育ったまちを守るために行動を起し、まちを守っていくために重要な役割を担っていることからも、祭りによって生まれたまちに対する愛着が行動を起すきっかけになり得ると言える。

(2)人材の育成

また、角館町で廃業していた電気屋であった空き店舗を利用し行った「想 nic Art」プロジェクト、それをきっかけとして次年度から数回行われた「ネオクラシック！カクノダテ！」では、角館町で毎年行われている祭りである角館祭りやま行事において繋がっているコミュニティを活かして、それまでは使われなくなった蔵を外に開かれた空間とした。この企画を行ったのは、角館祭りやま行事の中でも人形作りを行っている佐藤励氏である。この佐藤氏は、平成 28 年度文化庁が秋田県立美術大学との共同事業で行った「マネジメント人材育成事業　AKIBI plus」[41]において講師を務め、想 nic Art やネオクラシック！カクノダテ！のコミュニティを活かしながら新たに下の世代のまちのために行動を起そうと考える人材を育てている。

(3) 祭り継承のキーとなる学校と地域の連携

人形師として活動するきっかけとなるのは、学校での連携である。学校の授業での取り組みによって、人形師など様々な伝統技術の伝承者を育ててきた。一方で、現在は学校と祭り技術伝承者との連携はほとんど無く、技術伝承者も新たに増やすことが難しくなっている。技術の伝承者を育成するためには、学校との連携が必要不可欠であると言える。

[41] 秋田公立美術大学「AKIBI plus」　akibi-plus.jp/kakunodate2016/（2018 年 1 月閲覧）

Ⅲ　結論

伝統文化継承によるまち育て

【結論】

学校教育における津軽三味線クラブの事例から、以下の図 4-1 が明らかとなった。ここから、学校教育での津軽三味線クラブの取り組みから児童の地域への愛着形成が行われていることが明らかとなっている。子どもたちは地域への愛着を育み、将来伝統芸能の継承者になるきっかけになることもある。

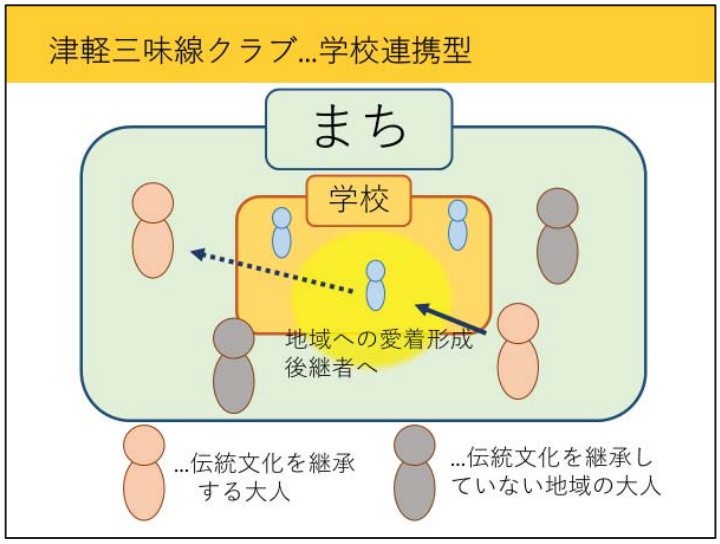


図　4　－　1　伝統文化継承による波及効果　学校地域連携型

さらに、青森県教育委員会中南教育事務所の工藤氏、神田氏へのヒアリング調査から、以下の 3 点が明らかとなっている。子どもたちは学校教育の中で三味線など伝統文化を体験しないとそれ以外で体験する機会がないこと。教える側も子どもたちに伝統芸能に興味を持って欲しいという想いがあって学校という立場で子どもたちに伝えていること。学校教育で外部講師として地域と連携することによって学校内で完結しつつある教育を地域の教育力が子どもたちに与える影響は大きく、地域の人材を学校教育の中に取り入れ、様々な体験活動を子どもたちが行うことは価値が高いこと。外部講師として地域の大人が学校と関わる事による伝統芸能の可能性を検討し、伝統芸能継承のためには、学校との連携が重要であることが明らかとなった。

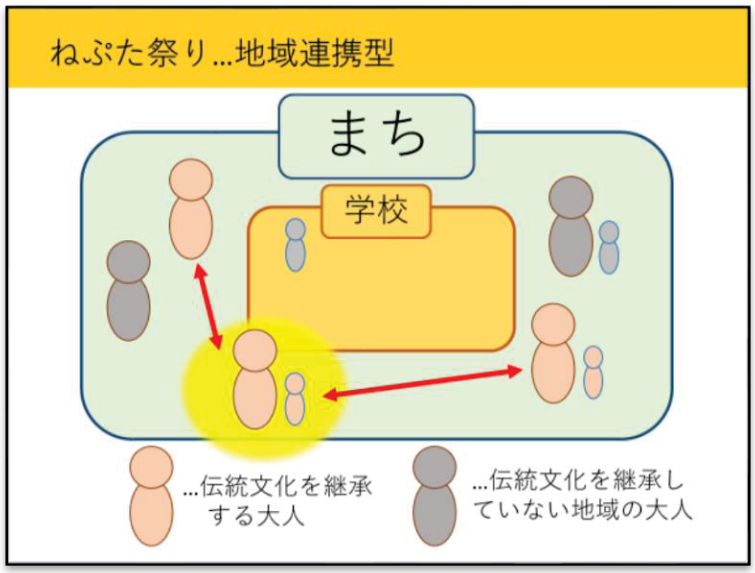


図　4　－ 2　伝統文化継承による波及効果　地域連携型

また、地域で継承してきた弘前ねぷた祭りの事例から、地域の中の町内単位で行う祭り継承が町内会のコミュニティを超えて一つの強い繋がりを持つこと、さらに、この祭り継承には地域継承の核とも言える家庭内と祭りの関係性が重要であることも明らかとなった。

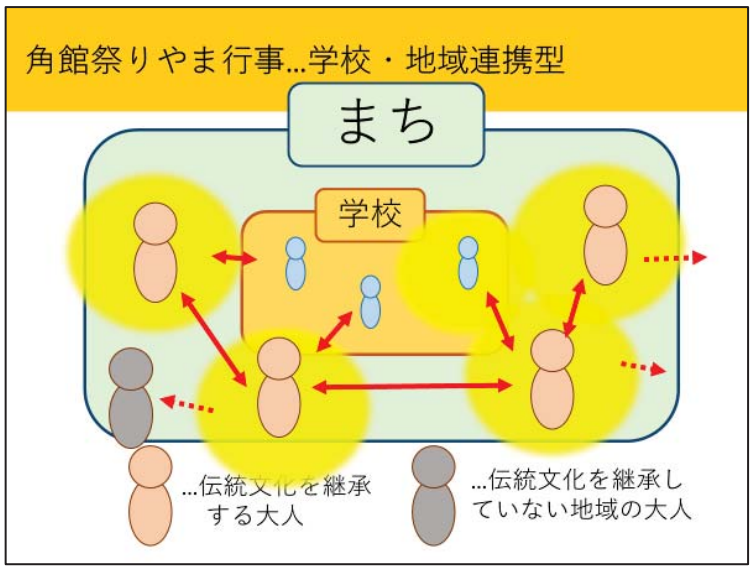


図　4　－ 3　伝統文化継承による波及効果　学校・地域連携型

さらに角館祭りやま行事においてはかつて地域と学校との連携が強く、そこから生まれた祭り継承の人形師などの技術伝承者が、祭りをさらに良くするために尽力し、祭り以外でも様々な立場からまちを育てていく活動を行っていることが明らかとなった。しかし、今では地域での技術継承者育成は行われているものの、学校による取り組みは衰退してい

る現状が見受けられ、今後祭りを継承する上で、地域だけではなく学校と地域の連携が祭り存続には必要であると考えられる。弘前市においても、伝統文化を継承することで、人々が繋がり、地域コミュニティが継承されていることから、まちが育っていると言える。一方で、弘前市の伝統文化の取り組みにおいて、学校間で伝統芸能の取り組みの情報共有が行われていないことや、地域の人材が学校で外部講師として伝統文化を伝える仕組みがあっても、その活動は学校単位で任せているため、学校の取り組みの差が著しいこと、祭りに対する意識の強すぎるコミュニティが新しく祭りに参加しようと考える住民にとっては高いハードルとなっていることが課題として上げられる。学校と地域による双方向から伝統文化を守り育てていくことで、今後継続的に伝統文化が継承されるばかりか、さらに伝統文化の発展からまちが育っていく可能性がある。今後、いかに地域間の連携を深め、伝統文化を継承する地域の人材を育てていくのか、継続的に考えていく必要がある。

学校－地域連携により、伝統文化継承の目指す姿としては以下のことが言える。

①　伝統文化をきっかけとした地域連携による子どもの地域への愛着形成〈図 4-4〉

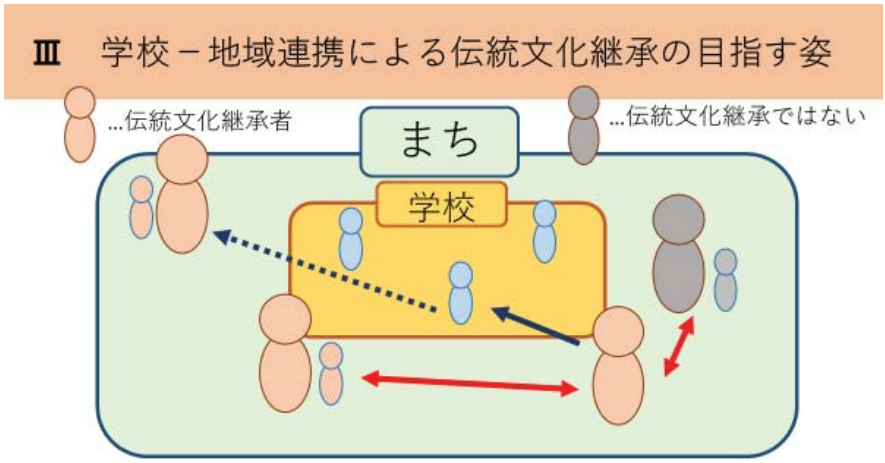


図　4　－　4　学校－地域連携により、伝統文化継承の目指す姿①

学校のみで完結していた児童の育成を、伝統文化の技術を持つ地域の人材との連携により、その児童がまた伝統文化の継承者となり得る。

②後継者となった人物が学校へ関わるようになること〈図 4-5〉

③伝統文化継承による住民同士の繋がりの強化〈図 4-5〉

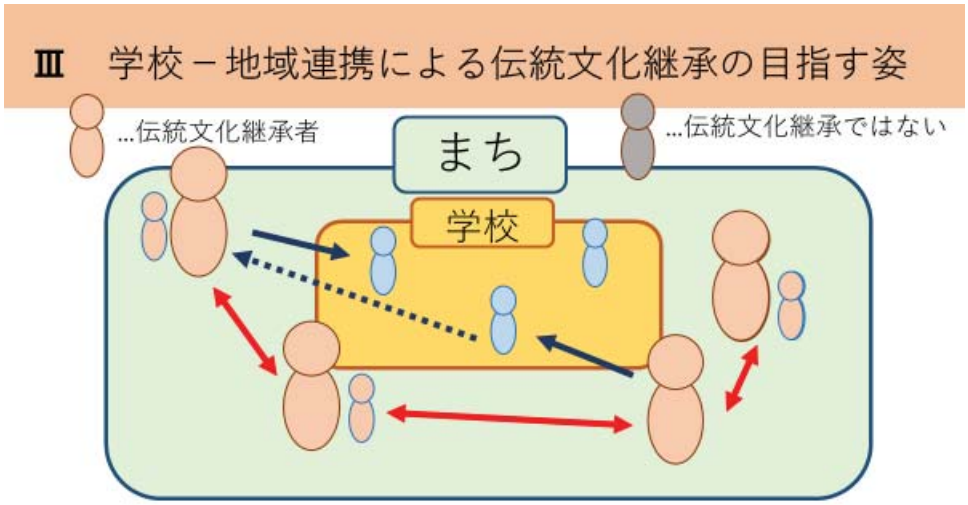


図　4　－ 5　学校－地域連携により、伝統文化継承の目指す姿②、③

①で伝統文化に触れた児童が成長し、自らが後継者として再び学校という場で、指導者として活動するようになること。さらに、伝統文化を継承することによる住民同士の繋がりの強化によって、さらなる継続的な伝統文化の後継者育成が望まれる。

④強化されたコミュニティから生まれる新たな取り組みによるまち育て〈図 4-6〉

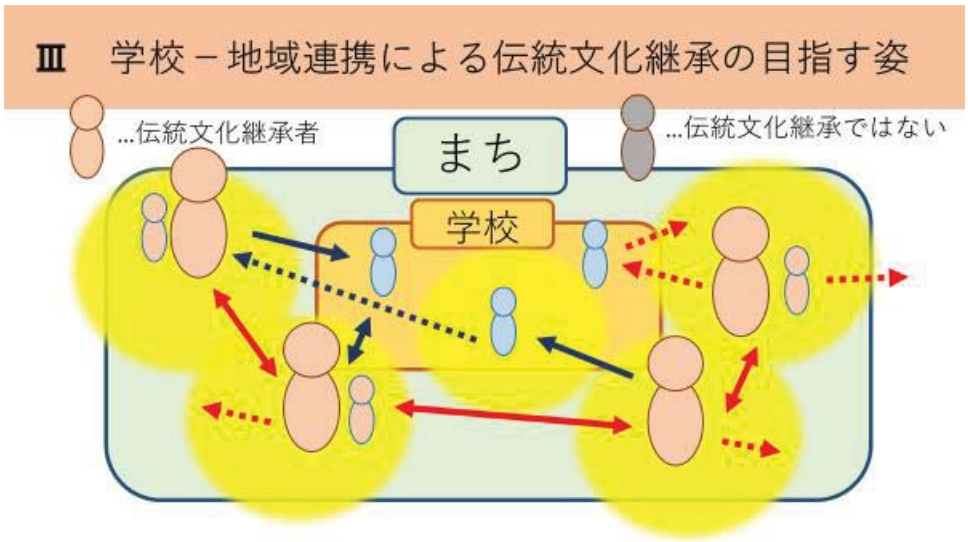


図　4　－ 6　学校－地域連携により、伝統文化継承の目指す姿④

その伝統文化継承により強化されたコミュニティによって生じた繋がりを活かして、さらにまちを良くしようという活動が生まれ、それを継続していくことが、まちを育てていく可能性になり得る。

【引用・参考文献】

・文化庁文化財部伝統文化課（2012）「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業について」
・臼井　喜法（2005）「地域活性化のためのソフトウェアとしての伝統芸能」
・山下祐作　（2005）「伝統文化が息づく地域社会の維持・継承」
・国土交通省（2005）「平成 17 年度　国土交通白書」
・文化庁文化財部（2015）「平成 27 年度文化財行政講座資料　文化財補助金関係資料」
・今井　大介（2015）『「伝統文化」を大切にし、地域で学ぶ強み生かす子どもの育成（1 年次）―京都に根ざす「伝統と文化」を体感し、関心を深める学習プログラムの提示―』京都市総合教育センター
・西島　千尋　（2015）「天狗がつくられる村―富山県高岡市 C 村の獅子舞調査―」　日本福祉大学福祉社会開発研究所
・柳田圀男（2013）「日本の祭り」　角川ソフィア文庫
・折口信夫（1995）「折口信夫全集 2」　中公文庫
・松平誠（1983）「祭りの文化　都市が作り生活文化のかたち」
・大辞林 第三版
・ブリタニカ国際百科事典　小項目事典
・青森県企画政策部「郷土に関する意識調査等の結果報告書」
・冨田晃（2015）「楽器は語る」一般財団法人千里文化財団
・『「Let's Try！総合学習」2004 年版』時事通信社
・文部省「小学校学習指導要領」（1968）
・小林誠（2012）「学習指導要領からみる部活動に関する考察」早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊 19 号－2
・芦田徹郎（2001）、「祭りと宗教の現代社会学」世界思想社
・松平誠（1983）、「祭りの文化」有斐閣選書
・弘前市（2015）「弘前らしさとまちづくりの課題」
・青森県観光国際戦略局　（2016）「平成 28 年青森県観光入込客統計」
・茂森新町ねぷた同好会（1998）「茂森新町ねぷたの歩み」
（2018 年 1 月閲覧）
・松崎 憲三（1997）、「角館の祭りやま行事の報告書」
・中村孚美（1961）「町と祭り～秋田県角館町の飾山はやしの場合～」
・富木耐一（1982）「角館のお祭り」

【参考・引用 URL】

・「アーツカウンシル東京の事業紹介　外国人向け伝統文化・芸能短時間体験プログラム」（2017）
https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/what-we-do/creation/festivals/traditional-experience/18068/（2018 年 1 月閲覧）
・及川典子　（2013）「伝統文化とは」JTCO 日本伝統文化振興機構
www.jtco.or.jp/tradition_culture/?id=5（2017 年 11 月閲覧）
・青森県立金木高等学校　ホームページ
http://www.kanagi-h.asn.ed.jp/index.html（2018 年 1 月閲覧）
・弘前市ホームページ www.city.hirosaki.aomori.jp/school/2015-0216-1841-286.html（2018 年 1 月閲覧）
・「オープンデータひろさき」 https://www.opendata-hirosaki.jp/ （2018 年 1 月閲覧）
・弘前ねぷた参加団体協議会「コンテスト審査基準」http://neputa.jp/?page_id=285（2018 年 1 月閲覧）
・仙北市公式ウェブサイト http://www.city.semboku.akita.jp/outline/index.html

【謝辞】

本研究は、青森県弘前市を中心に育まれてきた伝統芸能である「津軽三味線」の小学校における取り組み、同じく弘前市の祭りである「ねぷた祭り」および、仙北市角館町の「角館祭りやま行事」を事例に取り上げ、実際に芸能や祭りの継承者の方々のお話を伺いながら執筆させていただきました。

本研究を作成するに当たっては、幼少期から茂森新町ねぷた同好会の笛や太鼓の音と供に育ち、さらに幼少期から津軽三味線を習い、筆者自身も弘前市立朝陽小学校の津軽三味線クラブに所属していた経験が大きいといえます。それから 15 年以上の時を経て筆者も茂森新町ねぷた同好会の一員となり、さらに津軽三味線クラブに所属する児童に指導する「伝統文化の継承者」となりましたこと、「伝統文化を継承することによるまち育て」と題しまして論文を執筆できましたことを感慨深く感じております。実際に筆者自身が弘前ねぷたの制作から運行携わってきた中で、右も左もわからない私に茂森新町ねぷた同好会の皆さまには家族のように接していただき、ねぷた祭りの楽しさのみならず、人との関わりの大切さを教えていただいた気がします。

さらに、学校での津軽三味線クラブの取り組みをまとめる際にアンケート、ヒアリング調査を受けていただいた、朝陽小学校の津軽三味線クラブの 7 名の児童、クラブをまとめる朝陽小学校教員の神隆子氏、津軽三味線奏者の多田あつし氏、青森県教育庁中南教育事務所の工藤良信氏及び神田昌彦氏

弘前の地だけではなく、卒業研究の際からお世話になった角館祭りやま行事に携わっている石橋正則氏、佐藤励氏、加賀屋潤一氏、後藤悦朗氏、後藤端子氏、後藤朗氏、安藤大輔氏、安藤雄介氏、他たくさんの角館町の方々

計 19 名以上の方々のご協力を得て、本論文が完成いたしました。論文作成に関してお世話になった皆さま、大変ありがとうございました。

副査の李先生、安川先生、ご多忙の中、論文を最後まで読んでいただき、またご指導いただきましてありがとうございました。

また、楽しいときも苦しいときも供に乗り越えた住居学研究室のみなさま、そして、小学 4 年生の頃から津軽三味線奏者として応援してくださりながら、筆者が大学入学からは、たくさんの活動の機会を与えてくださった北原先生には、深く感謝し、尊敬しております。

この論文は、伝統文化という地域の資源を「家庭」「学校」「地域」の 3 者が相互的に継承していくことでまちもまた継続的に育っていくことを前提に執筆してまいりました。この論文を書き上げた今ここがスタートラインであり、筆者もまた伝統文化の継承者として今後とも奔走し続けていくつもりです。これからも伝統文化継承によって弘前市が発展することを願って謝辞とさせていただきます。

平成 30 年 1 月 29 日　太田彩香